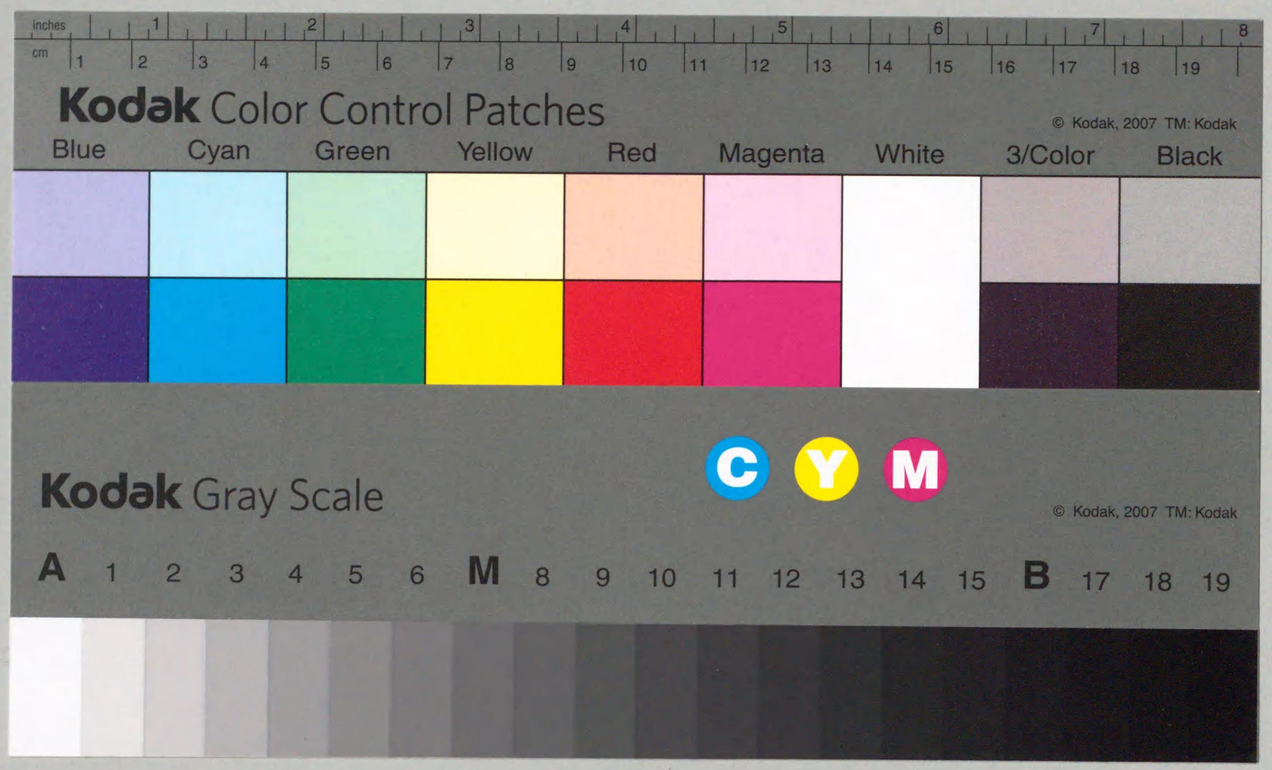

031.2
Ko725
00712697

+1G4-1

神宮司廳藏版

古事類苑

神祇部二

發行所 表現社内 古事類苑刊行會

古事類苑

神祇部第二册目錄
神祇部二十四　祈年祭
神祇部二十五　祈年穀奉幣
神祇部二十六　月次祭 神今食祭附
神祇部二十七　新嘗祭上
神祇部二十八　新嘗祭中
神祇部二十九　新嘗祭下 相嘗祭附

031.2
K0725

國立國會圖書館藏書
41.11.28

712697

神祇部三十
鎭魂祭 齋戶祭　招魂祭 附
鎭火祭
鎭花祭
道饗祭 四角四境祭 併入
大殿祭
神祇部三十一
郊祀
雜祭
淫祀 淫祠 併入
神祇部三十二
祓禊
神祇部三十三
大祓 御贖節折　六月祓　臨時大祓 附

神祇部三十四
觸穢
神祇部三十五
祈禳
神祇部三十六
神符
神祇部三十七
神拜
神祇部三十八
奉幣 朔幣 併入
神祇部三十九
幣帛 神馬 附
神祇部四十
神饌 直會 併入

神祇部四十一
祭具
神祇部四十二
太占
龜卜 雜占附
神祇部四十三
神道上
神祇部四十四
神道下
神祇部四十五
神職上
神祇部四十六
神職下
神祇部四十七

社僧
神祇部四十八
神宮寺
神祇部四十九
神木
神祇部五十
神使

古事類苑

神祇部二十四

祈年祭

名稱　一
起原　一
祭神　一
祭日及時刻　二
齋戒　二
祭式　二
祝詞　二
頒幣　二
延引　三
停祭　三
一年再祭　三
供神料物　三
獻神馬　同
獻鷄猪　三

奉行官人　三三
官人雜給　三七
戒飭神官　同
雜載　三九

古事類苑

神祇部二十四

祈年祭

祈年祭ハ、訓ジテトシゴヒノマツリト云フ、毎年二月、神祇官及ビ國司ノ廳ニ於テ、年穀ノ豐穰ヲ神祇ニ祈請スル儀ナリ、文武天皇ノ慶雲三年、甲斐、信濃、越中、但馬、土佐諸國ノ十九社、始メテ祈年祭幣社、始メテ此ニ見ユ、其後桓武天皇ノ、延曆十七年、亦祈年ノ幣帛ヲ奉ルベキ神社ヲ定メラレシカドモ、其數詳ナラズ、次デ宇多天皇寬平五年ノ太政官符ニハ、京畿外國大小通計五百五十八社トアリ、以上ハ皆官幣ナルベシ、醍醐天皇ノ延喜式ニ據レバ、總テ三千一百三十二座ニシテ、其內神祇官ニ於テ祭ル所七百三十七座ナリ、而シテ幣ヲ案上ニ奠スル大社三百四座アリ、之ヲ案上官幣ト云ヒ、（此後後一條天皇長元三年、山城國乙訓郡大原野神社ヲ祈年案上官幣ニ列シ、鳥羽天皇保安元年、同國愛宕郡太田神社モ亦同ジク案上官幣ニ列セラレタリ、）然ラザル小社四百三十三座アリ、之ヲ案下官幣ト云フ國司ノ祭ル所、又大社百八十八座、小社二千二百七座アリ、是ヲ國幣ト稱ス、官祭國祭共ニ毎年二月四日ニ於テ之ヲ行フ、其齋戒ハ、散齋三日、致齋一日ニシテ、散齋ノ前一日、所司ヲ召シテ其由ヲ宣示シ、翌日平旦、所司神祇官ノ齋院ニ就キテ點ヲ受クルヲ例トス、

此祭ハ、傳ヘテ云フ、天武天皇ノ四年二月ニ始マルト、次デ文武天皇ノ大寶令ニモ略、其儀式ヲ制定セラレシカドモ、其最モ詳ナルハ、清和天皇ノ貞觀儀式、醍醐天皇ノ延喜式等トス、其

儀當日幣物ヲ神祇官ノ齋院ニ陳シ、神祇官人ハ御巫等ヲ率キテ西廳ノ座ニ就キ、大臣以下ハ北廳ノ座ニ就キ、式部亦群官ヲ率キテ南廳ノ座ニ就ク、既ニシテ大臣以下官人所司、共ニ降リテ廳前ノ座ニ就キ、中臣進ミテ祝詞ヲ宣ス、大臣以下諸司拍手兩段、然ル後各〻本座ニ復ス、次ニ忌部ハ神祇伯ノ命ニ由リテ幣帛ヲ頒チ、事畢リテ大臣以下諸司各〻退出スルヲ例トス、祭ニ前ツコト十五日、忌部及ビ木工ヲシテ供神ノ調度ヲ作ラシメ、又當日ニハ、京畿ヨリ白鷄一隻、近江國ヨリ白猪一頭ヲ貢シ、左右馬寮ハ各〻被馬十一匹ヲ進ム、鷄猪ハ御歲神ニ奠スル所、神馬ハ伊勢兩宮ヲ始メ、御歲神、高御魂神、大宮女神、及ビ山口水分等ノ神、總テ二十二社ニ獻ズル所タリ、而シテ此等ノ調度幣物ヲ頒ツニハ、伊勢兩宮ヘハ特ニ使ヲ遣シ、其他ハ諸社ノ祝等ヲシテ、當日祭庭ニ來リ受ケシムル例ナリシガ、嵯峨天皇ノ頃ヨリ、既ニ諸社ノ祝等祭庭ニ參會セザルモノ多ク、醍醐天皇ノ延喜ノ頃ニ至リテハ、祝等ノ懈怠益〻甚シク、偶〻參會シテ幣物ヲ受クルモノモ、之ヲ私シテ其社ニ奉ゼズ、神馬ノ如キハ、郁芳門外ニ於テ直ニ市人ニ沽ルニ至レリ、サレバ屢〻官符ヲ下シテ、或ハ神官ノ緩怠ヲ誡メ、或ハ國司ヲシテ此等ノ非違ヲ監察セシメ、又程途遼遠ノ地ハ、特ニ當國ノ幣ヲ以テ之ニ充テシメ、若クハ朝集使等ニ附シテ之ヲ送ル等ノ制ヲモ設ケラレタリ、サレド後世朝威ノ衰フルニ及ビテハ、此等ノ制亦遂ニ行ハレズ、龜山天皇ノ文永ノ頃ニハ、徒ニ幣物ヲ神祇伯ノ許ニ放擲シテ願ミザリシカバ、之ヲ諸社ニ進ムルニ由ナクシテ、奉行ノ官人ハ其處置ニ困ミシコトサヘアリ、加之儀式モ亦朝廷ノ陵夷ト共ニ、漸ク衰頽ニ趣キ、往時日時ヲ延引スルハ觸穢ニ止マリシガ、後世ハ往々用途ノ不足ニヨリテ行ハレザル事アリ、應仁ノ大亂ヲ經テ、遂ニ文明以後全ク廢絕ス、近世東山天皇元祿ノ頃、再興ノ議アリシニヤ、祈年祭、神嘗祭等ノ舊儀ヲ藏スルモノハ進獻スベシトノ命アリシカドモ、遂ニ再興ニ至ラズ、文明以後凡ソ四百年ヲ經テ、今上

天皇ノ明治二年ニ至リ、始メテ再興シ給フコトヽナレリ（寛政年中行事ニ、二月四日祈年穀祭ト見エタレドモ、恐クハ空文ナラン、月次祭以下亦同ジ、）

當日參集ノ官人ハ、神祇官ハ伯以下悉ク奉仕シ、太政官ハ大臣以下參議以上、其他宮內、大舍人寮等ノ官人モ亦各〻參集ノ定員アリ、而シテ神祇官人以下悉ク鬘料ヲ賜ヒ、中臣ハ祝詞ヲ宣スル料トシテ庸布短帖ヲ賜フ、其他供神ノ調度ヲ作ラシムル諸工人ニハ、各〻衣食ヲ賜フ、上卿ヲ務ムル時ハ、事畢リテ後、神祇官ノ史生、官掌、及ビ太政官ノ召使等ニ、私ニ饗祿ヲ給スルヲ例トセリ、

〔令義解ニ神祇〕仲春祈年祭（謂祈猶禱也、欲令二歲災不作一、時令順度、即於二神祇官一祭之、故曰二祈年一、）

〔貴嶺問答〕祈年祭（トヒゴトノ）令所レ點如此然而只讀二祈年祭一（トキヅシ）

〔祝詞考上〕祈年祭（登志ノ）其比乃（ツマ）初春に種子を水に浸より、冬をさむるまで、一ところなる經故也、里と唱ふ、年とは、五穀の中に專ら稻をいふ、

〔類聚名物考神祇十二〕祈年祭　としごひのまつり

年は即ち穀なり、有年豐年などいへる年も、みな稻穀のみのりのよきをいふ、よてすなはち年穀ともいふ也、稔年と相通ふ意あり、延喜式の祝詞に、みとしといふは、みな年穀の事也、

〔塵添壒嚢抄十〕祈年祭事（トシゴヒノマツリ）付本古事

祈年祭事、〇中略其本古ヲ云ハ、周禮曰、祈年求二豐年一也、又神祇令曰、謂祈猶禱也、祈年ヲハ、トシゴヒノ祭トヨム也、大神宮已下三千一百卅二座ノ神ヲ祭テ、年災ヲ祈リ除カルヽ故ニ、祈年祭ト申侍也、

〔周禮註疏二十四〕凡國祈二年于田祖一、〇中略註、祈年祈二豐年一也、疏、〇中略釋曰、祈祈二豐年一者、義取二小祝求二豐年一、俱是求二甘雨一使二年豐一、

〔毛詩註疏十八大雅〕祈年孔夙、方社不莫、箋云、我祈二豐年一甚早、祭二四方與一レ社又不一レ晚、

〔倭訓栞前編十八〕としごひまつり　祈年祭の訓也、周禮に、祈年は豐年を求る也と見えたり、され

ば祝詞にも、二月に御年初將賜とみゆ、說文に、年は穀熟也といへり、今伊勢參宮に年越詣といへる事は、此事より謬れる成べし、

〔說文解字七上〕季　穀熟也、以禾千聲、春秋傳曰、大有年、

〔年中行事大概〕祈年祭

二月四日に、神祇官にして、三千餘座の神をまつりて年穀をいのるによりて、としごひのまつりとはいふなり、

〔年中行事歌合〕右　祈年祭　二月四日

秀長朝臣

祈てふ年の緒ながき君が代を三ちゞあまりの神やうくらん

右祈年祭は、大神宮以下三千一百三十二座の神をまつりて、年災を祈申さるゝによりて、年ごひの祭と申侍也、

〔おもひのまゝの日記〕二月にもなりぬ、〇中略きねんのまつり、きねんこくの奉幣など、しきのまゝにおこなはる、

四日

〔公事根源二月〕祈年祭

是は大神宮以下三千一百卅二座の神をまつらせたまふ、其所のたしかならざるも有、國々におのおの幣をつけらる、諸國にも年ごひのまつりをば行ふ也、周禮に、祈年は豐年をもとむるなりとみえたり、〇中略大かた祈年の祭、月次兩度、新嘗祭をば四ヶ祭とて、國の大事とするなり、

〔樵談治要〕神をうやまふべき事

一年中のまつりは、二月四日の祈年の祭より始まる、此祭はあきつしまの中にあまたをたれ給三千一百三十二座の神に、御てぐらのつかひをたてらるゝ物也、其中に七百三十七座には、神祇官よりこれを獻せらる、のこり二千三百九十五座には、六十餘國の國のつかさ、おの〳〵うけたまはりて幣帛を奉る也、年中の災難をのぞき、國土の豐饒をいのるによりて、祈年のまつりとは名付たる也、

〔古語拾遺〕昔在神代、大地主神營田之日、以牛宍食田人、于時御歲神之子、至於其田唾饗而還、以狀告父、御歲神發怒、以蝗放其田、苗葉忽枯損似篠竹、於是大地主神、令片巫志止止鳥肱巫今俗竈輪及米占也占求其由、御歲神爲祟、宜獻白猪白馬白鷄以解其怒、依教奉謝、御歲神答曰、實吾意也、宜以麻柄作挿挿之、乃以其葉掃之、以天押草押之、以烏扇扇之、若如此不出去者、宜以牛宍置溝口、作男莖形以加之、是所以厭其心也以慧子蜀椒吳桃葉及鹽班置其畔、古語以蓋曰二部須仍從其教、苗葉復茂、年穀豐稔、是今神祇官以白猪白馬白鷄祭御歲神之緣也、

〔二十二社註式〕祈年

人皇四十代天武天皇白鳳四年乙亥二月甲申始之

〔年中行事秘抄二月〕四日祈年祭事廢務有前後齋

官史記云、天武天皇四年二月甲申祈年祭、

〔年中行事抄二月〕四日祈年祭事

天武天皇四年二月甲申祈年祭

〔公事根源二月〕祈年祭

四日

天武天皇四年二月にはじめて此祭有、

〔大日本史神祇四〕按、本書並爲三年二月四日甲申、然推長曆、二年二月甲申實爲其四日、〇中略其祭用四日者蓋始此、

〔祝詞考上〕祈年祭、〇中略此祭は崇神天皇の御代に始れりとすべし、其御代、萬の大神を崇み給ふまゝに、天地の神うべなひなして、雨風時にしたがひ、百の種つものなりぬといふ事、紀にしるし

祭神

され、且下の風神祭にも見えたり、

或説に、此祭は天武天皇の御代に始といへるはよしなし、大寶令の常行の祭に擧られしをおもふに、儀式などは天武の御代さだめ給ひけむ、

○按ズルニ、天武天皇ノ四年ニ祈年祭アリシコト、日本書紀ニ見エズ、崇神天皇ノ朝ヲ以テ此祭ノ起原トナセルモ推測ノ説タリ、今倶ニ錄シテ後考ヲ俟ツ、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年閏正月庚子、是日甲斐、信濃、越中、但馬、土左等國一十九社、始入二祈年幣帛例一、其神名具二神祇官記一、

〔類聚國史十神祇〕延暦十七年九月癸丑、定可レ奉二祈年幣帛一神社、

〔類聚三代格一〕太政官符

應レ殊加二檢察一敬二祀禮典一四箇祭事

右檢二案内一、二月祈年、六月十二月月次、十一月新嘗祭等者、國家之大事也、〇中略預二此祭一神、京畿外國大小通計五百五十八社、因レ茲特致二潔齋一、慎令二祭祀一、〇中略

寛平五年三月二日

〔延喜式一四時祭〕二月祭

祈年祭神三千一百卅二座

大四百九十二座三百四座案上官幣一百八十八座國司所レ祭

小二千六百卅座四百卅三座案下官幣二千二百七座國司所レ祭

神祇官祭神七百卅七座

奠二幣帛一案上神三百四座宮中廿座、京中三座、畿内山城國五十三座、大和國一百、廿八座、河内國廿三座、和泉國一座、摂津國廿六座、東海道伊勢國十四座、伊豆國一座、武蔵國一座、安房國一座、常陸國一座、東山道近江國五座、北陸道若狭國一座、山陰道丹後國一座、山陽道播磨國三座、安藝國一座、南海道紀伊國八座、阿波國二座、

不レ奠二幣帛一案上祈年神四百卅三座並小、宮中六座、畿内山城國六十九座、大和國一百五十八座、河内國九十座、和泉國六十一座、摂津國卅九座、

國司祭祈年神二千三百九十五座

大一百八十八座東海道廿三座、東山道廿七座、北陸道十九座、西海道十三座、山陰道八座、

小二千二百七座東海道六百八十座、東山道三百卅座、北陸道三百廿八座、山陰道四座、南海道百廿四座、西海道六十九座、

〔類聚符宣抄一〕太政官符神祇官

應レ預二祈年祭幣帛一大原野神社肆座事

右祈年祭者、京畿外國名神靈社、皆享二禮奠一、各預二幣帛一、而件社自漏二彼祭一、已忘二如在一、今加二斟量一、盡レ備二其數一、以後立爲二恒例一者、官宜承知、依レ宣行レ之、符到奉行、

従四位上行權左中辨藤原朝臣

長元三年二月廿日

祭日及時刻

〔延喜式神名帳頭註〕山城愛宕郡大田　元永三年〇保安元年官符預二案上官幣一

〔延喜式一四時祭〕凡祈年祭二月四日

〔續日本後紀十一仁明〕承和九年二月己巳、〇四日遣使奉二幣伊勢大神宮及諸社一、祈二年穀一也、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年二月四日庚寅、於二神祇官一修二祈年祭一、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年三月五日丁卯、於二神祇官一修二祈年祭一、此祭例用二二月四日一、而有レ穢停止、故今日祠焉、

〔年中行事秘抄〕諸祭刻限

二月祈年祭

辰二點以前、所司庶事辨備訖、三點參議以上著座始行事、〇中略

以前右大臣宣、永以爲レ例、

弘仁十四年十二月廿八日

〔薩戒部類私要抄四〕應永廿七年

祈年祭延引、日次可ㇾ被ㇾ擇申之由、被ㇾ仰下ㇾ候也、仍執達如ㇾ件、

二月八日　　少外記都宿禰廣田麻呂奉

陰陽頭殿〇中略

祈年祭日時定可ㇾ爲ㇾ當日、先可ㇾ令ㇾ參ㇾ陣給之由被ㇾ仰下ㇾ候也、仍執達如ㇾ件、

謹上　左中辨殿

明後日十三日可ㇾ被ㇾ行ㇾ祈年祭日時定、可ㇾ被ㇾ參ㇾ陣之由被ㇾ仰下ㇾ候也、仍執達如ㇾ件、

陰陽頭殿

〔後竹林院左相府記〕康正二年三月四日、祈年祭依ㇾ令ㇾ參ㇾ行、酉刻著ㇾ束帶、〇略中依ㇾ可ㇾ有ㇾ日時定、先參ㇾ禁裏、奉行頭辨資世未ㇾ參、數刻相待了、戌畢時分著ㇾ陣、先著ㇾ奥座、頭辨來仰ㇾ祈年祭日時可ㇾ令ㇾ勘之由、予居向微唯、次起座移著ㇾ端座、其體如ㇾ恒召ㇾ官人ㇾ令ㇾ敷ㇾ軾、次又以ㇾ官人ㇾ召ㇾ辨、權右中辨高清來ㇾ軾、予仰云、祈年祭日時令ㇾ勘ㇾ之、次持ㇾ參日時勘文ㇾ予、予執ㇾ之、展ㇾ禮紙ㇾ披見置ㇾ前、次以ㇾ官人ㇾ召ㇾ外記、六位外記跪ㇾ小庭ㇾ受ㇾ予目ㇾ著ㇾ軾、仰云、宮持參ㇾ、持參宮蓋置ㇾ予前、予執ㇾ日時勘文ㇾ入ㇾ宮蓋、以ㇾ官人ㇾ召ㇾ職事、頭辨參ㇾ軾、予押出宮蓋、職事取ㇾ之退出、奏聞了下賜、如元置ㇾ予前、予取ㇾ勘文ㇾ結申、如ㇾ恒職事退、次以ㇾ官人ㇾ召ㇾ外記、下ㇾ日時勘文、乍ㇾ齋次令ㇾ官人撤ㇾ軾起座、

齋戒

〔延喜式四時祭〕凡踐祚、大嘗會爲ㇾ大祀ㇾ祈年、月次、神嘗、新嘗、賀茂等祭爲ㇾ中祀、

〔令義解神祇〕凡一月齋爲ㇾ大祀、三日齋爲ㇾ中祀、一日齋爲ㇾ小祀、

〔延喜式臨時祭〕凡祈年、賀茂、月次、神嘗、新嘗等祭、前後散齋之日、僧尼及重服、奪情從公之輩、不ㇾ得ㇾ參ㇾ入內裏、雖ㇾ輕服人、致齋幷散齋之日不ㇾ得ㇾ參ㇾ入、自餘諸祭齋日皆同ㇾ此例、

〔延喜式部九十〕祈年月次二祭

前散齋一日、左辨官召ㇾ諸司ㇾ宣ㇾ示齋日ㇾ、錄進受ㇾ宣復省擧申、輔命曰、召ㇾ所管司ㇾ而宣之、錄稱唯命ㇾ史生喚ㇾ省掌、省掌稱唯復座ㇾ令ㇾ召之、寮屬就ㇾ版位ㇾ丞命如ㇾ辨官宣、屬稱唯退告ㇾ本局、餘祭准ㇾ此、其日平旦、輔以下就ㇾ神祇官齋院外座ㇾ、省掌執ㇾ版位ㇾ進當ㇾ丞座ㇾ而置之、五位已上就ㇾ版受ㇾ點、辨大夫不ㇾ在ㇾ此例ㇾ事見ㇾ儀式ㇾ、

〔西宮記二月〕祈年祭廢務、先一日、少納言付ㇾ內侍ㇾ奏ㇾ齋文ㇾ、他廢務准ㇾ之、

〔北山抄二月〕四日祈年祭事廢務、前散齋一日、少納言付ㇾ內侍ㇾ令ㇾ奏ㇾ齋文ㇾ、

〔小野宮年中行事二月〕四日祈年祭事廢務

前散齋一日、少納言付ㇾ內侍ㇾ令ㇾ奏ㇾ齋文ㇾ如常、〇略中依ㇾ穢延引停止時、於ㇾ建禮門前ㇾ行ㇾ大祓ㇾ、

類聚國史第七十四云、弘仁十一年二月丁丑、〇四日停ㇾ釋奠ㇾ定ㇾ中丁ㇾ、緣ㇾ當ㇾ祈年祭ㇾ可ㇾ忌ㇾ三牲ㇾ也、當ㇾ祈年祭ㇾ用ㇾ中丁之濫觴也、

〔師遠年中行事二月〕四日祈年祭事廢務

有ㇾ前後齋ㇾ、於ㇾ神祇官ㇾ行之、上卿已下行之、

〔師光年中行事二月〕祈年祭、幷前後齋日、僧尼重輕服人不ㇾ可ㇾ參ㇾ內ㇾ事、

四日祈年祭事廢務、前後齋、

法性寺殿仰、前後齋許也、承安三年殿下仰口如此、大外記賴業申狀同之、

〔禁秘御抄中〕神事次第

二月四日祈年祭前後齋、白河院仰也、他說自一日不ㇾ用ㇾ之、

〔建武年中行事〕二月四日としごひのまつり、一日より御神事のよしみえたれど、白河院の仰にて、前後齋ばかり也、

祭式

〔延喜式一四時祭〕二月祭

祈年祭

國司祭祈年神二千三百九十五座〇中略

右國司長官以下、准例散齋三日、致齋一日、共會祭之、祭日幷班幣儀、並准神祇官、

〔年中行事抄二月〕四日祈年祭事

貞觀十八年、公卿幷外記史等、觸內裏穢、仍於門前行事、不著齋院、

〔中外抄〕祈年祭齋事

康治三年正月廿八日、祗候御前、仰云、二月四日祈年祭者、自朔日忌僧尼僻事也、自二日忌之、故白川院仰事

〔玉海〕治承三年二月廿二日庚戌、今日雖祈年祭後齋、依先例奏總行云々、　廿三日辛亥、酉刻大外記賴業來、召簾前談雜事、語云、昨日祈年祭後齋也、而依春宮〇安德御百日有御遊、可有憚哉否之由、大進光長內々相尋、申不可憚之由了、至于舞樂可有憚、堂上御遊先例不憚云々、　四年二月四日丙戌、此日祈年祭也、右大將〇藤原兼實子良通奉行之、〇中略大將自今旦神齋、諸社祭、一日齋定例也、忌僧尼、重輕服、姙者、月水女等皆如常、

〔資益王記〕文明六年二月四日、予自今夕始神事、祈年祭也、行水、

〔令義解二神祇〕仲春祈年祭〇中略

前件諸祭供神調度、及禮儀齋日皆依別式、其祈年月次祭者、百官集神祇官、中臣宣祝詞、謂宣者、布也、祝者贊辭也、言以告神祝詞、宣聞百官、故曰宣祝詞、忌部班幣帛、謂班猶頒、其中臣忌部者、當司及諸司中取用之、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀

其日卯四刻、所司辨備庶事、神祇官陳幣物於齋院、〇中略次神祇官人率御巫等、入自中門、就西舍座、東面北上、大臣以下入自北門、就門內座、大臣在西掖東面、參議以上在東掖西面、著紫、五位以上在門外東掖西面、外記率史生召使等在西掖、東面重行、外記申庶事辨畢之狀、共起就北舍座、大臣南面、參議以上西面、諸王東面、並北上、其大臣用北戶、參議以上東砌、諸王西砌、大臣喚召使二聲、召使稱唯進立舍前、大臣宣、式部乎刀禰奉入止宣遍、召使稱唯、出命云、式部乎刀禰奉入止宣、輔稱唯、率群官入自南門、就南舍座、北面東上、御巫降就西舍前庭座、左右馬寮各率御馬廿一疋、寮別十疋立南舍東頭、〇中略神祇官掌二人率祝部等、入自南門、立西舍南頭、神祇官人降就舍前座、大臣以下及諸司、共降就舍前座、中臣進就庭座、讀祝詞、每一段了祝部稱唯、讀訖中臣退出、神祇官拍手兩段、次大臣以下五位以上、次諸司主典以上、次祝部並不稱唯、然後皆復本座、伯命史奉班幣帛、〇中略史復本座、申頒幣畢、伯命云縱ヨシ、史共稱唯、訖大臣以下以次退出、

〔延喜式一四時祭〕二月祭

祈年祭〇中略

右神祇官所祭、幣帛一依前件具數申官、〇中略致齋之日平明、奠幣物於齋院案上幷案下、所司預敷案下幣薦、掃部寮設座於內外、諸祭設座准此、神祇官人率御巫等入自中門、就西廳座、東面北上、大臣以下入自北門、就北廳座、大臣南面、參議以上就廳東座西面、王大夫就廳西座東面、御巫就廳下座、群官入自南門、就南廳座、北面東上、神部引祝部等、入立於西廳之南庭、既而神祇官人降就廳前座、大臣以下及諸司共降就廳前座、中臣進就座宣祝詞、每一段畢、祝部稱唯、宣訖中臣退出、大臣以下諸司拍手兩段不稱唯、然後皆還本座、伯命云、奉班幣帛、史稱唯、〇中略史還座申頒幣訖、諸司退出、

〔延喜式十八式部〕凡祈年月次兩祭所參諸司者、先大臣就座之後不得參著、

〔延喜式三十八掃部〕凡二月四日祈年祭、設大臣及參議以上座於神祇官西院北舍、大臣南面、參議以上西面北上、同舍西壁下設王大臣座、東面北上南舍敷座二行、北面東上前一行爲辨官幷諸司五位已上座、後一行爲官史幷諸司六位已下座、大臣舍之東屋設外記座、西屋設神祇官伯已下座、又其屋前庭設讀祝詞者座、東面但御巫座在祝師後、又大臣已下諸司六位已上座、預設於各舍前庭、爲讀祝詞時座、敷以葉薦、

〔西宮記 二月〕祈年祭

平旦、上卿著神祇官北門、在門中東腋西面、王大夫在門外、外記在西腋、史生在前、西腋大臣座、東腋參議以上座、上卿著廳座、大臣入自後戸、東第三間北壁下座南面、納言參議東一間、入自巽角南面、兼置式筥、王大夫著、西第一間東面、入自坤、或用代官、上卿召召使、二音稱唯參立、上卿云、式乃省乎刀禰奉入止宣戸、召使稱唯出召、輔率群官北面東上、五位前六位後入著、入自南門著南座、御巫坐西廳前、牽御馬、十一疋、兼繫猪鷄、

神部祝入立西廳南庭、神祇官降居、兼居西舍、或追參入、上卿幷諸司降居砌下、雨儀居砌上敷薦、中臣進宣祝詞十段、度別稱唯中臣出、上卿以下拍手、兩段祝還座、伯命史令班幣、○中略史申頒幣訖、次自上退、

〔北山抄 一二月〕四日祈年祭事

神祇官率御巫著西廳、大臣以下入自齋院北門、若事未辨備、暫坐北門南掖、大臣東面、參議以上西面、外記候閫外、外記申供神物辨備了之由、就北廳座、大臣南面、入北面妻戸、參議以上西面、入自東妻著之、王大夫東面、並北上、延長二年、伯安則申、先例大臣入自西戸、納言入自東戸、參議入自東壁下云々、而儀式及先年例如之、上卿召召使二聲、稱唯參入、上宣、式部省乎刀禰奉入止、末ツ禮、若末以禮歟、宣、式部省率群官、入自南門、著南廳座、御巫坐西廳前庭、左右馬寮各引馬十一匹、立刀禰殿東庭、猪鷄等預繫之、神部祝部等、入立西廳南庭、神祇官人降坐廳前、次上卿以下、降著廳前座、雨儀砌上中臣進就座讀祝詞、畢上卿以下拍手、各復本座、次班幣物、雨儀立砌上訖史申其由、上卿以下退出、

神祇官有穢時、於宮內省行之、上卿先著後廳北廂、供神物辨備畢、經廳東砌上著座、如神祇官儀、

〔江家次第 五二月〕四日祈年祭

神祇官率御巫著西廳、上卿參神祇官、先著北門內掖座、東掖西面、但大臣著西掖、案後々記、納言上卿之時、東掖座東面著座之由有所見、而西宮北山、並此次第皆載西面之由如此、王大夫可著同門、外記著同西掖座、外記申代官、初著神事之人、或不令申、上卿答如恒、又申供神物辨備之由、先例召史問之、近例外記申之、召召使可令外記申歟、或又上卿以召使被問辨、辨不必參、上卿著廳、入自東妻著西面座、東第一間豫置式、大臣者入自北面、自餘入自東妻、王大夫著、入自西妻、西第一間座、或用代官、上卿召召使、召使二人立艮壁、先是辨著南門外幄南面、式部彈正等同著坤、幷東幄、外壇下、同音稱唯、一人經東屏幷倉後、立座中、上卿宣式乃省乎刀禰奉入止宣へ、召使稱唯、出南門召之、辨幷式部省諸司等、入自南門著南廳座、御巫著西廳前庭、左右馬寮各引馬十一匹、立於刀禰殿東庭、白猪入檻、白鷄豫繫之、神部祝部等入立西廳庭、神祇官人降坐廳前座、本官人皆可著木綿、近代不然可恠之、上卿以下降著廳前座、雨儀砌上設座、南廳座人々皆著砌下座、雨儀著砌內、次祝師申祝、如式十段、度別稱唯、上卿以下復本座、○中略次自上退、

〔建武年中行事〕二月四日としごひのまつり、○中略辨かねてより諸國のめし物もよほしとゝのへて、二三日かけて神祇官に幣をつゝましむ、忌部つゝむなり、案上案下三千餘座の神をまつる、その所々たしかならざるもあり、國司におの〳〵つかはす、諸國にも祈年をおこなふなり、その日南殿にて御はいあり、たつみの間に、巽にむけて御座をしく、筵二枚半帖れいの御けいにおなじ、御帳にかたびらかけて、額間東一間のかうしをあぐ、大宋御屏風、御座のかたはらにたつ、御劒御笏などつねのごとし、伊勢大神宮を拜し給ふ

〔日本紀略 三村上〕天曆二年正月十一日辛酉、諸卿定申祈年祭事、件祭年來懈怠甚多、仍可致如在之禮事也、

〔貞信公記〕天曆二年正月十四日、中使頭朝臣來云、祈年祭事、可致如在之禮者也、而年來解怠甚多、仍令定、諸卿申云、神態御倉、置勾當官人、令勤行、

〔左經記〕寬仁二年二月四日戊辰、參大殿、次著祈年祭所、上新中納言、雜事如常、今日王不參、仍以陰陽頭文高爲代官、

〔中右記〕嘉承二年二月四日、祈年祭也、爲勤上卿、巳時許參神祇官、先入北門之間、外記義資立門前、相揖過之、著北門東腋座、兼置式、立居揖如恒、王大夫一人、著西腋座、是大臣座也、近代王大夫著云々、可尋、外記在園外、此事後聞、王大夫不可著此座、以召使令召外記、外記著軾、諸司參了否之由相尋、申具了由、因之外記稱唯退、近代申代官云々、雖然不令申之、依初著行也、則起座申代官云々、上卿二間西面、王大夫同著東面一間、其路經廳東、入從南著也、先是神祇官祭主以下在西廳、東面北上分配辨藏人左少辨雅兼、史官掌吉行在南屋座、予召召使二聲、召使稱唯、仰云、式部省乎刀禰奉

入ト、召使出南門召之、先左右馬寮各引馬十一匹（猪鶏等繋之）神部祝部等、入立西廳南庭、御幣兼居案上、（伊勢幣案東、諸社二脚案置之、）神祇官人降廳前座、予降廳前座、王大夫同下居、中臣進就座讀祝詞、了上卿以下拍手、此後伊勢幣出（従東門、齋主親定為使同出）予登本座、次本官大夫史宗元來南庭、申幣分了由、予以召使、遣仰分配辨許於諸社幣帛、惣可分由、則起座退出、諸社幣分配、辨召諸社禰宜等分給云々、

〔重憲記〕天養元年二月三日甲申、明日祈年祭、○中略未刻新少納言通憲、於本局可有習礼、外記一人可参會由所示也

國基、業筵等也、扈從殿上人二人（基輔朝臣、季信、隨身裝束如例、番長染狩袴、下襲白襖袴、上壺胡簶垂袴、常出仕定也、）祭儀訖參內、申刻歸來、○中略

祭儀（以大將口狀記之）

於郁芳門下車、（召使向來、追前前行、）大夫史隆職來門下、申御裝束子細、（就去夜定、卯之趣奉仰之云々、）入自神祇官北門、自壇上東行、著門內東掖座、（先立座下揖、天突膝、天東面居、定又揖、簀置式、筵砌敷、軾、件座絲半帖也、）次召使召使稱唯、進立南庭、仰云、外記召、（寬治六年、大夫史結後、簀以參候、天永三年、大外記師遠、大夫史盛仲等、各可參入歟、就中五位外記徒、如此之使可謂歟、）上卿仰云、諸司ハ具タリヤ、（頼業申候由、）又仰云、幣物ハ具タリヤ、（同注可問之狀、）申候由、上卿目之、頼業稱唯退下、（或召使問之、或又以史問辨、而寬治以後家習問外記、仍隨彼例也、又江次第記召ヒ、稱唯退下召之、（近例外記先申代官之是又先例也、）次大外記頼業入自同門進就軾、（先例五位外記不參入、而以祇候、今存彼等吉例、各可參入歟、就中五位外記徒、如此之使可謂歟、）上卿仰云、諸司ハ具タリヤ、（頼業申候由、）又仰云、幣物ハ具タリヤ、上卿目之、頼業稱唯退下、（或召使問之、或又以史問辨、而寬治以後家習問外記、仍隨彼例也、又江次第同注可問之狀、）次上卿起座、（兩揖如常、）自當間降壇下、（或說、更西行自中門降壇下云々、其理可然、但當中門不昇階、又其壇不高、仍隨宜可用當間之由、兼所教訓也、）昇自正廳、（謂北廳是也、）北面經東南壇上、（庭間隨身彼昇壇上、取之於巽角程座之云々、）自立南面東第一間有妻戶、長押下、揖昇、天著座、（件座西面、副東壁敷之、自座後著之揖如常、）召使取在北門座之式筥、走來先置此座前、（上卿未著座之前置之、）次王大夫著西第一間座、（對天敷之、）次上卿召使、（二音、）召使稱唯進立南庭、上卿仰云、式ノ省サヲ刀禰入マツレト宣ヘ、（微音仰之、但召使不分明、）召使稱唯、經幣案東、出南門、召之、（即行事右中辨兼光朝臣、式部少輔光輔、先例多用代宣、而寬治在良、天永有元、共正令參者也、）諸司等入自南門、著南廳座、（先是神祇官人等、率御巫著西廳座、此間召使參進、申云、左馬寮御馬未參云々、（此事於北門座、問事具否之時可申也、今申此旨、尤奇、）其後暫而召使又參上、申將參之由、（即引立御馬、左右各十匹云々、）又西廳東南邊繫白猪居白鷄、（入物云々、）次上卿起座、（兩揖如常、先召召使、（問下可降坐哉否よ、是非作法、爲恐違失、可問云々、）次神祇官人降居西廳前座、（件座當南面著之、件座當東二間敷之、）自當間降壇下、自砌內西行、著砌外座、（先立座後、揖天如常、南面著之、件座當西二間敷之、）辨已下同降居南廳前、（但被隔幣棚、不見云々、）次祝師進庭中座、申祝詞、（十段、度別可降坐哉云々、）即拍手、（兩段、）上卿已下從之、（上卿拍手作法不令有聲、手ノサキヲ打合也、）次申訖祝詞退座、次御巫人把之云々出來廻伊勢幣、三匹之後歸去、次頒幣、先伊勢幣、衞士受取了使出東門了、（此間可平伏、而余忘却不教、其由、仍不平伏云々、余失也、）次頒諸社幣等、召使參進申、春日幣立了由、即大將起座、（兩度如初、）不還著堂上座、直以退下、使仰云、諸社幣慥可奉分之由、可仰辨者、即出北門、赴郁芳門之間、召使歸來申辨報旨、（畏承了云々、）大夫外記史、幷式部輔等同相從云々、於郁芳門乘車參內、數刻候御前云々、今日始終發前聲、伊勢幣出日是廢務也、音奏停止、然而隨身不止前聲、是皆先例也、

正廳座事

西宮十𤼵抄云、○中略已上納言座可在東一間之證文也、

長元七年公記云、著東第二間、（入自東第二間、西面、）寬治六年爲房記云、經東南庭、西第三間爲上卿座、（南面、）王大夫座在西第一間、（東面、）長承三年知信記云、入自南面東三間戶、令著同間母屋座給、（西面、先例入自南面東二間給云々、而所口申也、大臣入自北面東第三間戶、令著同間母屋仍今日御座此定也、第一二間部妻戶、）今日如此、

上卿不復座事

寬治爲房記云、拍手之後復本座可被分幣物、是式文歟、左府示給云、任中納言後始奉仕日、宇治殿仰云、不著本座、乍鷹座伊勢使發進之後早可罷出者、可依其說者、天永中右記云、上卿乍庭中座、伊勢幣幷春日幣使立之後自砌下座所退出給也、是殿原行給之儀云々、就此等之記、不可復座之由諷諫大將、而於神祇官、大夫史幷右少辨兼忠等、存他家之例、可復座之由再往令申、然而大將不承引退出云、

云、長承發遣幣之後復座云々、尤無證據事歟、

祭主不參事

長承知信記云、祭主三位、入自西第二戸著同間母屋座云々者、余案祭主爲公卿之時、可著正廳座歟、但可著第一間也、二間之條失錯歟、今度親隆卿依服暇不參、仍無此儀、

〔百練抄十四四條〕仁治二年二月四日壬戌、祈年祭也、本官東廳、去頃有三十日穢、稱拵滯中門、於西院被行神事、伊勢幣自北門退出、未曾有事也

〔康富記〕文安四年四月廿一日壬午、是日祈年祭也、去二月四日依無武家用途令延引、先是有日時定、上卿鷲尾中納言隆遠卿、奉行頭左大辨俊秀朝臣、官方右中辨冬房、藏人權大外記予、右大史員職等參陣、○中略其後上卿已下引參神祇官、雨脚頻也、本官儀上卿被著北門東腋座、辨被著同門外東脇、外記史著同門外西脇、上卿召外記被問使之參否、次召辨被問幣物具否、但辨被座被申返事歟、不被進軾歟如何、次上卿被著北廳內、使王兼夏、中臣房直朝臣、卜部兼香、忌部親憲等參役也、出居座上卿、外記北廳簷下西上南面也、辨史東門下西上北面云々、南廳代無之、降雨之故也、○中略天明各退出、○中略今日頭左大辨內々送書狀、有被尋問事等、祈年祭宣命有無事、內侍參入哉否事等也、宣命無之、內侍無參向之由申返事了、

〔後竹林院左相府記〕康正二年三月四日、祈年祭依令參行、酉刻著束帶、蒔繪劒、無文帶、乘八葉、前驅一人量衡、小雜色四人、依可有日時定、先參禁裏、○中略次參神祇官、路次之間高清登車暫徘徊北廳北邊、相待幣物具否、其後著北門腋座、其儀向北揖、脫沓昇座上、猶向北揖、次西方へ居直召召使、召使參軾、仰可外記召之由、召使稱唯退去、外記參軾、予問云、諸司候ヤ、申云候、卽退去、次以召使問云、辨幣物具候歟、歸來申具之由、然間揖起座、作法同前著北廳座、妻戸間也、於地上揖昇、脫沓著西南面座、次王大夫著座、社司參北廳內、跪幣前申祝、此條不審、但近年如此、社司未練歟、次予召召使仰云、式ノ省ヲ刀禰奉入ト宣ヘ、儀色計也、次起座著簷下座、聽其妻戸之通歟、著南面、伊勢幣發、警蹕聲之間平伏、次發遣吉田幣、自餘幣近年明日發遣云々、予起座、抑今夜

祝詞

祭、每事違例如何、迷惑々々、高清相語云、近年每度如此、社司依未練也、然間每度之上卿立不審云々、

〔季連宿禰記〕元祿二年六月十四日己卯、祈年祭、月次祭、神今食、新嘗祭等次第、後醍醐以後之分於所持者可獻覽之由、自關白殿、○一條冬經、後兼輝、有奉書、內藏權頭之狀也十五日、昨日被仰出、祈年祭以下之次第、無所持之間、今日參關白殿、以諸大夫令申其由、

〔延喜式八祝詞〕祈年祭

集侍神主祝部等諸聞食登宣、神主祝部等共稱唯、餘宣准此、高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以、天社國社登稱辭竟奉皇神等能前爾白久、今年二月爾御年祈將賜登爲而、皇御孫命宇豆能幣帛乎朝日能豐逆登爾稱辭竟奉久登宣、

御年皇神等能前爾白久、皇神等能依左志奉牟奧津御年乎、手肱爾水沫畫垂、向股爾泥畫寄氐取作牟奧津御年乎、八束穗能伊加志穗爾皇神等能依左志奉者、初穗乎波千穎八百穎爾奉置氐、瑟閉高知瑟腹滿雙氐、汁爾母穎爾母稱辭竟奉牟、大野原爾生物者甘菜辛菜、青海原住物者鰭能廣物鰭能狹物、奧津藻菜邊津藻菜爾至氐爾、御服者明妙照妙和妙荒妙爾稱辭竟奉牟、御年皇神能前爾白馬白猪白鷄種々色物乎備奉氐、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

大御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、神魂高御魂生魂足魂玉留魂大宮乃賣大御膳都神辭代主登御名者白而辭竟奉者、皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸閉奉故、皇吾睦神漏伎命神漏彌命登皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

座摩乃御巫乃稱辭竟奉皇神等能前爾白久、生井榮井津長井阿須波婆比支登御名者白氐辭竟奉者、皇神能敷坐下都磐根爾宮柱太知立高天原爾千木高知氐、皇御孫命乃瑞能御舍乎仕奉氐、天御蔭日御蔭登隱坐氐、四方國乎安國登平久知食須我故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

御門能御巫能稱辭竟奉皇神等能前爾白久、櫛磐間門命豐磐間門命登御名者白氐辭竟奉者、四方

能御門爾湯都磐村能如塞坐氐、朝者御門開奉、夕者御門閉奉氐、疎夫留物能自下往者下乎守、自上往者上乎守、夜能守日能守爾守奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、生嶋能御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、生國足國登御名者白氐辭竟奉者、皇神能敷坐嶋能八十嶋者、谷蟆能狹度極、鹽沫能留限、狹國者廣久、峻國者平久、嶋能八十嶋墮事無、皇神等能依左志奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

辭別伊勢爾坐天照大御神能大前爾白久、皇神能見霽志坐四方國者、天能壁立極國能退立限、青雲能靄極白雲能墜坐向伏限、青海原者棹柁不干、舟艫能至留極、大海原爾舟滿都都氣氐、自陸往道者荷緒縛堅氐磐根木根履佐久彌氐、馬爪至留限、長道無間久立都都氣氐、狹國者廣久峻國者平久、遠國者八十綱打掛氐引寄如事、皇大御神能寄奉波、荷前者皇大御神能大前爾如横山打積置氐、殘乎波平聞看、又皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸閉奉故、皇吾睦神漏伎神漏彌命登宇事物頸根衝拔氐、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

御縣爾坐皇神等前爾白久、高市葛木十市志貴山邊曾布登御名者白氐、此六御縣爾、生出甘菜辛菜乎持參來氐、皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

山口坐皇神等能前爾白久、飛鳥石村忍坂長谷畝火耳無登御名者白氐、遠山近山爾生立留大木小木乎本末打切氐持參來氐、皇御孫命能瑞能御舍仕奉氐、天御蔭日御蔭登隱坐氐、四方國乎安國登平久知食須我故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

水分坐皇神等能前爾白久、吉野宇陀都祁葛木登御名者白氐辭竟奉者、皇神等能寄志奉牟奥都御年乎、八束穗能伊加志穗爾寄志奉者、皇神等爾初穗波穎爾毛汁爾母瑟閉高知瑟腹滿雙氐稱辭竟奉氐、遺乎波皇御孫命能朝御食夕御食能加牟加比爾長御食能遠御食登赤丹穗爾聞食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛稱辭竟奉久登諸聞食登宣、

頒幣

辭別忌部能弱肩爾太多須支取掛氐持由麻波利仕奉禮留幣帛乎神主祝部等受賜氐、事不過捧持奉登宣、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀

其日卯四刻、所司辨備庶事、神祇官陳幣物於齋院、○中略伯命史奉班幣帛、史二人共稱唯、各取札分立案西頭東向、忌部二人率神部二人、進夾案立、監頒幣事、史以次唱御巫及諸神祝、各稱唯、神部執幣頒之、大神宮幣帛者、差使進之、史復本座、申頒幣畢、伯命云縱ヨシ、史共稱唯、訖大臣以下以次退出、

〔西宮記二月〕祈年祭

伯命史令班幣、史二人執簡唱社名、忌部二人立案下、史申頒幣訖、次自上退、近社幣祝來請、遠國幣納官庫、付朝集使、延長四年官符云、祈年、月次、新嘗等之祭、幣帛物不受之國、朝集公文、自今以後宜令彼官物勘申移者云々、

〔江家次第五二月〕四日祈年祭

御巫廻見幣物、三人出自西壁、始自伊勢料見之、件事或不被行、御巫又近例有一人、可恠之件事月次祭有之、西宮抄也、祈年祭不見、次神祇史二人持簡、召諸社祝、忌部二人立案下、雨儀史以下立砌內、史申頒幣訖、遠社幣納官庫、次自上退、藤氏公卿頒春日幣之後、或早退出、以召使傳辨曰、諸社幣能可被頒行云々、源氏若江氏頒平野幣之後可出歟、

〔神祇官年中行事二月〕四日祈年祭也、諸社幣料請奏、長官以下官人等加署、諸社催口長官已下加判行、奉行忌部書進之、當日官人著座出居、御巫子廻見幣物案、詔戶師申詔戶、

〔續日本紀二文武〕大寶二年二月庚戌、○十三日是日爲班大幣、馳驛追諸國國造等入京、

○按ズルニ、此レ恐クハ祈年ノ頒幣ナルベシ、故ニ姑ク此ニ擧グ、

〔類聚國史十神祇〕延曆十七年九月癸丑、定可奉祈年幣帛神社、先是諸國祝等、每年入京各受幣帛、而道路僻遠、往還多艱、今便用當國物、

〔類聚三代格一〕太政官符

應奉祈年月次新嘗等祭幣事

右得神祇官解偁、檢案内、武藏下總、安房、常陸、若狹、丹後、播磨、安藝、紀伊、阿波等國神社幣、須依格祝部受取供祭、而頃年緩怠曾不勞受、徒積庫底、無由走奉、斯固程途遼遠往還難澁之所致也、望請差使令奉、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、但自今以後、宜附貢調大帳等使送之者、而貢調使不

略、

齊衡二年五月廿一日

〔類聚三代格　〕太政官符

應附送税帳大帳朝集等使諸社不受祈年月次新嘗等祭幣帛事

右得神祇官解偁、件等祭幣帛、依祝部不參納置官庫、謹案齋衡二年五月廿一日格偁、武藏下總、安房、常陸、若狹、丹後、播磨、安藝、紀伊、阿波等國神社幣、須依格祝部不參、納置官庫、謹案齋衡二年五月廿一日格偁、武藏下總、安房、常陸、若狹、丹後、播磨、安藝、紀伊、阿波等國神社幣、須依格祝部受取供祭、而頃年緩怠曾不勞受、徒積庫底、無由走奉、斯固程途遼遠往還難澁之所致也、望請差使令奉、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、但自今以後、宜附貢調大帳等使送之者、而貢調使不受幣帛、自今以後宜附貢調大帳等使送之者、而貢調使不略、

齊衡二年五月廿一日

〔類聚三代格　〕太政官符

應附送税帳大帳朝集等使諸社不受祈年月次新嘗等祭幣帛事

右得神祇官解偁、件等祭幣帛、依祝部不參納置官庫、謹案齋衡二年五月廿一日格偁、武藏下總、安房、常陸、若狹、丹後、播磨、安藝、紀伊、阿波等國神社幣、須依格祝部受取供祭、而頃年緩怠曾不勞受、徒積庫底、無由走奉、斯固程途遼遠往還難澁之所致也、望請差使令奉、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、但自今以後、宜附貢調大帳等使送之者、而貢調使不受幣帛、自今以後宜附貢調大帳等使送之者、仍須官長齋敬躬奉、不得踈略、

齊衡二年五月廿一日

〔類聚三代格　〕太政官符

應附送税帳大帳朝集等使諸社不受祈年月次新嘗等祭幣帛事

右得神祇官解偁、件等祭幣帛、依祝部不參納置官庫、謹案齋衡二年五月廿一日格偁、武藏下總、安房、常陸、若狹、丹後、播磨、安藝、紀伊、阿波等國神社幣、須依格祝部受取供祭、而頃年緩怠曾不勞受、徒積庫底、無由走奉、斯固程途遼遠往還難澁之所致也、望請差使令奉、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、但自今以後、

延引

爲遠所可參著、

〔深心院關白記〕文永二年正月三十日庚子、左中辨高輔朝臣來云、祈年祭幣物事、與行以後、如式可有之、而不知在所、社幣物等不進、徒置神祇伯許、今年何樣可爲哉、可分給神祇之輩歟、又可被燒歟、可量申者、余申云、輕難量申、可被行御卜歟、關白三公被向之云々、

〔續史愚抄後宇多〕弘安五年二月四日乙未、祈年祭、上卿土御門源大納言通頼、奉行藏人頭右兵衞督爲世朝臣、依神木〇春日在洛、春日幣物雖被裹、被宿納于神祇官、是嘉禎例云

〔康富記〕文安四年四月廿一日壬午、是日祈年祭也、〇略中抑是日鴨社御蔭山祭禮也、祠官神人等各指合之間、當社御幣可被殘置之條如何、云先規、云傍例、可被注進之由、頭左大辨爲奉行被尋申局務之間、被引勘之處無先規、遠國之神社之御幣、他日被送進之事有之、雖然於當社御幣者、被殘置後日被送進者、重又上卿已下可有參行哉、爲事煩歟之由局務被申之、但如祈年穀奉幣一社二社御幣被殘置本官、後日行事官渡社家使之條、連綿之由行事官等申之、故今夜鴨社御幣被殘置神祇官了、後日社家之請使參入之時、可渡之由治定了、

〔三代實錄清和〕貞觀五年二月四日丁酉停祈年祭並以有穢也、三月五日丁卯、於神祇官修祈年祭、此祭例用二月四日、而有穢停止、故今日祠焉、

〔三代實錄陽成四十一〕元慶六年二月四日丁丑停祈年祭、以去月大炊寮有人死穢也、九日壬午、修祈年祭、

〔日本紀略醍醐一〕延喜六年二月一日甲申、止春日祭、依左兵衞府有死人也、四日祈年祭延引、依同穢也、

〔扶桑略記二十三裏書〕延喜十二年二月四日癸丑、祈年祭延引、去月十三日觸死穢人、入東宮又參內、

〔日本紀略二朱雀〕天慶九年二月四日乙丑、祈年祭依穢延引、於建禮門大祓、十九日庚辰、祈年祭、

〔日本紀略四村上〕康保元年二月四日辛亥、祈年祭延引、仍於八省院東廊大祓、廿二日己巳、祈年祭、式日依穢延引也、

〔日本紀略七圓融〕天元元年二月四日己未、今日祈年祭、依內裏穢延引、十八日癸酉、祈年祭、

〔小右記〕天元五年正月廿六日己未、是日來月祈年等祭延引之例、外記相加勘奉之、卽奏聞之、被仰云、大相府〇藤原可定申者、二月三日丙寅、參式、大相國被奏祈年祭、〇十九日中略件等祭依穢所被延引也、自今日內四箇日御物忌、仍參腋陣、以藏人令奏此由、早可令仰上卿者、又大祓事同可仰之、參左府申此由、書件祭日被奉之、被申云、祈年祭是東宮御元服日也、非彼日被行宣歟者、祈年祭日廢務、仍所被申也、殿下被命云、十九日行祈年祭、誠可然、無便、十八日被行宣歟、以此由可奏者、四日丁卯、祈年祭等延引、仍今日祈年祭、依穢所被延引、

〔日本紀略一條〕寬弘八年二月四日戊申、祈年祭幷春日祭延引、八日壬子、大祓、依穢祈年祭延引也、

〔左經記〕長元八年二月四日己未、去廿九日夜、於神祇官有被殺害者、仍祈年祭於他所可有歟、將過穢之後、可有歟之由、兼日被問外記、外記賴隆眞人申云、於他所被行之由不見、過穢可被行也、若月中无初參、依有催著大祓所、而辨達皆有故障、不被參入、仍日上大藏卿召外記、被問无辨被行之例、外記申有例之由、仍无辨被行了、

〔中右記〕天永三年二月四日辛卯、從殿下有召、則參入、〇略中民部卿新中納言被參、被仰云、中納言中將、今日爲令勤祈年祭上卿出立之間、分配藏人辨雅兼走來云、祈年祭祭物、近江國所進猪、今朝於神祇官申斃了、而可爲穢哉否事、問明法博士信眞之處、所申不明、或爲穢或不可然、可隨勅定者、又問大外記之處、大神宮之習忌鹿者、於鹿者不入六畜、於猪者入六畜、可有其忌者、被問祭主親定卿之處、申云、可忌鹿穢之由、嘉承之間、公卿僉議了者、件旨奏院之處、可被問公卿者、以藏人辨遣左大臣里亭之處、

被申云、凡年來之間、不知猪穢忌由、仍自本不忌事歟者、民部卿被申云、如此穢氣有疑之時、先々依勅定事也、然者可隨當時仰者、予申云、六畜可忌由見式文、但鷄者非忌限者、依此文除雞之外、可有穢之義也、就中大神宮忌鹿、然者鹿猪同物也、祈年祭被延引可宜歟、殿下被仰云、可有猪穢者、參釋奠人々、自今以後可爲穢歟、是依供三牲也、件三牲之中有猪也、而大外記師遠申上云、大學寮式、當諸社祭日、止用三牲可用魚之由見也、付此文者、頗有忌歟者、此文尤有興事也、右中辨爲隆云、六畜無五體不具歟、仍强不忌也、殿下仰云、猶可爲穢之事也、以人々申旨、以藏人辨被奏院仰云、早可延引、藏人辨向左大臣亭仰下其旨、則被下知彼辨云々、但可被延引之由、俄被行大祓云々、祭主申上云、祈年祭以前、不可被立臨時伊勢幣、仍來六日祈年穀奉幣可延引者、加沙汰了、廿一日、今日被勘祈年祭日時云々、上卿權大納言來廿九日者、廿九日、祈年祭也、中納言中將令著行給、仍早旦從殿下有召參入、祈年祭次第書出、奉被中納言、午時許參神祇官給、前驅六人、藏人辨雅兼、同著行者、中納言歸給之後、於東三條給饗祿於召使云々、去春日祭時雖可有此事、思食忘、今日有此儀云々、中納言殿此間雖御坐殿下御所、依無所便宜、於三條所行也、阿波守忠長三條

〔玉海〕治承三年二月四日壬辰、酉刻參女院御方、此間依大神宮穢氣、祈年祭延引了云々、廿日戊申、今日被行祈年祭延引之由大祓云々權右中辨親宗著行之、參議吏等不參云々、廿一日己酉、今日被行祈年祭云々、依神宮穢所延引也、

〔百練抄十土御門〕建仁三年二月四日、依內裏五體不具穢、祈年祭幷大原野祭延引、

〔百練抄十順德二〕建曆元年二月四日、祈年祭延引、依大神宮穢、五月八日、被立伊勢奉幣使、是依被謝申去二月祈年祭幷祈年穀奉幣等神宮雜秤之間、數日不奉納事也、

〔勘仲記〕正應二年二月四日甲寅、今日祈年祭、依祭主隆直朝臣穢延引云々、九日己未今日被行祈年祭、辨仲兼朝臣、奉行上卿可尋記入、

〔伏見院御記〕正應二年二月四日甲寅、祈年祭上卿、權大納言藤原朝臣公守日頃領狀、而觸穢之間、權大納言源朝臣具守欲參行、俊光奏云、仲兼申、今日幣使祭主隆直觸穢之由、前祭主定世申之、仍相尋隆直之處、非穢云々、兩人申狀太參差、猶依有穢疑、爲別儀被仰可沙汰立之由口爲繼卿云々、入夜自院被仰曰、幣使事可計申之由、以仲兼被仰關白之處、可在勅定之由再三申之、仍被仰爲繼之處領狀、然間關白又申云、隆直觸穢無其儀、猶可勤仕幣使云々、此條凡不得其意、始被仰合之時、可在勅定、仍如此、沙汰之時又如然申之如何云々、關白所存誠以奇、彼隆直關白無雙知音云々、祭主沙汰之時令發故也、祈年祭延引之間、不拜神事、

〔薩戒部類私要抄四〕應永廿七年、〇略中書御敎書相觸延引之由、

祈年祭延引、可爲來十三日、可被存知之狀如件、〇略中

四位史爲緒宿禰請文云

祈年祭延引、可爲來十三日之由謹奉候了、早可存知之、仍言上如件、

二月四日　　左大史小槻爲緒請文

禮紙云

追言上

依何事延引候畢、然者來十三日、先於陣可被定日時候、大祓事等、同可有申御沙汰御定得御意候歟、陰陽寮事任近例御下知候哉、恐惶謹言、

件申狀甚不審、若天下穢幷神祇官觸穢之時、被行大祓歟不明、仍重相尋兩局、

祈年祭參行之輩、依觸他所之穢延引之時、不可及大祓歟、不審之間內々所尋申候也、謹言、

二月四日　　左中將判

此事於師胤朝臣者、答無所見之由、於爲緒宿禰者、可被行大祓之由所申也、予以此等之趣、披露被仰曰、天下觸穢之外、若內裏有穢之時、若可有大祓歟、其猶以不分明、被觸他所之穢延引之時、不可及大祓也者、則加下知了、

〔三代實錄二十清和七〕貞觀十七年三月五日戊子、祈年祭、以冷然院火、二月四日不祀、故此日祭焉、

〔岡屋關白記〕寬治三年二月一日、今夜回祿出來、自縫殿陣北面妻戶內放火云々、或數所付火云々、

二日、宣下條々、

一祈年祭延引、以吉日可被行事、

四日、此日祈年祭延引由於建禮門前有大祓、參議皇后宮權大夫師繼卿、權右中辨時繼朝臣參行、

十日、今日被行祈年祭、式日依內裏火事穢延引、上卿權大納言源顯定卿、辨右中辨藤原親賴朝臣分配等參行、

〔康富記〕文安四年四月三日甲子、祈年祭御訪貳百匹內一貫七百七十文、自官掌季包許到來、予分配也、廿日辛巳、祈年祭御訪百七十六匹到來、其內酒直引留云々、廿一日壬午、是日祈年祭也、去二月四日依無武家用途令延引、六年二月四日乙卯、祈年祭延引、武家料足未到之故云々、三月廿七日丁未、是日祈年祭可被行之由勘申日時之處、廢務日、相當縣召竟夜之例未勘得、於小除目者、遲近有例歟之由依被注申令延引了、四月二日壬子、今日祈年祭也、式日依無武家用脚延引

〔續史愚抄後土御門〕文正二年〇應仁元年三月北畠中納言教親參行、內侍不參、

〔三代實錄二十清和七〕貞觀十七年二月四日戊午、停祈年祭、

〔三代實錄三十陽成五〕元慶三年二月四日甲子、停祈年祭、以左馬寮牛死也、

〔日本紀略宇多〕寬平三年二月四日、諸司觸太政大臣〇藤原基經、仍停祈年祭、

停祭

〔日本紀略醍醐〕延喜十年二月四日、依犬死、祈年祭止之、

○按ズルニ、停祭ノ事、後世其例ヲ見ズ、多クハ延引ナリ、蓋シ此處ニ收メタルモ亦其實延引ナラン、姑ク錄シテ疑ヲ存ス、

〔日本紀略四村上〕康保四年二月四日癸亥、祈年祭、　四月四日壬戌、祈年祭、

○按ズルニ、一年二度ノ祈年祭アリシコトハ、此他ニ例ヲ見ズ、姑ク錄シテ疑ヲ存ス、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀

前祭十五日、充忌部八人、鍛工共作木工各二人、分造供神調度、但叡者叡編氏造之、神祇官忌部官一人監造、若官內無忌部官人、及神部之中忌部不足八人者、兼取諸司氏人充之、

一年再祭

供神料物

〔延喜式四時祭一〕二月祭

祈年祭神三千一百卅二座

神祇官祭神七百卅七座

奠幣案上神三百四座

社一百九十八所

座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、庸布一丈四尺、倭文纐刀形、（倭文三寸）絁纐刀形、（絁三寸）布纐刀形（布三寸）各一口、四座置、八座置各一束、楯一枚、槍鋒一竿、弓二張、靱一口、鹿角一隻、鍬一口、酒四升、鰒堅魚各五兩、腊二升、海藻、滑海藻、雜海菜各六兩、鹽一升、酒拌一口、裹葉薦五尺、

前一百六座

座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、倭文纐刀形、絁纐刀形、布纐刀形各一口、四座置、八座置各一束、楯一枚、槍鋒一竿、裹葉薦五尺、

不奠幣案上祈年神四百卅三座

社三百七十五所

座別絁三尺、木綿二兩、麻五兩、四座置、八座置各一束、楯一枚、槍鋒一口、庸布一丈四尺、裏葉薦三尺、就中六十五座各加鍬一口、剋一口、卅座各鍬一口、三座各剋一口〔並見神名帳〕

前五十八座

座別絁三尺、木綿二兩、麻五兩、四座置八座置各一束、楯一枚、槍鋒一口、裏葉薦三尺、

右神祇官所祭幣帛一依前件、具數申官、三后、皇太子御巫祭神各八座、並奠幣案上、但臨時加減、仍不入恒數、略中前祭十五日、充忌部八人木工一人、令造供神調度、但剋者、剋編氏作、槍木者讓岐國當曹忌部官一人監造、若曹內無忌部官人、及神部之中忌部不足九人者、兼取諸司充之、略中

國司祭祈年神二千三百九十五座

大一百八十八座

座別絲三兩、綿三兩、

小二千二百七座

座別絲二兩、綿二兩、

右略中其幣皆用正税、

〔延喜式三臨時祭〕凡祈年、月次、神今食、新嘗等祭料、楯板、置座木等之類、仰五畿內諸國神戶百姓令採進之、山城國楯板二百枚、置座木一万二千五百隻、攝津國楯板三百九十枚、置座木一万二千隻、又河內國楯板二百卅枚、置座木一万二千隻、又剋編戶百姓等置座木一千八百卅二隻、和泉國楯板一千枚、

〔百練抄十後鳥羽〕建久七年二月四日甲寅、祈年祭也、兼日於記錄所、殊有沙汰、召諸司諸國沙汰人、被誡仰、幣物如法、被注行也、

〔平戸記〕寛元三年二月四日己巳、祈年祭幣料、任大藏省切下文、如式數只今可濟之由、左中辨顯朝朝

臣奏御敕書、是巳刻時付、未刻到來如何、件事一日頃蒙催、件納物依白山造營、代々免除、今度又同前、而被召返歟、如何之由申了、其後無音、已臨刻限、有此催、及運々者、可被付馬部云々、凡迷是非了實變歟、略中今日祈年祭、中納言中將殿御奉行云々、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀

其日、略中左右馬寮各牽御馬廿一二〇一恐匹〔寮別十匹〇十下恐脫二字〕立南舍東頭、

〔延喜式一四時祭〕二月祭

祈年祭〇中略

右神祇官所祭幣帛一依前件、具數申官、略中大神宮度會宮各加馬一匹〔籠頭料庸布一段〕御歲社加白馬、白猪、白鷄各一、高御魂神、大宮女神、及甘樫、飛鳥石村、忍坂、長谷、吉野、巨勢賀茂、當麻、大坂、膽駒、都祁、養布等山口、幷吉野、宇陀、葛木、竹鎚等水分十九社各加馬一匹、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡年中諸祭、祓馬者、二月祈年祭十一匹、略中竝覆奏以放近都牧繫飼馬充、

〔西宮記二月〕祈年祭

牽御馬十一匹、

〔北山抄二月〕四日祈年祭事

左右馬寮各引馬十一匹、立刀禰殿東庭、

天德五年二月、左馬寮申馬十一匹內不堪牽進狀、仰以野飼馬令充、

〔神祇官年中行事二月〕四日祈年祭也、略中諸社神馬廿二匹、左馬寮十一匹、右馬寮十一匹、諸社司可請取之處、近代本官年預請取之、伊勢使祭主勤之、出居官人事、諸司被用事、

〔重憲記〕天養元年二月四日乙酉、祈年祭、略中左右馬寮各引馬十一匹、並廿一二〇一恐匹、引立諸社幣

南邊、

〔康富記〕文安四年四月廿一日壬午、是日祈年祭也、〇中略右馬寮御馬、自菊亭殿今日不被引進之間、伊勢衞士申子細、不可請取伊勢御幣之由申之、上卿辨等、臨期被進雜色二人於菊亭、被催之後被始行了、

獻鷄猪

〔延喜式一四時祭〕二月祭

祈年祭〇中略

右神祇官所祭幣帛一依前件、〇詳見供神料物、具數申官、〇中略御歲社加白馬、白猪、白鷄各一、

〔古語拾遺〕昔在神代、大地主神營田之日、以牛宍食田人、于時御歲神之子至於其田、唾饗而還、以狀告父、御歲神發怒、以蝗放其田、苗葉忽枯損似篠竹、於是大地主神、令片巫、志止止鳥肱巫、今俗竈輪、及米占也、占求其由、御歲神爲祟、宜獻白猪、白馬、白鷄、以解其怒、依敎奉謝、〇中略苗葉復茂、年穀豐稔、是今神祇官以白猪、白馬、白鷄祭御歲神之緣也、

〔年中行事大概〕祈年祭

二月四日に、神祇官にして三千餘座の神をまつりて、年穀をいのるによりて、〇中略しろきいのし、しろきには鳥をもちゐる事なり、いまの世にはそのさたなし、

〔錦所談一〕祈年祭白鷄白猪

祈年祭ニ白鷄、白猪ヲ奉ル、コノ白猪ハ純白ナル猪ヲ云ニアラズ、若キ猪ノ色ノウスキ也ト云リ、按ズルニ、官史記ニ、今ハ白猪ナキ間、作テ被進、雞ハ今モ生ヲ被獻トアリ、マタ言談抄云、祈年祭料白猪ハ、近江國ヨリマヰラスル也、行任國司ナリケルニ、件猪ヲ責ラレケレバ、當時ナクテ無術テ、米百石ヲセメラレニケリ、後年猪ヲモトメテ、暫ハナキヨシヲイヒケレバ、如去年イタクカタクセメケリ、猪ヲトリイデヽトラセケレバ、使ステヽイヌ、國司行事所ヘ送テケリ、コレ等ノ文ヲ以テ考フレバ、前說信ジガタシ、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀

其日卯四刻、所司辨備庶事、神祇官陳幣物於齋院、京職貢白鷄一隻、近江國豚一頭、

〔師光年中行事二月〕四日祈年祭事、〇中略奠白猪近江國進白雞、左京職進

〔台記〕仁平元年二月四日乙巳、右少辨資長申曰、祈年祭猪、近江國未進者、件國本禪閤〇藤原忠實掌吏務、今度除目相傳已了、然者依下名之前申禪閤、仰曰、目代俊弘申曰、先例不過今日必所牽進也、定无延怠歟、以此由仰資長了、九日庚戌、近江目代俊弘申云、郡司申曰、祭前十餘日、狩猪不得之、連日狩獵于今無得、先例如此之時用代物云々、先卽見北山抄四、承平四年六月月次祭馬代進調布、八端任彼例可以調布八端爲猪代之由仰了、以同趣仰史、

〔重憲記〕天養元年二月四日乙酉、祈年祭廢務、〇中略辨進軾被申上卿云、今日依無白猪先例遣尋師安許了、件猪近江國所進也、而新任國司頗被澁申云々、〇中略上卿以召使國口猪事被尋申頭辨、辨被申云、件事尋大外記之處、申云、去保延七年二月祭、白猪忽斃、仍被尋信俊眞人之處、申云、有以牛爲猪代之例、但件時無猪被行了、左右可有御定、見小野宮記、天曆十一年二月四日不獻猪、然而被行了、此例兩度被尋問之時不勘申、〇中略又左右馬寮各引馬十一匹、幷廿一〇一恐二誤匹、引立諸社幣南邊、白猪、白雞等須繫其南木邊云々、今日無白猪、但白雞許繫之云々、

〔百練抄十後鳥羽〕建久三年二月四日丁未、祈年祭也、無白猪云々、

〔百練抄十五後嵯峨〕寬元元年二月四日辛亥、祈年祭也、近江國司不進白猪、不當事也、

奉行官人

〔延喜式十一太政官〕凡二月四日奉班祈年幣帛、大臣及參議以上赴神祇官、辨外記史各一人、及諸司五位以上六位以下各一人共集、事見儀式、

〔延喜式十三大舍人〕凡二月四日早朝、官人二人五位一人、六位一人、參神祇官祈年祭所、

〔延喜式十八式部〕凡祈年月次兩祭所參諸司者、先大臣就座之後不得參著、

〔延喜式三十一宮內〕凡諸祭祀日、官人史生省掌各一人、向祭所行事、祈年祭五位一人、六位一人參神祇官、

〔夕拜備急至要抄上二月〕一祈年祭

上卿　辨尋分配人、有障者可相觸他人、　官外記

〔中右記〕嘉承二年二月四日、祈年祭也、爲勤上卿、巳時許參神祇官、○中略加階之後初著行神事也、此後他大小公事可奉行也、去十二月廿七日任中納言、未奉行神事前、圓宗寺修正上卿、幷兵部手結依別仰勤了、然而猶今度加階之後、先奉行神事也、歸家之後、召仕十人、官掌一人吉行來給祿、各匹絹、又饗代匹絹、本ハ召使四人、官掌一人、在彼祭庭輩許可給祿也、雖然近代皆參仍給了、是稱神態也、但新任之時有此事、每昇進强不聞歟、雖然民部卿中納言、初勤行祈年祭之後給祿云々、仍爲思吉例今度給也、民部卿時ハ、祿法官掌一人、白絹二匹、召使四人、黃絹各一匹云々、召使十人、又申上云、中納言初任之時、各給祿仍給了、各匹絹此事殊不聞、大略近代說歟、雖然如此事及廣何事之有哉、關白殿御車副等來、申可給祿之由、是納言昇進之後、稱下簾料、古未有如此事、近代作法云々、仍給之也、

〔重憲記〕天養元年二月三日甲申、明日祈年祭分配按察大納言也、而依令申所勞、次第雖催申、各以被申故障、但別當○藤原公教仰云、件祭上﨟上卿可被參勤也、然而依□御定了參也云々、予以折紙注取之後、先向長亭示子細、被示云、可申事由也、○中略其後參攝政殿、申祈年祭上卿事、付大宮大夫進盛定仰云、右大將京極大納言、大宮大納言、重可催申、但尙被申故障者、別當稱別御定可令申也、次參京極大納言亭、須以召使申上也、而近代有別御定時、奉行外記可參入申子細也、諸卿被仰云々、然而先々尙以召使申、於今日之儀事卒爾參入申也、申仰旨、以左近將監仲盛仰云、爲別御定者、無左右午刻可參也、須下參殿下申御返事、然而近代全不歸參、仍予付近例不便也、

〔玉海〕治承四年二月一日癸未、大將○藤原兼實子良通始可行祈年祭、招源中納言、○源雅賴令敎其間作法、宰相定能有此座、又大夫史隆職注進神祇官裝束指圖、有不審事等、召寄可尋也、　二日甲申、巳時許大外記賴業來、召簾前仰雜事、此次仰大將可行祈年祭之間事、申云、祈年祭者一大納言左大將○藤原實定分配也、可觸申此旨云々、○中略今日召光盛仰云、大將可行祈年祭之由可仰官外記、刻限巳時者即以御敎書、仰遣隆職賴業等之許、　四日丙戌、此日祈年祭也、右大將奉行之、始從神態也、○中略祭儀訖參內、申刻歸來、大將候內裏之間、官史生官掌太政官召使等來給饗祿、其間事光盛注進之、申刻右辨官史生國行官掌篤宗已上兼仰官召使六人仰大外記賴業、人數相叶寬治例、參著、夾名、和氣助安、宗岡兼延、和氣盛安、同助直、宗岡吉兼、同兼次、副御隨身所西壁、敷紫帖一枚、爲史生官掌座、北上東面其前居懸盤饗二前、其下二行對座敷同帖四枚、爲召使座、其前居机饗十前、下家司衣冠勸盃、三獻出納取酌居汁、食畢賜祿、下家司親族分賜之、

史生　官掌　美絹六丈、各一疋、

召使　國絹六丈、各一疋、雖六人參入給十人料云々、

政所對饗　給料

史生事

近代之例、諸家之習、官掌召使給饗祿、史生不有此例、就中長承三年、宇治左大臣初度神態不召史生、而寬治六年知足院殿御勤仕之度、召史生之由雖見爲房記、官外記之間不審猶殘、問隆職賴業等之處、各申狀不分明、彼寬治史生名惟任云々、勘同年匡房記之處、元三參入之史生之中、有云是任之者、是與惟其訓惟同、疑字樣混亂歟、仍猶可爲官史生之由、仰隆職宿禰了

〔勘仲記〕正應二年二月一日辛亥、予參院、以女房奏聞祈年祭幣料事、入夜退出、　二日壬子、依禪門穢三十ヶ日觸穢、辭申祈年祭奉行了、付俊光令奏聞者也、

〔伏見院御記〕正應五年二月四日丁卯、祈年祭上卿通雄卿、雖無辨不參之例、闕如無力之間、以史可行仰了、申合仙洞、又仰合關白了、

〔園太曆〕延慶四年二月四日丙午、裏書曰、抑今日祈年祭、中納言中將參行云々、□仲定藏人、元勾勘、勘解由

次官、同行高元衛佐前兵正五位上藤資名右少辨正五位下平知有、少納言此外濟々、

〔類聚國史神祇〕弘仁八年二月丙申、神祇官言、祈年月次等祭日、諸社祝部等、事須參集祭庭、受幣供神、而比年之間、未有參會、仍幣帛一百卅二裏、收諸官庫、無人預付、伏望、准寶龜六年格、頒幣之日、不參祝部、不論有位無位、一切還本、許之、

〔貞觀儀式〕二月四日祈年祭儀

前祭十五日、充忌部八人、鍛工共作木工各二人、令造供神調度、〇略中神祇官忌部官一人監造、〇略中其潔衣料布、人別二丈七尺、官人細布一端、一人白米二升、酒六合、五位一升鮨三兩、五位五兩、加東魚鳥各二兩、鹽二勺、五位五勺、海藻二兩、但鍛工共作木工者、不賜潔衣及食、〇延喜式一又見二延喜式一

祈年祭〇略中

右〇略中神祇官人以下鬘料、安藝木綿一斤、中臣宣祝詞料庸布五段、短帖一枚、

〔延喜式四時祭〕二月祭

祈年祭〇略中

右〇略中神祇官人以下鬘料、安藝木綿一斤、中臣宣祝詞料庸布五段、短帖一枚、

〔類聚國史神祇〕弘仁八年二月丙申、神祇官言、祈年月次等祭日、諸社祝部等、事須參集祭庭、受幣供神、而比年之間、未有參會、仍幣帛一百卅二裏、收諸官庫、無人預付、伏望、准寶龜六年格、頒幣之日、不參祝部、不論有位無位、一切還本、許之、

〔儀式〕二月四日祈年祭儀

前祭十五日、充忌部八人、鍛工共作木工各二人、令造供神調度、〇略中神祇官忌部官一人監造、〇略中其潔衣料布、人別二丈七尺、官人細布一端、一人白米二升、酒六合、五位一升鮨三兩、五位五兩、加東魚鳥各二兩、鹽二勺、五位五勺、海藻二兩、但鍛工共作木工者、不賜潔衣及食、〇延喜式一又見二延喜式一

祈年祭〇略中

右〇略中神祇官人以下鬘料、安藝木綿一斤、中臣宣祝詞料庸布五段、短帖一枚、

〔類聚國史十神祇〕弘仁八年二月丙申、神祇官言、祈年月次等祭日、諸社祝部等、事須參集祭庭、受幣供神、而比年之間、未有參會、仍幣帛一百卅二裏、收諸官庫、無人預付、伏望、准寶龜六年格、頒幣之日、不參祝部、不論有位無位、一切還本、許之、

官人雜給

戒飭神官

〔類聚國史十神祇〕弘仁八年二月丙申、神祇官言、祈年月次等祭日、諸社祝部等、事須參集祭庭、受幣供神、而比年之間、未有參會、仍幣帛一百卅二裏、收諸官庫、無人預付、伏望、准寶龜六年格、頒幣之日、不參祝部、不論有位無位、一切還本、許之、

〔類聚國史

〔類聚三代格 一〕太政官符

應科上祓祈年月次新嘗祭不參五畿內近江等國諸社祝事

右撰格所起請偁、太政官弘仁八年二月六日下諸國符偁、得神祇官解偁、件等祭日諸社祝部等、理須未祭之前、會集官底、各請幣帛、依例供祭、而比年祝部等怠慢不會集、再三敎導、習常不愼、遂使幣帛一百卌二裹在〇在一本作收官庫、無人預付、謹案太政官去寶龜六年六月十三日符偁、右大臣宣、頒幣之日祝部不參、自今以後不得更然、若不悛者、宜早解替者、望請不論有位無位還本、永懲將來者、右大臣宣奉詢之禮〇奉下恐脫勅字、禮上下有脫字、務在潔誠、闕怠之徒、實須科處、宜委曲所由、牒示要路、覺悟愚輩、勿令違失、若猶不愼、解却還本者、今案格旨、依一度怠、永停其任、事涉苛細、理乖適中、伏望先科件祓、令愼將來、若不悛革、卽從解却者、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔類聚三代格 一〕太政官符

應殊加檢察敬禮四箇祭事

右檢案內、二月祈年、六月十二月月次、十一月新嘗祭等者、國家之大事也、欲令歲災不起、時令順度、預此祭神、京畿外國大小通計五百五十八社、因茲特致潔齋、愼令祭祀、而敬惟疎簡、禮非如在、每至祭日、姧濫雲集、至獻幣帛、老少拏攫、徒有陳設之營、曾無供神之實、禰宜祝部、須向神祇官敬受幣物、虔奉其社、而件等人無致其敬、或雇出身代、不自參進、或雖躬受取、無心奠祭、頑愚之輩、狎黷神禁、神靈之祟、職此之由、凡祭神之禮、以神主禰宜祝部爲其齋主、而不勤職掌、疎略神事、非唯神主等之怠、還又齊官不加糺勘之所致也、中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅自今以後京內諸社、所帶諸司殊加檢察、畿內外國、當國官長相共監臨、祭禮之日、必致齋敬、若祭事不愼、監察有怠者、官司處之重責、神主禰宜祝部等科祓解職、一如貞觀十年六月廿八日格、曾不寬宥、

雜載

寬平五年三月二日

〔園太曆〕延文二年二月十六日、抑祈年祭一昨日勅問、所存今日注進候、兼又文書等寫留返遣也、

祈年祭問事、愚意之所存注別紙獻之、可令計披露給之狀如件、

二月十二日　判

祈年祭間事、以二月四日爲式日之條、式文明白也、隨而禁中潔齋廢務、奕代之流例、今更構新儀、不可及朝義之疑殆歟、於本宮行來之祭奠者、無公家御肅之沙汰乎、二月九日御神事、不載式文歟、加之例幣者九月十一日式日、致齋廢務已爲發遣日、參著日事別無所見、又同十四日本宮雖有神衣祭、公家强無御神事、已下知食之儀旁足令比擬哉、然者依新道之遠近、有行程之延縮者、本宮神事、幣使到著之前後、宜廻商量令計行歟、且如兼豐宿禰注進者、四度祭祀、式日被發遣之後、幣使中途逗留之時、違期日祭納例、自長保至建曆及數度歟、以彼臨時沙汰之准的、被定向後祭祀之規矩之條、可無其難、且不可乖違式心候乎、抑伊勢奉幣事異他、尤被行仗議、且被決官占、可被左右之由雖可言上、於此篇目者、古來軌範、今更不可有改動之新儀歟之旨加短慮者、了簡之間述梗概之旨趣者也、此上事可在時宜矣、〇中略

重被尋下條々

祈年祭、以四日官幣發遣可爲本歟、將又九日依有本宮祭被遣幣使歟事、

延喜神祇式云、祈年祭二月四日、祭神三千一百卅二座、又曰、祈年賀茂月次新嘗、前後散齋之日、僧尼及重服、奪情從公之輩不得參入內裏、又云、宮女懷妊者、散齋之前退出、有月事者、祭日之前退下宿廬、不得上殿、神祇令曰、仲春祈年祭、〇中略

九日本宮御祭事不被載之

就之廻短慮之商量、以四日本官發遣之日、被正宗之條、神祇式又令條分明也、然者依官幣有本宮

祭之條勿論歟、加之公家御神事清書之義、後朱雀院以後月朔日限四日也、其御齋不至于九日者乎、又廢務者二月四日、六月十一日、九月十一日、十二月十一日、各發遣之日候、以本宮御祭之日非廢務之義矣、以非御不審之限候乎、次以發遣之式日可被引上事無先規候之上、以他日被行祈年祭者、二月朔日二日、若相當禁裏御憚幷支干之凶日者、雖爲正月被行祈年祭、以六月十二月九月之上旬、可被行月次及神嘗祭神今食等歟、此條迷是非候、殊被窮御沙汰可被周備者乎、於日次者陰陽寮之最也、兼日難被決之、又雖決之無左右難定申之故也、路次之新道者、其事輕々之上、被行仗議決御卜之所、如龜兆者、帶神明有應之象、又主繁昌太平之支干事見御形是併君之叡信通于宗祀之謂也、次於發遣者、雖被用式日、御路次本宮有障之時、幣使於途中逗留、以他日令祭納例、○中略元久三年五月四日甲申、被發遣祈年穀奉幣、是炮瘡流行事被祈申、又霖雨事被載辭別、

此時幣使依穢、於離宮院五ヶ日逗留云々、

建曆元年二月四日祈年祭、依本宮穢延引、有大祓代始延引元曆吉例也同月廿一日被行祈年祭之處、又依神宮穢幣帛不奉納也、剩不思食此事、又被發遣祈年穀奉幣如何、兼直宿禰兼豐祖父言上云、去文治元年二月四日祈年祭、依本宮穢延引、同月廿六日被行之處、後日本宮言上云自十六日辰時見付猪足之間、次第神事延引、以此例可被准據者、三月八日祈年祭幣奉納、其後祈年穀幣使參宮也、

此外有例歟、每度不記置之、

次於四日發遣者雖延引、於本宮御祭者九日猶無相違歟事、此條就官幣令祭納之上者、被延引發遣候者、不可有本宮之儀歟之所、祠官等號同國祭執行來候云々、此事長和六年五月有其沙汰、雖止月次神今食、猶有御神事被供忌火御飯之由、左大辨經賴記明白候、加之如江次第者、賀茂祭雖被停止之猶可被行警固、是有國祭之故也云々、此等之次第曆應三年神宮不通達被止幣使之時、兼豐注進之間、其後禁中如舊被召忌火御飯候訖、今度之儀不可依國祭候歟、次式日之發遣猶都

不可事行者、以式日被行祈年祭之後、有路次幷本宮障之時、幣使於途中令逗留、以後日令祭納之例分明候上者、若因准此例、以參著日可被行本宮儀候歟、可被決時議之旨、先日言上候處、已式日馳過候上者、於今者勘進之篇目若可猶違候乎、

次以後日被行候者、任例可被勘發遣之日時候歟、至于行程之日數一事者、海道行程之分限、猶被尋究故實之輩、重可有御問答歟、次延引之時者、每度被宣下、被行建禮門大祓之例候、近年者、分配職事若此儀不及申沙汰候歟、可令得此等御意給候、兼豐誠恐謹言、

二月三日

重注進言上

一祈年祭以本官發遣儀爲正實事

神祇式神祇令文、先度注進之所被載之清潔者限于發遣之儀四日祈年祭也、但五日者有後齋次、者也、後齋已後者、被解御神事之間、重輕服月水之輩、幷僧尼參入內裏、若者被修法事矣、新儀式曰、二月四日祈年祭廢務、江次第云、二月四日廢務、廢務者、本宮發遣日、被閣万機被請祈之義也、九日本宮御祭事不被載式條、令條又無廢務幷御潔齋之上者、輕重爲其隔歟、重案舊記、文治三年九月十四日被尋下云、今月御神事普通迄十二日加三後齋也、而齋宮群行之年至十八日依何事哉不審者、兼貞宿禰兼豐祖言上云、公卿勅使者、依爲宸筆宣命、至于本宮之日有御潔齋也、於齋宮群行幷諸幣使者、進發日若者後齋一日也云々白餘略之承久三年三月廿九日被仰下云、大神宮御祭者、奉幣進發前後齋之外、件祭日事者、被引上之例、往昔以來未勘得之、以新儀若被用他日者、以延引之先蹤可被勘日時之

神祇大副卜部兼豐請文

間、二月朔日二日以二日一可レ被レ行之由一忠直朝臣暗申請歟、相當公家御忌支干之凶日者、以二正月一難レ被レ行之趣一言上先畢、月次神今食被二引上一之例日未二案得仕一矣、而至二于神嘗祭一也例幣者、九月者爲二伊勢齋王群行之式月一之間、以二群行之使一被二副付一十一日例幣事上古在レ之所謂寛平三年九月十一日無二廢務一、去四日例幣被レ進發之故也、寛仁六年九月八日丁卯、齋宮群行、十一日例幣被二付一群行使一、仍無二廢務一、天永元年九月十一日例幣被二付一去八日齋宮妍子群行使、永暦元年九月十一日例幣、被二付一去八日齋宮好子群行使、嘉應二年九月十一日例幣、昨日被二付一齋宮惇子二日群行使云々、爰知齋王者、崇神天皇御宇始而被レ奉レ副レ之、是宗祀嚴重之儀式、朝廷邂逅之神態也、雖レ爲二向後一有二齋宮群行者、於二例幣者一可レ被二付一副一歟、以レ此因准、云二祈年祭一、云二月次神今食一、爭可レ被二比量一乎、猶巨細被レ勘二定行程之分限一云本官儀、云本宮祭禮、可レ被レ專二式日一歟、將又就レ繁多之准據、以二幣使參著之日一被レ行二本宮御祭一歟、可レ被二決群議者一乎、

右條々、先日依二卒爾之勘進一令二相漏一之間、重披二竹帛一、逃二枝葉一、斯外法皇御代曆應度、重々有二勅問事一、非二今之至要一候之間、不二注進一候、可レ得二此御意一候、仍言上如レ件、兼豐誠恐謹言、

神祇大副卜部兼豐上

二月五日

進上　人々御中
○中略

祈年祭間事、就二兼豐宿禰忠直朝臣注進等一被レ廻レ了、以二二月四日一爲二式日一、有二禁中潔齋廢務者、奕代流例不一可レ及、朝儀之疑殆歟、以二新儀一輒難レ被二引上一乎、就中如二風聞者一、以二二日一被レ行二祈年祭一、以二三日一可二進發一之由忠直朝臣申請云々、非二式日者一、上卿先於二陣可一勘二日時一、爭暗可二定申一乎、依二日次者一、四度幣使一向可レ被レ背二式條歟、此條不レ辨可レ否、又被レ專二九日者一、數日路次逗留之煩如何、事與情不一可一周備一矣、齋王群行之時、被二副付一九月例幣事、不レ足二今度之義一歟、於二九日本宮祭奠之義者不一載二式文一、非二公家清事廢務一、加之以二式日一被二行本官儀之後一有二路次之障一、以二他日一令二祭納之例一、自二長保一至二于建曆及數度之上者一、准的彼例一、以二幣使參著之日一、可レ有二本宮儀之由一、兼豐宿禰所申無二相違者歟一、且神祇式云、祈年幣帛者、朝使到日、大神宮司引二使者一先參二度會宮一云々、匪二啻因准之例一、相二協式條之上者一、爭可レ勞二新儀乎一、次忠直朝臣所二申請一者、依レ爲二新道一可レ被二延二路次之日數一義也、此條古來本道之時、路次爲二五ヶ日一之處、公卿勅使以下忌事之時、寄二二宿一以二三ヶ日一令二參著一之例多存之、新道行程之分限、先可レ被レ尋二究故實之輩一歟、不レ限二此祭一、可レ爲二月次神嘗祭之傍例之故也、此上事宜在二時宜一矣、

〔本朝續文粹ニ勘文〕變異疾疫飢饉盜賊等事　　敦光朝臣

一去年風水有レ難二今年春夏飢饉事一○中略

右王者八政、食爲二其先一、古人有レ言曰、寒者不レ貪二尺玉一而思二短褐一、饑者不レ願二千金一而美二一食一、自非二兼年之食一、何免二荒饑之愁一、夫衰弊之漸、其來區分、一者依二廟社不一レ祀也、而二月祈年祭、六月十二月月次祭、神今食、九月神嘗祭、十一月新嘗會者、朝之重事也、其祭纔存、其禮漸薄、就中天皇神今食幸二中和院一、神嘗祭幸二大極殿一、威儀棣々、自感二神心一、昔告朔餼羊、仲尼愛レ禮、以二小牢一大、何失二恒規一、事々任レ式、可レ被二行之一、諸國所在大小神社、雖レ有二破壞一、難レ加二修理一、雖レ有二顚倒一、無二復基趾一、國宰不レ參二祭祀之場一、社司無二致修治之事一、況非二家譜之輩一、知二社務之人一、誰能竭二謹愼之誠一乎、誰能懃二齋肅之禮一乎、○中略以前參箇條、據二史籍一、課二愚管一、勘申如レ件、

保延元年七月廿七日

〔鹽尻初篇五〕祈年の祭は周禮に出で、詩の雲漢にも祈年孔夙といふ、祈年は孟春に穀をゐのつ神に祈り給ふ事也、されば正月ぞゐるべきに、我國祈年は二月に行はれける故をしらず、古は神祇官より國々まで行はれて、いとめでたく、國の大事とこそ古き文にも見えける、いつの時よりか絶えて、其名をだに知る人なし、熱田の社なんどにかたのごとく行はれ侍りけれど、官幣もくだらず、私のやうに見え侍る、

正四位下行式部大輔藤原朝臣敦光

古事類苑

神祇部二十五

祈年穀奉幣

名稱　一
初見　一
祭神　一
祭月及日時　一
齋戒　一
奉幣定　一
奉幣式　一
宣命　一
奉幣使及奉行官人　一
頒幣　一
延引　一
中絕　一
幣料及用途　一
雜載　一

古事類苑

神祇部二十五

祈年穀奉幣

祈年穀ハ、其義祈年ト全ク同ジ、唯其名ヲ變ジテ以テ之ヲ別ツニ過ギズ、亦年穀ノ豐稔ヲ祈ルナリ、而シテ祈年祭ハ神名帳ニ載セタル諸神ヲ盡ク祭ルナレドモ、是ハ大神宮及ビ近京有名ノ諸社ニ奉幣スルナリ、祭神ハ其始一定セズシテ、村上天皇天德三年七月ニハ、伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、大神、石上、大和、廣瀨、龍田、住吉、丹生、貴布禰ノ十六社ニ奉幣アリ、一條天皇正曆二年八月ノ奉幣ニハ、吉田、廣田、北野、梅宮ヲ加ヘテ二十社トシ、同長保二年二月ノ奉幣ニハ、祇園ヲ加ヘテ二十一社トシ、同寬弘六年二月ニハ、更ニ日吉ヲ加ヘテ、二十二社ニ奉幣セラレタリ、サレド其後日吉社ハ時ニヨリテ或ハ除クコトモアリシガ、白河天皇ノ永保元年ヨリ、永世二十二社ノ列ニ加ヘ、祈年穀ニハ必ズ二十二社ニ奉幣スルコトトナレリ、祭日ハ定ラス、吉日ヲ擇ビテ行フヲ例トス、祭月ハ大凡毎年二月七月ノ兩度トナリシガ、蓋シ此祭ノ恒例トナリシハ、一條天皇以後ニシテ、古定メタレドモ、或ハ然ラザルコトアリ、

ハ全ク臨時ナリシカバ、後世ニ至リテモ必ズシモ二月七月ニ限ラザリシハ、自ラ此風ノ存セルナルベシ、加之、觸穢及ビ用途ノ不足等ニ由リテ延引スル事多ク、甚シキハ春時ノ奉幣ニシテ七月ニ行ハレシ事アリ、秋時ノ奉幣ノ十二月ニ延引セシ事モアリ、一條天皇ノ長保三年、後花園天皇ノ文安元年ノ如キハ此例ナリ、

奉幣使ヲ發遣スルニハ兼日先ヅ奉幣定アリ、上卿以下陣ニ就キ、日時ノ勘文、幣使ノ差文、及ビ宣命ノ事等ヲ議定シテ奏聞ス、後世ハ多ク當日ニ行ヒタリ、祭日ニハ八省院ヲ裝飾シ、內侍以下女官來テ幣帛ヲ裹ミ、上卿以下各〻入リテ其座ニ就キ、伊勢使以下諸社ノ幣使ヲ召シテ、順次宣命ヲ授ケテ、（宣命ノ用紙、伊勢ハ綠紙、賀茂ハ紅紙、其他ハ黃紙ナリ、）各〻其社ニ發向セシムルナリ、伊勢使ヲ發遣シタル後、天皇紫宸殿ニ於テ御拜ノ儀アリ、御物忌ノ時ハ、石灰壇ニテ行ハル、又天皇八省院ニ行幸ノ時ハ、伊勢使ノ發遣ヲ待チ給ヒテ後ニ還御アリ、而シテ伊勢ノ幣使ハ、特ニ諸王一人ヲトト定シ、中臣忌部ヲシテ之ニ從ハシメ、其他賀茂、松尾、平野ハ各〻參議及ビ五位、石清水、稻荷ハ各〻四位、丹生、貴布禰ハ各〻神祇官ノ六位、自餘ハ各〻五位ヲ任ズ、但シ石清水ハ源氏、春日、吉田ハ藤原氏、梅宮ハ橘氏、北野ハ菅原氏ヲ選定スル例ナリ、然ルニ此等ノ幣使、後世ハ一人ニシテ數社ヲ兼ヌルノミナラズ、多クハ疾病事故ヲ稱シテ、發遣ヲ辭セシカバ、祭事ヲ廢闕スルヲ以テ、屢〻譴責ヲ加フレドモ、多年ノ因襲改ムルニ由ナク、又幣料ノ如キモ、諸國ニ課シテ調進セシムル例ナリシガ、後世ニ至リテハ、每ニ督促スレドモ、多クハ徵收ニ應ゼズ、或ハ前夜督責シテ、當日僅ニ辨濟セシメタルコトアリ、或ハ當日刻限ニ臨ミテ幣物猶具セザリシカバ、已ムコトヲ得ズ、他ノ用途ヲ借リテ僅ニ補充シタルコトアリ、此等ノ流弊モ恬トシテ異マザルニ至レリ、

抑〻此祭ノ初見ハ、天武天皇ノ四年ナリトノ說アレドモ、其明文ノ史上ニ見エタルハ、醍醐天皇ノ延喜二年ニシテ、其恒例ノ如クナリシハ、又降リテ一條天皇以後ナリトス、且其祭式ノ如キモ、儀式等ノ古書ニ載セズシテ、江家次第ニ始メテ詳ナルヲ見レバ、此祭ノ後世ニ至リテ盛ナリシコト自ラ明ナリ、然レドモ前ニ述ベタル如ク、幣使ノ懈怠幣料ノ不足等ニヨリテ、後漸ク衰頹ニ趨キ、後花園天皇ノ文安年中ニハ暫ク絕エタリシガ、武家ノ執奏ニ由リ、再

名稱

ビ行ハルヽコトトナレリ、サレド久シカラズシテ爭亂ノ世トナリ、朝威益〻衰ヘシカバ、祈年祭ト等シク遂ニ全ク廢絕セリ、

〔塵添壒嚢抄七〕祈年穀奉幣事

是ハ廿一社ニ御幣ヲ奉テ、年穀ノ田苅事ヲ祈リ申ル、事也トナン、

〔年中行事大概〕祈年穀奉幣〇略中

神祇官にして、廿二社へ官幣をたてまつりて、これも豐年をもとむるよしなり

大藏卿〇坊城長綱

初見

〔年中行事歌合〕祈年穀奉幣七月廿九日

祈してたのもしげなるはつ稻や神のめぐみの秋をなすらん

廿二社に御幣を奉て、年穀の豐ならん事を祈申さるゝ也、

〔おもひのまゝの日記〕二月にもなりぬ、〇略中きねんのまつり、きねんこくの奉幣なを、しきのまゝにおこなはる、みな大臣上卿にてぞありし、〇略中七月にもなりぬ、〇略中祈年こくの奉幣仁王會なを春にかはらず、

〔樵談治要〕神をうやまふべき事

此月〇ニに祈年穀の奉幣といふことあり、これはのうれへなく、五穀不熟ながらん事をいのり奉る祭なり、五穀は人民のいのちなり、だれの人かは是をかろくせむや、

〔日本紀略一醍醐〕延喜二年四月十三日、祈年穀奉幣、

〔師光年中行事二月〕祈年穀奉幣事

天武天皇四年正月戊辰幣諸社

〔公事根源二月〕祈年穀奉幣

天武天皇四年〔正月、諸社に幣を奉らる、天慶六年五月、年穀を祈らんがため、十一社に奉幣有とみえたり、

○按ズルニ、師光年中行事、公事根源等ニ、天武天皇ノ四年ヲ以テ祈年穀奉幣ノ始トシタルハ、日本書紀ニ天武天皇四年正月戊辰祭幣諸社トアルニ據レルナレドモ信ジ難シ、又續日本後紀承和九年二月己巳ノ條ニ、遣使奉幣伊勢大神宮及諸社祈年也トアルヲ、類聚國史ニハ祈禱部ニ收メタレド、大日本史神祇志ニハ祈年祭條ニ收メタリ、己巳ハ四日ニテ祈年祭日ニ相當スレバ大日本史ノ說從フベキニ似タリ、然レドモ祈年祭ノ奉幣ニハ使ヲ諸社ニ遣ハスコトナケレバ、是レ或ハ祈年穀奉幣ナランモ未ダ知ルベカラズ、姑ラク錄シテ疑ヲ存ス、而シテ史上ニ此祭ノ明文ノ見エタルハ、醍醐天皇ノ延喜二年ヲ始トス、

祭神

〔新儀式四臨時〕祈年穀事

若有レ可レ祈二年穀一、上卿奉レ仰、先以二陰陽寮一、勘二吉日文幷十六社或社員增減不定也使差文一、

〔日本紀略四村上〕天德三年七月十日癸丑、祈年穀奉二幣十六社一、

〔日本紀略九一條〕正曆二年八月十八日甲申、依二祈年穀一奉二幣廿社一、被レ加レ祈可レ止二霖雨之由一、

〔日本紀略十一條〕長保二年二月廿七日乙亥、奉二幣廿一社一、祈年穀也、

〔日本紀略十一條〕寬弘六年二月十四日庚子、祈年穀奉二幣廿二社一、

〔朝野群載十二內記〕廿二社奉幣次第

伊勢　石清水　賀茂上下　松尾　平野　稻荷

春日　大原野　大神　石上　大和　廣瀨

龍田　住吉　日吉　梅宮　吉田　廣田

祇園　北野　丹生　貴布禰

祭月及日時

○按ズルニ、十六社、二十二社等ノ事ハ、社格篇ニ其條アレバ參看スベシ、

〔公事根源二月〕祈年穀奉幣

是は二月七月二たびあり、よき日して奉らる、

〔神祇官年中行事二月〕祈年穀奉幣、中下之間旬廿二社幣物事、以本官請奏、

〔雲圖抄二月或三月〕祈年穀奉幣御拜座○下略

〔柱史抄上二月〕祈年穀奉幣擇二吉日一被レ行レ之、或及二三七月同前一レ、○中略

〔柱史抄上七月〕祈年穀奉幣同レ卷、或及二八月一、

〔貞信公記〕延喜十二年十二月十一日、行二幸中院一、今日祈年穀幣奉二伊勢一、　十八年七月十二日癸未、行二幸八省院一、爲レ奉二幣伊勢一、是祈年穀云々、

延長四年九月十九日、祈年穀幣使、廿六日庚辰、行二幸八省院一、有二祈年穀使事一、

承平二年八月廿三日、祈年穀御幣使立、

〔日本紀略四村上〕應和三年六月九日己丑、奉二幣伊勢大神宮以下十六社一、依二祈年穀也一、但伊勢幣帛可レ被レ付レ來十一日使、仍今日諸司廢務、抑月次以前奉幣之例、延長七年六月七日、天慶六年六月五日也、

〔日本紀略九一條〕永祚元年二月廿六日丁丑、奉二幣諸社一、爲二祈年穀奉幣一、天皇行二幸八省院一、

正曆二年五月十日戊申、奉幣二祈年穀一、　八月十八日甲申、依二祈年穀奉幣一、天皇行二幸八省院一、

〔日本紀略一條〕長德三年七月十九日辛巳、祈年穀、　四年三月廿五日辛酉、祈年穀奉幣使、

長保三年閏十二月十三日庚辰、奉幣二祈年穀一、　正曆二年三月廿九日癸卯、祈二年穀一、二年

〔日本紀略十三條〕長和元年三月九日丙子、祈年穀奉二幣廿一社一、　八月八日癸卯、祈二年穀廿一社一、二年

五月十七日丁未、祈年穀奉二幣廿一社一、　八月廿九日戊子、祈年穀奉二幣廿二社一、

〔日本紀略十三後一條〕寬仁二年二月廿日甲申、奉二幣廿一社一、依二祈年穀也一、辭別三合天朔、　閏四月十六日

戊申、奉二幣廿一社一祈二年穀一、

〔日本紀略十四後一條〕長元四年二月五日壬午、祈年穀奉幣定、十一日戊子、祈二年穀廿一社一、八月十七日壬辰、於二神祇官一發遣祈年穀廿一社奉幣使、五年五月七日丁丑、祈年穀奉二幣廿一社一、八月三日壬寅、祈年穀奉幣諸社定、九日戊申、奉二遣諸社使一、依二祈年穀一也、

〔日本紀略十四後一條〕長元七年二月九日庚子、奉二幣廿一社一依二祈年穀一也、辭別天變也、六月十五日癸卯、奉二幣廿一社一祈二年穀一、七月廿一日戊申、奉二幣廿一社一依二祈年穀一也、

○按ズルニ、一年三度ノ奉幣ハ異例ナリ、

〔日本紀略十四後一條〕長元八年二月十五日庚午、奉二幣廿二社一祈二年穀一、六月三日乙卯、奉二幣廿一社一依二祈年穀一也、天皇行二幸八省院一、

〔經信卿記〕寛治二年十月十九日辛卯、有二祈年穀奉幣一云々、

〔吉記〕壽永元年八月廿八日丙寅、今日祈年穀奉幣也、九月二日庚午、今日祈年穀奉幣也、

〔塵添壒嚢抄七〕祈年穀奉幣事

祈年穀奉幣事、七月也、撰二吉日一政ナレバ、日不レ定也、

〔師光年中行事二月〕撰二吉日一事

祈年穀奉幣事（廢務、前十許日、上卿奉レ仰、定二申日時使者一、）

〔年中行事抄二月〕擇二吉日一事

祈年穀奉幣事、（廢務三日、或前十許日、）定二日時使等一、

〔建武年中行事〕二月、○中略祈年穀奉二幣一、この月よき日して奉らる、○中略七月祈年穀奉幣、日ついでを

えらぶ二月におなじ、

〔法成寺攝政記〕寛弘四年二月九日丙子、參二內著陣座一、定二祈年穀御幣使一奏聞、日時十七日、事了退出、

〔左經記〕寛仁元年七月一日丁酉、有レ召參二攝政殿一、○藤原頼通、中略、以二七日一可レ立二祈年穀奉幣使等一、此由明日向二源大納言許一可レ仰者、○中略蒙レ仰歸宅、三日己亥、午剋許參二攝政殿一、○中略申云、七日造宮檜皮可レ葺始一日也、而彼日可レ被レ立二祈年穀幣使一、仍廢務、然者何有二他公事一哉者、被レ仰云、尤可レ然事也、早仰二上卿一、以二他日一可レ令レ行二奉幣事一者、即令二官掌一問二吉平朝臣一許、勘申云、十一日者、

〔中右記〕大治五年二月五日戊寅、頭中將送二書云一、祈年穀奉幣日時、今日可二定申一、○中略申時參內、著二仗座一、召二官人一令レ敷二膝突一、召レ辨、權辨顯頼朝臣來、仰云、祈年穀奉幣日時可レ令二勘申一、則持二來勘文一、披見之處、來十八日、時申、暫置二座前一（陰陽寮上官等內々催儲也）、

〔台記〕久安三年七月廿八日庚寅、未剋參內、定二秋氣祈年穀奉幣事一、參議教長卿書二定文一、仰二左少辨光頼一令レ行二幣物事一、勘申八月十七日、二十一日、仰二相計可一仰、余定仰云、十七日事了、八月十七日戊申、午一剋參內、

〔玉海〕嘉應二年二月五日丙戌、午時許左頭中將頼定朝臣來云、可レ奉二行祈年穀奉幣事一、左府被レ申レ障也、

日次事內々相尋之處、十五六日之由令二勘申一、攝政仰云、十五日可レ宜者、六日丁亥、奉幣定日次事內內尋二遣在憲朝臣之許一之處、注申云、今月九日庚寅十二日癸巳十四日乙未等也云々、則在憲來申云、奉幣日次十五六日之由令二注申一了、而件日常樂會日也、如何、余云、強不可レ憚歟、先例如何、申云、禁中神事、他所佛事、更無レ憚、然而十八日、隨二二月十五日釋迦如來涅槃日也一、同十八日如何之由雖レ令レ申、又不可レ憚歟云々、申旨無二所據一歟、但有二所存一者、付二本奉行ノ職事一可レ申歟之由答了、八日己丑、巳剋許、依二昨日告頼一參二業眞人來一、○略中余又云、奉幣日次事、陰陽寮勘申十五六日之由、十五日可レ宜之由有二攝政御命一云々、仍存二其旨一之間、在憲朝臣來示云、奈良常樂會日也、隨釋迦如來涅槃日也、若可レ被レ改歟、十八日無障云々、此事不レ存可レ憚之由、如何、頼業申云、內裏神事、他所佛事、更不レ憚何況於レ彼付二寺家一哉、勿論云々、十五日丙申、此日祈年穀奉幣也、

〔三長記〕建永元年七月廿九日戊申、參殿下、以季宗申條々、祈年穀奉幣日時事、來月七日仰曰、可奏此由、
八月五日甲寅、未刻許參內、〇略中予宿侍、日時勘文史送之、
陰陽寮
擇申可被奉遣祈年穀御幣使於諸社日時
今月七日丙辰　時午二點
建永元年八月五日
權漏刻博士兼伯耆介　菅野朝臣季長
大膳權大夫兼天文博士安倍朝臣資元
助　賀茂朝臣宣平

齋戒

〔公名公記〕永享八年二月十二日、今日祈年穀奉幣也、〇中略行也、
〔康富記〕文安元年七月廿二日己亥、是日祈年穀奉幣也、
陰陽寮
擇申可被奉遣祈年穀御幣使諸社日時
今月廿二日己亥　時巳二點若午
文安元年七月廿二日
〔江家次第二月〕祈年穀奉幣
依有伊勢幣、散齋二日、謂前後兩日、有六種忌、致齋一日、謂當日也、唯祭事外、不行他事、當日朝夕御膳不警蹕、內豎不音奏、瀧口不名謁、雖當宇佐使間御精進供於魚味、
〔禁秘御抄上〕神事次第
二季祈年穀奉幣、前後齋、雖爲二社、供魚味、

頭兼天文博士安倍朝臣有季

〔建武年中行事〕祈年穀奉幣、この月〇二よき日して奉らる、〇略中これも前後齋也、
〔中右記〕寬治八年七月廿日己未、有祈年穀奉幣也、〇略中行事辨三ケ日潔齋、當日早旦解除、但被勘日時後、不逢僧尼重輕服者也、
康和四年二月廿四日己酉、今日祈年穀奉幣也、〇略中祈年穀奉幣朝家大事也、仍諸司廢務、而今日太上天皇〇白河有御幸條、世人不甘心歟、
長承二年七月廿五日戊寅、夜前可定申祈年穀奉幣使之由有催、〇略中從今夜尤居席ニ出居也、與尼不可同宿之故也、又不淨輩不可入來由立札歟、八月二日甲申、此日祈年穀奉幣也、
〔台記〕久安三年七月廿八日庚寅、未刻參內、定秋氣祈年穀奉幣事、〇略中年來承可爲奉幣上卿之仰、後散齋、近例如此、京極殿又如此、見二年四月七日御暦、而勘御堂御記、寬弘四年二月九日、定祈年穀御幣使、御堂十五日召宣義朝臣仰可作奉幣宣命之由、祈年穀入夜渡堂、集讀經僧等、修懺法、十七日、奉幣諸社、著八省院、御堂爰知奉幣前一日之外無散齋、仍自今以後不可散齋、家中僧尼重服人來臨、參入堂舍、又不可憚者也、不用御暦、說、用御堂御說、合遙喜式意之故也、且又余好彼古禮之故也、行事辨光賴申云、承可行、八月十一日一院御堂供養請僧事之仰、兼行幣物事可有憚歟、仰云、近代憚如此、勘舊前一日之外無齋、因之余前一日之外可從佛事、彼供養日可參入也、然者辨又兼行更不可憚者、辨諾、八月十七日戊申、今日有月事之女在局、又不犯女自餘同昨日、午一刻參內、依祈年穀奉幣也、〇略中則立使了歸宅、此後僧尼重服輩來臨、行佛事更無憚、伊勢幣上卿有後齋否勘例、長和二年八月廿五日定臨時奉幣使、上卿御堂廿九日臨時奉幣、著八省行之、上卿御堂三十日如例供養經、以定基內供令申上、其次如常、有管絃事、已上御堂、御記爰知上卿無後齋、
〔玉海〕嘉應二年二月五日丙戌、午時許左頭中將賴定朝臣來云、可奉行祈年穀奉幣事、〇略中日次事內內相尋之處、十五六日之由令勘申、攝政仰云、十五日可宜者、〇略中自今日立神事簡了、自今日忌僧尼重輕服人幷月水女等也、別屋月水女等居住強不忌之、自前日可出之、十四日乙未、自今日殊以潔

齋、十五日丙申、此日祈年穀奉幣也、
承安三年七月十七日戊申、頭辨長方朝臣來、余相逢長方、仰云、祈年穀奉幣可有御奉行、申承了由、但聊有憚事、依有姙件條先例必申此旨、或被免、或不被免不定、夜間引檢、若被憚者、明旦可申其旨、彼時可被奏、其上於有別仰不可及沙汰之由相含了、〔略〕中祈年穀奉行辨兼光來、來廿五日云々、暫退出了、
姙者之夫、神事奉行憚哉否、引檢先例不定、示合源納言許之處、返事云、尤可被奏事由、先例不定候、抑七ヶ月以後ハ准當月可申憚之由、是七八九等月數有誕生之例、仍必可申其旨之由、故人申置云々、所示之旨可然、余又本自不開置、
〔吉記〕壽永元年八月廿九日丁卯、昨日祈年穀奉幣定了云々、〔略〕中依御記者、定以後被從神事了、然而被載定文哉否、不審未決、尋申堀河納言、返報云、神事ハ定以後、潔齋ハ當日許也、口口佛事可依人心、口者、伊勢有前齋、自餘當日許也、其理可然云々、爲專神事也、後日可決、不審、
〔三長記〕建仁元年八月十日丁亥、今日行水立神事札、明後日祈年穀奉幣奉行之故也、前三箇日潔齋之由、見都護殿御記、
〔猪熊關白記〕承元元年二月廿三日癸亥、此日祈年穀奉幣也、〔略〕中自昨日至明日、潔齋如例、
〔岡屋關白記〕建長三年八月廿七日乙卯、明日祈年穀奉幣也、依爲前齋、不聽聞佛事、
〔吉續記〕文永八年二月廿五日、自今日殊始神事、依祈年穀奉幣奉行也、女房有輕服事之間、下棟各別所、此事兼尋兼文宿禰、依被諷諫也、
廿七日辛酉、祈年穀奉幣也、
〔薩戒記〕永享五年二月廿七日辛亥、自今夜始神事、明日祈年穀奉幣、可勤春日使之故也、自昨日可始歟、然於進發者可爲明後日、仍今日所始也、
〔公名公記〕永享八年二月十日、明後日祈年穀奉幣、予奉行事、兼日頭左中將隆遠朝臣觸仰之、〔略〕中仍今日出請文、〇中其後始潔齋、先沐浴洗髮、此間渡佛經於他屋、禪閤御方庇有本尊等、然而別儀之間不禪之、服者月障輩令

奉幣定

出之、立神事札也、自今日至明後日三箇日齋也、此儀併守中山內府壽永三年記了、家例無證所見上先賢之所爲可爲規模也、近日諸人存省略歟、神道巨測、猶可存敬信事也、
〔康富記〕應永廿七年八月廿五日辛酉、祈年穀奉幣、傳奏廣橋大納言兼宣卿、奉行藏人權右中辨俊國、傳奏者輕服也、伊勢幣傳奏輕服之例、先例不審也、可引勘之、〇略中
一伊勢幣傳奏輕服之人申沙汰、頗不得其意、不審之由、去廿三日予參淨居庵之處、常宗被語仰了、尤有其謂、於伊勢幣者、前後齋致齋也、公方御沙汰、又其人領狀、其以如何乎如何乎、今度祈年穀奉幣、傳奏兼宣卿輕服也云々、
〔江家次第五月〕祈年穀奉幣
上卿參議著陣、上卿奉仰著外座、令置膝突、
仰外記、令進例文硯、例文硯例文筥置上卿前、硯筥置參議前、
二人奉之如恒、其筥入年年定文諸大夫歷名、又小書一枚、今日可奉仕之使也
上卿仰參議令書大辨
上卿略見例文了、取笏目執筆參議、參議進著座上次、揖取笏候、上卿示氣色、參議揖墨卷返續紙、副笏候氣色、上卿目許、參議置笏染筆、上卿披例文讀揚、社號、其詞諸社奉幣使、參議書了、又讀云、伊勢、如此自石清水至北野、次第示之、其詞可書定讀之、宮姓名朝臣也、雖公卿如此、自石清水至北野、次第示之、令參議次第書之、伊勢使井丹生貴布禰不入之、其奧注年月日、參議進著座上次、揖取笏候、上卿示氣色、參議揖墨卷返續紙、副笏候氣色、上卿目許、參議置笏染筆、上卿披例文讀揚、社號、其詞諸社奉幣使、參議書了、又讀云、伊勢、次名、次第示之、其詞可書定讀之、宮姓名朝臣也、雖公卿如此、次第書之伊勢使井丹生貴布禰不入之、其奧注年月日、參議

辨仰陰陽寮令勘申進之
參議書畢奉上卿〇略中
次上卿撤例文等入日時定文於筥、
次令藏人若殿上辨奏之、年居奏之座

次返給、上卿下外記、上卿、中家結申、清家不結之、仰詞如職事、其次仰云、伊勢丹生貴布禰使、仰神祇官令差進、

行事辨、若今夜奏神祇官勘文者、即令辨奏之、仰率分年料相分依請、神祇官勘文神祇官請奏、付辨奏聞、返給、上卿結申、下同辨、辨結申之、此外又職事下伊勢幣料請奏、上卿結申、職事仰詞、上卿徵唯卷文、次召行事辨下之、上卿仰曰、宣旨ヲタウヘ、○中略

前一日、上卿參陣奏宣命草、草注年號并月、不入日、就御所奏之如恒、返給後仰可清書由於內記、執柄人在里第先內覽、或曰、大臣以行事辨、納言以外記令內覽、可尋、又以卜串外記入筥覽、以不合卜串、橫置筥下方、或外記留不合、上卿返給、仰外記令開之、外記覽之、即仰其王可令奉仕使由、若在乙丁合丙合者、可用乙丁合、或乍置乙丁合、有遣丙合者之例、上卿會釋被行歟、若無可奉仕使之王者、上卿奏事由、忽以六位王令叙爵、非無其例、大臣或於里第令開卜串、大臣布袴云々、若有家中如尼之人者、大臣乘車出於門外開之、其車頗向巽、外記自車前方進之、

〔柱史抄上二月〕祈年穀奉幣

兼日上卿著仗座、仰辨召陰陽寮令勘日時、召外記令進硯續紙、令進諸社使定文、召大內記仰宣命趣、大內記參軾奉之退出、

內記不參之時、後日上卿或召內記、於里亭仰之、若有辭別者、或以職事書狀賜之、或以詞仰之、

前一日、有草奏事、近代或用當日、上卿著陣、召大內記令進宣命草、諸社一通書之、但有請別之時及數通、內覽奏聞如恒、又開卜串、仰其王可令奉仕使之由、

〔建武年中行事〕祈年穀奉幣、この月、○二月よき日して奉らる、廿二社なり、上卿陣のざにて使をさだむ、兼日にあるべけれど、つねは當日也、奉行藏人かねて催とゝのふ、○中略定文は參議是をかく、上卿奏聞して返し下す、大內記宣命の案を上卿に付て奏す、御覽じて返給ふ、廿二社の宣命を書て、はこのふたに入て奏す、伊勢ははなだのかみ、賀茂は紅梅、その外みなきなる紙なり、一々に御覽じて返し給ふ、神祇官の請奏下使の王御馬申よし奏して、上卿神祇官に參て使々にあかち給、

〔中右記〕嘉保三年二月十三日、入夜中宮大夫○源師忠被參仗座、召予令勘申祈年穀奉幣日時、出陣令陰陽寮勘、來廿六日取勘文奉上卿、召外記令奉例文、令左大辨書定文、入定文并勘文於筥令予奏、先參殿下○藤原師通二條殿、付說長令內覽、其次神祇官請奏同內覽、先申上卿也、新藏人雅職、同內覽伊勢幣料、同車歸參御前奏聞、則出陣下申上卿、幣料等下給、予則下行事史俊忠日時勘文、使定文被下外記、上卿退出、

大治五年二月五日戊寅、頭中將送書云、祈年穀奉幣日時、今日可定申、○中略申時參內著仗座、召官人令敷膝突召辨、權辨顯賴朝臣來、仰云、祈年穀奉幣日時可令勘申、則持來勘文、○中略召外記令進例文、入筥持來、使宰相以下交名別入也、參議左大辨兼在座召硯、外記持硯筥置參議座、續紙入此筥也、予例文與今度使々交名見合、廿二社次第令書了、左大辨持來定文、予一々見了、暫取例文等、入日時勘文并使々定文、召權辨仰云、內覽并奏、○中略則御覽了返給、予取定文結申、辨氣色、則起座召外記返入例文、給外記之次、仰云、伊世使等可催、又使王可令申、二社使仰神祇官可令著進、外記定信取筥稱唯、歸入之次取重硯箱退歸了、行事辨覽神祇官請奏、廿二社幣料也可內覽奏聞由示之、返給則奏了返給、予結申則下、同辨結申、辨歸了、伊勢幣料藏人今日不下、十四日丁亥、奉幣行事外記紀有定來、申使々散用遲申上由、勘發之處、上﨟外記定信本奉行之人也、六ヶ日取籠定文不渡之間懈怠者也、太奇恠也、仍爲問子細召遣定信了、十五日、外記定信來、奉幣使事勘發申旨甚非理也、太奇恠歟、邦忠事以件外記申內大臣之處、早可令勤由返答、可催之旨仰含了、

〔兵範記〕仁安三年七月十七日丙子、巳刻參內、行水解除午刻權大納言公保卿、參議家通朝臣、參著左仗、次召辨、下官參軾、○中略被仰可令勘申祈年穀奉幣日時由、召大內記光範被仰宣命事、下官退去、於床子座仰右少史中原季能、季能於腋陣召勘文於在憲朝臣持來、下官獻上卿退去、次上卿召外記筥入之、次召下官被內覽、下官參殿下、高倉內覽了返奉、上卿又申神祇官申請諸社幣料請文、上卿見了被加下日時勘文、下官先結申請文、其詞云、神祇官請申幣料、上宣宣旨宣へ、次退著床子下、史仰詞同上、此間上卿召例文硯等被定使等、六角宰相執筆、次令外記被內覽、令藏人大進奏聞之、次大進下申伊勢幣料內藏寮請

奏、次召下官下幣料請奏、結申退出、於床子又下史了、次召外記下給使定文、又被開伊勢使卜串、大内記覽宣命草、上卿令藏人大進奏、即返給令清書、攝政殿依御服日數不内覽、是年々例也、（寛治元年七月廿一社奉幣、康治元年六月十一日伊勢幣、久安二年八月十九日廿一社奉幣、各依輕服日數、不内覽宣命草并清書之由、外記勘申也、）此間下官逐電參八省、入自嘉喜門著座、

〔玉海〕嘉應二年二月十二日癸巳、此日祈年穀奉幣定也、申時許著束帶、（蒔繪劒如常○中略）參内、（于時御閑院）入自左衞門陣著左仗奥座、則家通卿著横切座、次余移著外座、以扇直履之後、以官人令置軾、此次仰可召左少辨之由、（行事辨也）即經房來就膝突、余仰云、祈年穀奉幣日時勘申セ、經房微音稱唯、退持參日時勘文、（不入筥）余置笏於奥、取文置前、披禮紙取勘文、見了如本卷之置前、經房退之後取笏、以官人召外記、則賴業眞人參進、余仰云、奉幣ノ例文持參（禮）、賴業稱唯退、次六位外記持例文筥、趨來置余前、（其筥入五位已上歷名一卷、年年定文一卷、已上又今度可奉仕之使交名二通、公卿一通、四位五位折紙一枚、）是其社其人著定之所注也云々、又一人持硯筥置參議座前、（入續紙）余略見例文交名等了、取笏目家通、家通退下、更昇著參議座上頭、揖正笏而候、余示氣色、家通置笏取續紙、撤禮紙卷之入硯筥下方、卷返續紙横置座前、摺墨染筆置筆臺、取副續紙於笏候于氣色、余目之、參議置笏染筆、余讀揚之、（先讀揚云、諸社奉幣ノ使、參議書了、讀上之次伊勢、次石清水、次第先令書社、且可入使之由歟、是近代之例歟、但故殿令勤奉幣上卿給之時、先書社、其後入使、仍隨後例也、）次余披見、今度使交名讀揚之、（可書之定ニ讀之、官姓朝臣名也、雖公卿如此、自石清水至北野、次第示之、伊勢、丹生、貴布禰等雖注社號、不入、依爲神祇官之沙汰也、）參議入使等了、注年月日、押遣硯於奥、取副定文於笏進余前、（經端座也）余置笏取、參議復座之後披見之、（无禮紙）如本卷之取出例文等、置筥奥方、加入日時定文於件筥、取笏以官人召辨、即經房來、余置笏押遣筥、仰云、内覽、經房取筥退、頃之持歸置余前、則示可奏之由給之、經房參進、少時返給之、余先結申日時、經房仰云、依勘申レ、余微音稱唯、卷文入筥口結申定文、經房仰云、依定申レ、余卷文入筥如初、經房退去、次加入例文於件筥、取笏以官人召外記、則賴業參進、余押出、賴業搢笏取之、余目之即唯退、（○中略）次行事辨覽神祇官請奏、余取之披見、謬欲結申、忽覺悟卷之、即付辨奏之、返給結申如恒、經房仰云、宣旨ノタウヘ、余微唯卷文返下辨、辨又結申、余仰仰詞、（如職事）經房稱唯退了、次藏人下内藏寮請奏、余結申、藏人仰詞不聞、大略有氣色、余微唯卷文置前、（藏人不待稱唯退歸了）次召行事辨下之、辨結申、余仰詞如初、辨唯退去、次召外記、則賴業來軾、余仰云、伊勢、丹生、貴布禰等使、仰神祇官可令差進者、賴業稱唯退了、（須下定文等之次仰此事也、而思失不仰之、仍更召仰之、頗似有事煩、但如此事更无定法、是不及失儀也、）次以官人傳仰内記可參之由、則内記參進、（于時臨秉燭之期、座中彌以暗然、）余仰可草祈年穀奉幣宣命之由、内記退了、後起座欲參御所之間、經房於陣腋之邊示云、今日日時定文等内覽事、今朝參攝政殿（○藤原基房）之次、不可持參之由有其仰云云、余參御前、攝政被參、良久談話、及子終退出、抑今日大内記不出仕、尤奇恠、宣命事、大内記不參之時仰文章生、内記共不候者、仰儒者辨是恒例也、而仰非文章生内記頗失也、但大内記遂可出仕、依所勞今日許不參也、強雖非巨難爲後記之、　十五日丙申、此日祈年穀奉幣也、

〔吉記〕承安四年八月十八日壬申、今日祈年穀奉幣也、（○中略）當日被勘日時定使等、

〔玉海〕承安五年二月七日己未、此日祈年穀奉幣定也、申刻著束帶參内著仗座、（先奥次端、于時御于閑院、）使官人置軾之次、仰可召權辨之由、經房來軾、仰祈年穀奉幣日時可令勘申由、即持來、見了置前、次召外記（大外記賴業參上）問執筆宰相參否、申云、賴定卿只今參由所申也、仍遣召使了云々、且仰例文硯等可進由、其後良久不進、仍以官人令催促、小時六位外記、持參例文筥置余前、目外記退、其後取硯置宰相座、（二人可催也、一身嗣役尤見苦事也、）余披覽例文之處、今度可勤仕之者折紙、大原野、吉田等使同名同姓也、依不審召賴業問之、申書誤由、仍竊給折紙、賴業取之副笏退下、摩改大原野使持參、余取之入筥了、（近代相兼數社之使定例也、然而定文ニハ不可載同人、仍今改直也、）先是招光雅、宰相之許可遣人由仰了、又尚遲々者可用辨之由相觸了、使々事、無懈怠可沙汰之由、此次仰含了、參議尚不參、仍召經房仰可書定文之由之間、賴定參入、仍不用辨、賴定直著參議座上、余讀上例文等、欲令書之處、給折紙可書之由申請仍給之、（此人每度如此、不便云々、）書了持來、披見之處有落字、仍返給令直之、賴定申云、傍可入歟如何、答傍不可入之、摩改可改直也、賴定改直持來、字樣全不見、

然而重能令直加入日時定於筥、取出例文、招於經房、問關白被候禁中哉否、申云、被口里第也、仍招光雅奏之、（今日依御物忌書宿紙、先例御物忌之時、先奏聞、次內覽者也、仍如此、）返給結申、次光雅持來內藏寮請奏、結申、次召辨仰云、內覽若申請歟、（近代辨官依參入煩、雖申請關白云々、仍內々問之、）不然云々、余曰、頗雖非例事、且可覽神祇官請奏、是爲令早速也、經房持參之、余見了、撤筥文等、入件請奏、付辨奏之、辨有傾氣、件請奏近例上宣也、辨之所傾、不可然、但上古奏之、又北山抄說如此、仍今日雖爲異說、用此儀、近代之人不辨古事歟、爲之如何、卽持歸、余結申、卽加內藏寮請奏下給了、（不入筥）入辨乍二通結申、仰詞如恒、辨退去下史、又召辨付日時定文等、（入筥）經房云、可歸參歟、余曰、舊例或有直給外記、上卿早出之例、近代如何、經房云、雖不打任事間有例云々、余案之宿老人公事多々之時可有如此之非常事歟、行略儀之條甚不當、仍仰可歸參由了、此間良久候座、仍召大內記業實、（先是問辭別之有無於光雅、光雅云、未申定云々、仍不仰辭別事、）仰可草宣命之由了、次經房歸參、余加入例文等於筥、召大外記下文之、其次仰伊勢、丹生、貴布禰等使、仰神祇官、（略）申）其後余退出、經房光雅等云、期日近々間幣物定難、具歟、此條近代定例也云々、（略）申）

古奏之、又北山抄說如此、仍今日雖爲異說、用此儀、近代之人不辨古事歟、爲之如何、卽持歸、余結申、卽加內藏寮請奏下給了、（不入筥）入辨乍二通結申、仰詞如恒、辨退去下史、又召辨付日時定文等、（入筥）經房云、可歸參歟、余曰、舊例或有直給外記、上卿早出之例、近代如何、經房云、雖不打任事間有例云々、余案之宿老人公事多々之時可有如此之非常事歟、行略儀之條甚不當、仍仰可歸參由了、此間良久候座、仍召大內記業實、（先是問辭別之有無於光雅、光雅云、未申定云々、仍不仰辭別事、）仰可草宣命之由了、次經房歸參、余加入例文等於筥、召大外記下文之、其次仰伊勢、丹生、貴布禰等使、仰神祇官、（略）申）其後余退出、經房光雅等云、期日近々間幣物定難、具歟、此條近代定例也云々、（略）申）

奏神祇官請奏事、或先召陣勘文、加入日時定文奏之有便、今日追奏之、又不及殊難、不待內覽歸參上可早出例文等下外記、可尋取定文日時等之由仰之、例在保延五年臨時奉幣、（宇治左府記）然而尙依爲非常說、仍所相待也、

八日庚申、光經申云、經房語云、昨日定之間有和談事、神祇官請奏被奏問、仍申、近代爲上宣文之由、是先年御奉行之由不令奏聞給之故也、罷歸引檢之處、有奏聞之例、尤有興事也云々者、先年奏否不覺、可見愚記也、

〔猪熊關白記〕建久二年二月十日己丑、親國來申云、祈年穀奉幣、上卿右大臣（藤原）雅）領狀、可爲當日定、云々、尤不審々々、此大臣被好事也、

正治三年二月十六日壬午、此日祈年穀奉幣也、當日被行定、雖不當有近例、又子細見先日記、

建仁二年二月廿日乙未、此日祈年穀奉幣定也、未時許參內著仗座、（奧座）頭辨公定朝臣來、仰祈年穀奉幣日時可勘申之由、其次仰宣命趣、頭辨退出、次余（藤原家實）移著外座、左宰相中將家經著座、令官人置膝突、其次仰可召行事辨之由、卽左少辨長兼來、余仰祈年穀奉幣日時可勘申之由、辨退出卽持來之、余披見之了置前、次召外記、召例文硯等、卽少外記一人持來例文置余座前、今一人外記置硯於宰相前、次余披例文、家經卿令書定文、如例書了覽之、披見了入定文并日時於筥、召外記返給、（依殿仰不入內覽也、）次召內記仰宣命可草進之由、又仰宣命趣了、頭辨來下內藏寮請奏、余結申召行事辨下之、卽同辨覽神祇官請奏、見了返給、廿二日丁酉、此日祈年穀奉幣也、午時許參內、

〔岡屋關白記〕建長三年八月廿八日丙辰、今日辨宗雅持來日時使定文、不披見依爲輕服日云云、先例雖持來之、輕服之時不披見、往還有煩候直廬事了參上有例、今日依無指要不參、

〔吉續記〕文永四年八月五日、先參關白殿、內覽可奏聞之由有仰、（略）中）上卿著仗座辨（親顯）辭別事、親朝招寄大內記在守、內々仰御卜形之趣、以詞示上卿、不書下、有先例歟、人々難之、柱下當座草進如此、臨時宣命辭別職事之大事也、然而不書下、以詞仰上卿、事先例不審、且可謂有若亡歟、上卿向神祇官人召、予參軾、上卿仰云、祈年穀奉幣日時令勘申云々、予於床子召六位史能兼仰之、史持來日時勘文、予取之披見、如元忠之持參進上卿、上卿披見了之後、欲退歸之時、上卿被命云、內覽事申請歟、無其儀、可尋奉行職事之由返答、申、上卿重被命云、內覽事辨可申請事也、關白不被參內者、以狀可申之由被命、辨內覽事申請之條、不存知之事也、然而重不及申子細、退入、相尋奉行職事之處、殿下御參內云々、次召外記被仰例文硯事、

〔薩戒記〕永享五年二月廿八日壬子、今日被發遣祈年穀奉幣也、予○中山勸春日使也、仍巳刻著束帶（如例時繪勿）參內、同始刻事始、園中納言基秀、著躑躅打下襲、此人年齡已六旬有五、仍用平絹直衣（平絹白奴袴等也、然者可用柳下襲歟、但若隨所得歟勿論）著陣、奧座、奧掃等（如常）、則移著端座（其作法如例、直）、頭中將隆遠朝臣下吉書、予不覽之、職事仰詞云、予令官人召辨、（其詞云、右中辨幸房來軾、予下吉書、辨結申予仰詞、其詞云、宣旨（ノタマヘ）、右中辨幸房來軾、予下吉書、退入、以上著陣之儀也、次上卿勘申由、勘許之後移端、而今日（今日復任已後、初著陣之間、無左右、移端、今又不起也、依日（直）著端奉行之例存之、今可准此儀也、職事又存其例歟、次予令官人召辨、（其詞如先）右中辨幸房來軾、予仰日時可勘由、（其詞云、祈年穀奉幣日時勘申、辨退入則持參勘文、（不入持手）予令官人召辨、（其詞如元）右中辨幸房來軾、押出筥仰可奏聞由、（先可內覽也、然而豫申免之由、辨示之仍不仰內覽事可奏聞之由、直仰了、猶仰可內覽、由依辨申）參議一人（親尚具之、）先爲行日時幷使定等也、（須兼日行之大略、同日、是叶公平之故歟、）予先有著陣事、（略）中先著仗座、奧掃等、則移著端座、（其作法如例、直）、頭中將隆遠朝臣下吉書、予不覽之、職事仰詞、予令官人召辨、（其詞云、右中辨幸房來軾、予下吉書、辨結申予仰詞、其詞云、宣旨（ノタマヘ）、右中辨幸房來軾、予下吉書、退入、以上著陣之儀也、次上卿勘申由、勘許之後移端、而今日（今日復任已後、初著陣之間、無左右、移端、今又不起也、依日（直）著端奉行之例存之、今可准此儀也、職事又存其例歟、次予令官人召辨、（其詞如先）右中辨幸房來軾、予仰日時可勘由、（其詞云、祈年穀奉幣日時勘申、辨退入則持參勘文、（不入持手）予令官人召外記、（其詞云、外記メセ、）大外記師勝朝臣來軾、予仰（可參也、者明豐有不審之氣、暫思慮、予示云、有可參歟、仍內記參進、）納言仰宣命事、（其詞云宣命、爲清有不審之氣、尤理也、大內記退入、少內記安陪盛久持參宣命草、入筥、）納言令官人令撤軾起座、就弓場奏聞、明豐於臺盤所付內侍奏聞、則返給、納言直欲退出、予示可被奏清書之由、仍立歸仰、少內記以清書宣命入更草、令進之、更招明豐、有不覺悟之氣色、仍閉口了、

〔公名公記〕永享八年二月十二日、今日祈年穀奉幣發遣日也、○中略巳刻小浴解除參內、（薄繪細紐地文帶、前平緒無、）如例時繪勿參內、同始刻事始、園中納言基秀、著躑躅打下襲、此人年齡已六旬有五、仍用平絹直衣（平絹白奴袴等也、然者可用柳下襲歟、但若隨所得歟勿論）著陣、奧座、奧掃等、則移著端座、（其作法如例、直）、頭中將隆遠朝臣下吉書、予不覽之、職事仰詞、予令官人召辨、（其詞云、右中辨幸房來軾、予下吉書、辨結申予仰詞、其詞云、宣旨（ノタマヘ）、右中辨幸房來軾、予下吉書、退入、以上著陣之儀也、次上卿勘申由、勘許之後移端、而今日（今日復任已後、初著陣之間、無左右、移端、今又不起也、依日（直）著端奉行之例存之、今可准此儀也、職事又存其例歟、次予令官人召辨、（其詞如先）右中辨幸房來軾、予仰日時可勘由、（其詞云、祈年穀奉幣日時勘申、辨退入則持參勘文、（不入持手）予令官人召外記、（其詞云、外記メセ、）大外記師勝朝臣來軾、予仰（可參也、者明豐有不審之氣、暫思慮、予示云、有可參歟、仍內記參進、）納言仰宣命事、（其詞云宣命、爲清有不審之氣、尤理也、大內記退入、少內記安陪盛久持參宣命草、入筥、）納言令官人令撤軾起座、就弓場奏聞、明豐於臺盤所付內侍奏聞、則返給、納言直欲退出、予示可被奏清書之由、仍立歸仰、少內記以清書宣命入更草、令進之、更招明豐、有不覺悟之氣色、仍閉口了、

仰云、伊勢、丹生、貴布禰使仰神祇官令差進、師勝朝臣稱唯退、伊勢事雖不可及仰、猶仰了且存例也、先例頭中將隆遠朝臣下内藏寮請奏（是伊勢幣料請奏也、仍無予結之詞、）予微唯、奏請奏暫置座前、職事退入、予召辨下内藏寮請奏、幸房結申之、予目許、幸房退入、辨此後可下之歟、今日延引、次可開下串也、然而當時使王一人之間無此事、使王數輩時、爲定一人開下串之故也、但猶仰可開之由於外記、外記使王一人間、不進下之由令申者、其時上卿可諾歟、（中右記所見、在京之使王一人之時、雖知之、猶於當座仰下串可使之故也、次召内記仰宣命事（其詞云、祈年穀奉幣宣命令草、）内記稱唯退、此間六位外記跪小庭、申使王御馬事、（六位外記史之習、候小庭直不著軾、然而上卿有可仰事召之時、先目令著軾之後仰之、況乎如此外記遙而有申事時、上卿不目許間、乍居小庭申之、法事通儀也、○中略）予諾之間外記退、次少内記安倍盛時（兼右少史）持參宣命草（伊勢與諸社宣命之草兩通、書著軾紙入筥、不書入使名目付等、）著軾、於外記史者直不著軾、予置笏引寄筥、披見之、如元入筥仰可内覽由、（但關白坐里亭、其程遼遠、持向者頗可停刻間、内覽申使上由相尋之處、總而不知案内、仍准申使之儀則奏聞、猶不可然事也、但往昔猶以例式文悉不及内覽歟、有辭別者、猶註可内覽也、）（代前關白也）頭中將隆遠朝臣出逢、此間予見遣内記、方々内記持來筥之間、予指笏取筥付隆遠朝臣、拔笏、其次奏使王御馬事（其詞云、使王御馬申云、此事奏清書、次奏之、於本宮仰可賜之由於外記也、未奏草已前外記申時者、如今日奏草之次奏之歸陣、仰清書後、召内記持來筥之由、予指笏賜筥、令持内記、拔笏、）又云、使王御馬事聞召ス、予歸著陣端座、（其作法如例、自直沓也、）内記置宣命筥於座前、予仰可清書由、内記持退也、此後召外記可仰御馬可賜之由也、而忘却於陣不仰也、不可說也、次右中辨幸房下神祇官請奏、（是諸社奏也、伊勢一社奉幣之時不可下之也、）予披見之則返下辨、（往昔奏之歟、而近代不奏之、中古以來如此、）辨結申之、（予目許、又上卿不結之、不奏之故也、）辨持來宣命清書、（入筥、伊勢絲祇悉黃紙、皆是例也、）將隆遠朝臣奏聞、（其儀併同奏草、又不及御覽、）小時被返下之、予取筥給内記、直出禁門於陣頭乘車、（四條宰相已下外記史相從也）參向神祇官、（爲發遣伊勢已下幣也）

〔新儀式四臨時〕祈年穀事

若有可祈年穀、上卿奉仰、先以陰陽寮勘吉日、文、幷十六社（或社員增減不定也）使差文、○中略奏之、前一日上卿以宣命草附藏人奏之、御覽返給令清書之、當日供御浴奏覽清書、上卿返賜、召使頒給、（依他祈奉幣亦准之、）依奉幣伊勢行之、（幸八省院、還宮之後、立諸社使、）

〔江家次第五二月〕祈年穀奉幣○中略

同御裝束

辨參八省令奉仕裝束、左右衛門奉仕掃除幷敷砂、小安殿馬道以東四間之内、東一間敷滿薦、（東西一間薦上又斜敷一枚、糞乾妻）第二三四間、幷馬道以西四間南邊立布障子、馬道東西各立大布衝立障子各二本、西衝立障子西邊逼北壁立屏風一帖、（大宋）其内敷帖一枚、（東西妻）爲内侍候所、其屏風前立高足案一脚、（其上有大筥如斗）其東敷半帖一枚、爲行事辨座、（當大極殿艮角壇下、南北行立幔一條、當同幔北妻、西去六七尺許、南北行立幔、卽經小安殿東到北廊砌、去砌五尺許、此幔南當大極殿艮角柱、北當嘉喜門西腋柱、）當昭慶門東廊、嘉喜門以西、五間之内西四間爲公卿座、西第二三四間北簷子壁邊立亘筵、同四間内敷薦、西第二間以東、三間内薦上敷滿筵、其上南北對座、敷半帖長帖等、（西第二間兩面端、第三間緣端半帖等也、第四間長帖、）當上卿座砌上、敷縢突小筵、幷四間幷第五間南柱外面、打亘幔臺、引亘三幅調布大幔、第五間爲行事辨以下座、（西以廣筵立滿之、引於大幔也、東不引同大幔、）其内設帖三行、（一行在西邊、南北妻、）（卯酉妻相對爲座、）（行事官掌等座、）嘉喜門以東廊七間内、西三間西南東三方、引廻同大幔、其中敷座三行、（二行在南北邊、）（南史座、一行在東邊、南北妻行事官掌等座、）東子午廊十二間之内、南第三間東簷子下壁下立筵、其前敷筵、其上敷半帖一枚、爲上卿座、（大臣者兩面、納言者緣端、其前敷縢突小筵一枚、頌在坤方、）第五間敷帖一枚、爲辨座、（黃端帖、東四妻、）第六間敷同帖一枚、爲外記史内記座、（頌在第五間敷帖一枚、爲辨座、（黃端帖、東四妻、）第六間敷同帖一枚、爲外記史内記座、嘉喜門北庭、西東北三方引廻大幔、（立白木柱引之、西幔當門、西第五柱、南北行引之、東幔當門、同第四柱、引之、北幔又東西各五間許、立之、但中央一間、頗差去東西行引之、以其間爲往反路、）大内中重宮城門爲裏諸社幣之所、（門顛倒之後、立幄其中設座、不必著、）（諸司座在酉、）行事辨幷史、早參候、於八省内侍乘行事車、參入、下自永福門、其内敷筵道、入自小安殿北面西戶、（女官等相具、以几帳遮之、）行事辨内藏寮官人使忌部等相共檢臨、（以其次丈尺、）女官裹之、（先内宮料、五色綾幷生綾之上加兩面錦等、其上以

柳筥盛之、亦以木綿結所、其上以繡布裹之、以木綿結付短册、内藏察、亦各成途文加之、令内侍懸手、本須内侍裹之歟、其緒以下並以六丈爲匹端、次置短脚小案、置之於第一間、斜行薦上、内宮在内、外宮在外、件案長坤爲妻、史於宮城門裏幣、裹了次第立於相去五尺許、幣物同長坤爲妻置之、

嘉喜門外面東西腋、可東行者立東腋、可西行者立西腋、

石清水　松尾　平野　大原野

廣田　北野　已上並立西腋

賀茂上下　稻荷　春日　大神

丹生　貴布禰　已上立東腋

同奉幣儀〇略、中

當日早旦、内記清書宣命、伊勢繰紙、内記自藏人所請之、必一倍給之稱之、損紙、夜間書之、上卿史相共書之、前一日被奏草時、乃請紙、夜間書之、上卿參陣奏、宣命清書入筥、以伊勢繰紙、内記自餘黄紙、賀茂紅紙、自餘黄紙、内記員少時、外記

著陣之後、遲引之貴、爲難遁也、尋取使差符於外記、書入之筥一合、次第積之、每宣命細搔同色紙結中、或說不結之宣命之上端銘社名一字、所謂伊、石、賀、松、平、稻、春、原、神、上、和、廣、龍、住、日、梅、吉、祇、北、丹、貴也、但伊勢賀茂等不銘、是依紙色異他也、就件次第並筥內、賀茂以下廿一社並之、伊勢一通、諸社宣命首橫置之、

成季朝臣記曰、二條殿教實招客之次、被語仰云、往年或人云、諸社奉幣同日被發遣之時、當初以石清水宣命諸社宣命首橫置之、而彼時以伊勢宣命可橫置之由有夢想告、以來以伊勢橫所置也、又敦光朝臣曰、俊明卿稱家說、以石清水宣命橫置之者、故內府通一度被用其說之處、自上直入下給、又承保二年三月六日、大內記成季朝臣、如例以伊勢宣命一通、諸社宣命上橫入之、而上卿權大納言俊家卿被命云、伊勢宣命强以橫不可入、但又有其說歟被命、此日諸社一列所被加入也、成季申云、近代皆橫所被入也、往古以石清水宣命橫入云々、然而近代只以伊勢橫所被入也者、是則博陸前大相國御說也、奏下之處、如近代例以伊勢宣命橫入直所下給也、

時刻上卿著仗座、召內記仰宣命可持參之由、內記持參清書宣命筥候軾、內覽奏聞儀如恒、上卿返給宣命、經月華脩明等門向八省、著嘉喜門北廊座、召辨問幣物具否、召外記問使參否、次以召使召內記、內記持參伊勢宣命、入筥其路入自嘉喜門、降自南石階、立庭上幕巽角、北面上卿起座著東廊座、內記持宣命筥相隨後座、次辨外記史等相隨、上卿著座、此座五位必著之、今六位著之、座定之後、內記置宣命筥於上卿前著座、上卿座西面一許丈相去、敷辨座南面政官座、東上南面內記外記史等一行著之、次召使趨出召中臣、中臣相率齋部卜部等、出入自東福門、或雖無其召進參也向小安殿、忌部卜部等請幣物二捧、內宮、外宮、自上捧之出自同門、中臣取笏在其後、次王著上卿前軾、上卿賜宣命、王賜之出自同門、幣物出郁芳門之後、上卿目內記、參進賜空筥、本座北二間許、當腰長押下持筥立、辨外記史等立定、上卿起座、過其前之間辨磬折、上官平伏、大臣之時、五位外記史平伏、納言時磬折、於六位者、雖納言平伏、但內記依捧筥不平伏也、上卿還著北廊座、辨出自嘉喜門、於小腋行事、諸社幣皇城東立件門東腋、內記隨召或不待召參云々持參諸社宣命、置上卿前、內記將出嘉喜門東腋邊之時、上卿召

諸社使一々賜之、事訖辨以下政官立嘉喜門、并一行、上官一行、南上東面、上卿出自待賢門、辨少納言相分入自脩明門參內、外記史等相隨送之、上卿於待賢門霤下一顧而退也、

神祇官儀八省無實之時用此所

神祇官門外東腋敷筵、爲辨官并內記座、南上西面西腋敷筵、爲外記史座、南上東面同門內東腋敷筵、爲奉幣使公卿座、北上西面西腋敷筵、爲上卿座、東面、近代上卿多被著東腋座、內記隨上卿召、持參伊勢宣命一通、入筥其儀先起座著沓降壇下、搢笏取筥、入自門扉、過上卿前立庭中、西上北面次上卿起座著東屋、近代用幄大內記持筥相從、辨外記史少內記等在其後、上卿已下著座、上卿南面、辨東面、其後史內記等同東面、上卿座定之後、大內記持筥渡砌、進上卿前退歸、近代大內記不著座、六位所著也賜宣命於使王之後、上卿召內記、內記參上卿前、給筥退歸、外記史起座立幄中、上卿經外記史內記等前、著門內本座、辨外記史內記等經上卿前、著門外本座、次上卿召大內記、大內記持參諸社宣命、納筥、社次第並之、進上卿前獻筥、退歸著本座、上卿召諸社使、一々賜宣命之後、召內記賜空筥、次上卿以下退出、

〔小右記〕天元五年五月三日甲午、參內、今日爲祈年穀奉幣諸社、十六社左府參射場殿、被奏宣命草、今日可參被奉八省院、而雨脚不止、仍停止、○中略又被奏宣命清書、了經月華陰明等門、被向八省院、各賜宣命了、○中略今日主上於南殿遙拜之、下南殿御格子、當御帳巽、供神事御座、

永觀三年○寬和元年二月十七日壬辰、早朝參內、被立祈年穀御幣使、十六社未時幸八省、先是左大臣○源雅信奏宣命、○中略御幣裹內侍藤基子、於八省俄申有月事之由、仍以女史令裹也、扈從行幸之內侍一人不候、以代官令奉仕、甚奇事也、御小安殿之後、其儀如例、但不召舍人以前、有兩段再拜之御拜、是雖不見內裏式、自邑上御時已來、已有此事、仍奏聞此由事、了還御云々、

寬弘二年五月廿六日癸酉、今日八省行幸由、將曹安春申、未刻許參內、左右內三相國○道長、顯光、公季、中納言齊信、時光、俊賢、參議有國、懷平、輔正、忠輔、行成、正光、三位中將兼隆等在陣、右大臣召宣命清書、於陣

壁後、令持內記、經宜陽殿壇軒廊等、進御前奏聞、復陣北座、先例著南座、召宣命見了返給、內記渡小庭、進御前、而今日不然、若依左府著南座歟、上﨟雖在南、申案內猶著其座、可見宣命者也、今日儀違前跡、申二點幸八省、右大臣進東福門給伊勢宣命、小選御輿歸御本宮、右大臣於仗座給石清水等宣命、

〔左經記〕寬仁元年七月十一日丁未、今日於神祇官可被立祈年穀幣、〇中略延長四年六月十一日有被立例、准此例於神祇官可被立幣使之由被兼定畢、件御裝束等無慥日記、仍量便宜所定行也、其儀北廳北面中西腋二間許引廻幔、其中立屛風敷筵疊等、爲內侍裹御幣所、東一間敷薦等爲置御幣所、同廳東庭立五間幄一宇、卯酉爲妻面引幔東北西等爲給宣命之所、〇中略北門內□□□□西面西腋使々宰相座、北上東面同門外東腋□□□等座、辨西面、內記南面同門西腋、外記史官外記史生官掌召使等座、外記北面東上、史東面南上、史生已下東上南面、頗下西敷此座、同門前庭引廻幔、於神祇官後廳座裹諸社幣等、列立北大門東腋垣邊、及申刻源大納言從內被參入、先著北門座、召外記被問諸社使々具否之由、外記申具畢由、卽率辨以下著東幄座、次使中臣忌部後取等入自東門、賜御幣退出、次召使王、使王入自同門、賜宣命退出、次歸北門召諸社使等賜宣命、□退出云々、　四年二月十四日丙申、參內、於八省被立祈年穀使、宮大夫、辨右少辨、出御南殿有御拜、關白殿令催給其儀南殿御帳懸帷、下南面隔子等、唯上東第一間御隔子、一間立屛風三帖、東北西各立一帖其內敷筵幷疊等爲御座、剋限出御、頭中將取畫御座御劍立御□拜了卽還御、

長元元年六月三日丙寅、參關白殿、〇藤原賴通、中略仰云、爲祈年穀幷疫癘等事、可被立廿一社奉幣使之由、前日右衞門督奉仰、今日參入定使々幷可令勘日時云々、不可內覽之由可示督者、則參內、督於陣座令余書使々依參議遲參也加日時文、七日、時巳午、進弓場令奏還給、歸於陣座下外記、次余申神祇官幣料勘文於督、奏下畢、同不內覽、御服間不內覽神事文也、　七日庚午、早旦參八省、內侍相共令裹御幣、上卿令奏宣命草幷清書等、率上官等、從內裏被參八省、午二刻被立伊勢使、歸北廊被立諸社使々、是依疫癘幷祈年穀所被行也、上卿退出、　四年二月十一日戊子、巳刻參內、依祈年穀奉幣使也、內府〇藤原敎通忽被申障、仍召他上卿

之間已及晚景、權大納言〇藤原長家被參入、令開卜串、幷奏宣命草清書等、著八省、先伊勢使等入給幣、退出之後、大納言著東廊、召使王給宣命、次歸北廊、召諸社使給宣命、余爲平野使、參社奉幣了歸京、　七月十三日戊午、午刻許參神祇官、依爲祈年穀奉幣也、日來八省修理、仍於此官被立使也、行事辨史外記他人不參、仍暫徘徊神殿屋邊見裝束體、神殿東一間敷葉薦等、頗巽乾構、スヂカヘテ敷之、立小机二脚置內外宮御幣、自同第三間北壁下至于南柱引亘斑幔、自同柱至于西妻引亘同幔、北向西戶東邊立廻大宋屛風、敷筵疊等、爲內侍裹御幣處、同屋東庭立五丈幄一宇、東西北面引幔、東一間上座南向三間辨座、東向四間外記史內記座北上東向五間史生等座、北上東向南去二許丈引亘斑幔、東面爲妻北門內東腋上卿座、西向西腋使宰相座、東面北上同間外東腋辨座、西向北邊內記座、南向西腋外記座、北面東上西邊史座、東面南上北邊官外記史生官掌等、南面東上自同門艮角柱東行二許丈、北行三許丈、立貫木引幔、又自乾角西行二許丈、北行三許丈、同立貫木引幔、又門北去四許丈同立貫木引幔、史於神祇官東廳屋令裹諸社幣、立亘北門東西引幔貫木、未刻上卿率內記等、先是參內、奏宣命草幷清書等、經逢春門被著此官云々、先著門座、召辨南砌置膝突問御幣等具不之由、辨申皆具之由、次召外記問使々參否之由、外記申皆參之由、上卿令召使、可賜御幣之由令告神祇官使、中臣率忌部後取等、入自東間給御幣退出、次上卿召內記給宣命、先是內記奉上卿也內記取之入筥磬折立前庭、上卿移幄座、內記相從辨外記史同著幄座、上卿令召使王、令入自東間、經南庭斑幔東妻、進膝突給宣命退出、上卿目內記、內記進給筥退去、上卿以下歸北門座、辨以下經同門往還先召石清水使、使入自門著膝突、給宣命退出、次召賀茂使、左宰相中將起座著沓、進居上卿座前板敷上授宣命、中將置笏取宣命、又把笏揖、起座著沓歸立揖退出、次々使使、次第給宣命退出、余參平野、先洗手社司儲手水著祝座、禰宜捧御幣立前庭、先把笏再拜、了插笏讀宣命了、禰宜奉幣了返申、次拍手、余又應之、次再拜退出、

〔後二條關白記〕寬治六年二月廿四日丁丑、時雨降、參右仗、皇太后宮權大夫〇源俊實著橫座、余〇藤原師通令置膝突、依官人未參、令隨身府生置膝突、召大內記、卽參、仰云、昨日二字可被直入云云、直了奉之、仰可令

獻宣命清書之由、承仰天退奉、上一々開見了、昨日不經內覽、早可被奏、仍令持內記、而余就御所奏聞返給、卽向八省著北廊座、問幣物具否、如常、召外記使事被問、稻荷使令申未參之由、仰重可令催由、內侍良久不參、頻ニ令催申可參之由、良久所參也、行事辨來云、幣裹了、令催內記如常、其後著東廊、甚雨、隨身等出自東福門外候、忌部中臣等二人入自東福門、更西折經大極殿壇上東北等幷清暑堂立北間、北向立定忌部進而取幣、此間事可尋退出入門、了使王參解結緒、見定使所名字、其後賜於使王、使王□了退出、被下覽筥大內記如常、復本座召石清水使、給之如常、上達部一々給了、外記參申云、祇園使稱襪所勞、待賢門下給宣命出、一々給了、一町許程、上卿退出、於雨儀忌部中臣等立所可尋云云、

〔中右記〕寬治八年〇嘉保元年七月廿日己未、天陰大雨、有祈年穀奉幣、廿二社早旦依爲行事參八省小安殿、率行事史時眞、官掌延光相催所司、御裝束存先例、見指圖但甚雨之間、嘉喜門北砌、已以流水、仍召仰修理職、俄令儲借橋、板二枚許爲上卿道、未時許、上卿右大將〇藤原忠實相率上官等被來、先使參議三人被參著本座、諸社使參集、此間雨脚暫止、仍予與行事史出立於嘉喜門前、上卿相揖被過著本座、先是外記置式筥以召使召辨、予進出參膝突、上卿命云、御幣等具了哉、則申具了之由歸本座、上卿又以召使召行事外記、通景則參膝突、命云、使使幣具了哉否、申具了由歸本座、次上卿起座被進東廊座、大內記在良取宣命筥在上卿後、予行事外記史相從、上卿前召使六人隨身等上卿著東廊座、伊勢使等三人進出、用雨儀路、大極殿壇上取幣物出、次令召使召使王、著膝突、上卿給宣命、了後使還出、上卿召內記、返給筥了起座、此間行事辨外記史等列立壁下、南上西面上卿相揖被過、被著本座、乍居座給使々於宣命、先令內記進宣命筥石清水使源俊輔朝臣、賀茂下上左宰相中將保實、松尾皇太后宮權大夫公定、平野左大辨季仲、各有次官稻荷使基實朝臣、自餘地下五位等各給宣命、出嘉喜門之間、左右衞門衞士等持御幣前行、御幣兼立件門左右著之、事了上卿被出門之間、辨內記上官等出立、先例無此出立、上官等失也者、辨一人、其西上官一列、南上東面、出從待賢門各分散、予猶參內、此間爲有御拜、御出於南殿巽角間、兼御裝束敷筵道右中將顯實朝臣持御劍前行、頭中將國信朝臣持御衣尻扈從、雲客五六輩陪從、

後聞、上卿今朝早參、被奏宣命草幷清書、有辭別、近曾天變頻示、世間不閑、風雨順時、農業可叶節之由者、

早旦予參入小安殿、掌侍伊勢女官二人、此中從子忌部一人、持尺內藏寮下部一人相具、令裹伊勢內外宮御幣、了後以內藏寮官人、令置一間、其後行事史官掌等相具於昭慶門北裹諸社幣、依雨儀也事了晚頭歸家、〇中略

事了後、上卿出嘉喜門間、上官等幷內記皆悉出立、予未習知此事、仍問大外記定俊眞人、可有此出立歟如何、定俊答云、尤可有也、辨可令立加給者、新任未練之間、偏取信出立、依不審其後相尋新中納言通俊、件出立全不可有之事也、上官等大失也、奇恠者、予被引上官、大失禮也、爲後度所記置也、

件出立之事、付新中納言說存失禮由之處、江中納言被申云、必可有之事也、昔猶又於待賢門有出立、但近代絕了、於嘉喜門出立者、上卿出入之時、兩度必可在者、後尋大外記定俊幷大夫史祐俊等之處、近代必乍兩度、於嘉喜門前有出立者、然者非失禮歟、但兩中納言之說太以相違歟、迷是非、

嘉保三年二月廿六日丁亥、今日祈年穀奉幣也、予依爲行事、早旦參八省、相具史俊忠、官掌光經、相催諸司、令裝束如常、〇中略午時侍從宰相能實、賀茂使皇太后宮權大夫公定、松尾使左大辨季仲、平野使參來、仍上卿被渡東廊座、大內記俊信取宣命筥相從、予幷外記信貞、史俊忠扈從、中臣官人輔弘、參小安殿賜幣物、了後召使王給宣命、次還著本座、諸社使々一々被立了、予與上官出立於嘉喜門前、上卿從待賢門被出了、予參內、奉幣事了由奏聞、只今被有御拜、從南殿還御之後也、

康和四年二月廿四日己酉、今日祈年穀奉幣也、上卿內大臣〇源雅實使參議三人顯通、基綱、能俊、宣命之中有辭別云云、禰宜宣綱失心柱事云云、行事右少辨俊信俄依服假不參入、仍晚頭召右中辨時範朝臣爲行事間、已及秉燭云云、

〔殿曆〕康和五年八月廿三日、戌刻許右少辨俊信來云、權大納言被申云、明日祈年穀奉幣也、而此午剋

許、於二八省之廊内一焉、死、爲之如何、余答云、可レ被レ尋二先例一、又被レ奏二事由一、余事也、即還出了、職事業房申云、如レ此時於二神祇官一被行例也、廿四日、巳刻許辨俊信來云、八省穢時於二神祇官一被行、寛治比云々、仍於二神祇官一可レ被レ行之由上卿被申、余答云、可レ依二先例一、

〔中右記〕天仁元年八月七日甲申、今日祈年穀奉幣也、○藤原忠實上卿移著東廊座、後伊勢使等參入給二御幣一、上卿歸著本座、諸社使々被レ立、石清水使經範朝臣、稻荷使宗季朝臣、略

大治四年二月十四日癸亥、祈年穀奉幣也、○中略予仰二外記一、召二伊勢使一、外記不レ起レ座傳召、使、令レ召二權少副大中臣基行以下、卜部忌部等一入、自二東福門一、列立小安殿南庭、取レ幣、殿下○藤原忠通御手水事畢、次第退出如レ恒、次召二使王一、來二膝突一給レ宣、命、次召二内記一、返二給筥一、起レ座如レ本、路向二辨小揖復一、西廊座、召二内記一、令二進諸社宣命一、則持來置二座前一、召二石清水、上野介源顯俊朝臣、有二所勞一候門外之由、外記申上、以二外記傳一給、次目宰相中將來、座前、給二賀茂宣命一、次官家時次目右兵衞督給二松尾、平野宣命一、依レ無二使宰相一、次官盛邦、二次召二稻荷使一、散位源季房朝臣、所勞之間、候二門外一、以二外記傳一給、春日、泰盛大原野、詮親實大神、親實石上、大和、二社、兼依レ不レ足レ使也、廣瀨、親康龍田、兼住吉、行遠有二所勞一、候二近邊一之由申、以二外記傳一給、日吉、朝俊梅宮、基政吉田、篤昌、殿下前驅也、依レ不レ足二只今俄給一也、廣田、行遠兼也、祇園、伊通北野、時登丹生、神祇官貴布禰、同召二内記一、返給、申時事了、時々小雨、不レ及二衣濕一、殿下令レ歸給、辨上官等列二居殿外北庭一、東上南面平伏、予暫立二嘉喜門内一、殿下令レ歸今日祈年穀奉幣也、予依レ爲二上卿一、早旦沐浴、辰刻參内、著二仗座一、○中略以召使召使王、行兼王來二膝突一、予給二宣命一、仰云、任二宣命趣一、可レ祈申一由、可レ仰二内外宮禰宜等一、予今案詞也内記撤レ筥、予起レ座、歸自二本路一、辨列立、予揖過之、歸著二北廊本座一、以召使、諸社宣命可レ持參由仰、内記入レ筥、置二座前一、召二石清水使一、四位侍從頭顯親朝臣、依レ院仰也外記申云、有二所勞一候、待賢門邊一、以二外記傳一給二宣命一、次賀茂使參議長實、次官家時、松尾使參議爲隆、次官盛邦、平野使參議伊通、次官清職、稻荷親仲朝臣、春日雅清、大原野宗康、大神行遠、石上、大和同前兼之也廣瀨伊俊、龍田、同前住吉清仲、日吉清國、梅宮基政、吉田篤昌、廣田清仲、祇園親康、北野清能、丹生祝師大中臣倫兼、貴布禰神祇少史卜部貞景、各使々立了、召二内記一、返給筥、歸退出之間、辨上官等列立、予揖

過了、秉燭以前歸家、

長承二年八月二日甲申、祈年穀奉幣也、予依レ爲二上卿一、已初參内、○中略伊勢使中臣神祇權大副親仲、忌部、某卜部、某入、自二東福門一、取レ幣退出、次召二使王一、賴行已來二膝突一、給レ宣、命、歸著北廊座、召二外記一、令下重二諸社宣命一上、入レ筥置二座前一、以召二使諸社使一、次第一々召之、給二宣命一、石清水實房朝臣、雖レ申二服不一レ被レ免レ之、目二左宰相中將一自レ元座來、座前、給二賀茂宣命一、次官篤昌、次召二右宰相中將成通一、給二松尾、平野宣命一、使宰相令一人勤也、仍兼二二社一、次官親康、稻荷、爲重朝臣、雖レ爲二院殿上人一、依レ有レ仰也、春日、泰盛大原野、知安、大神、伊俊石上、大和、兼廣瀨、兼龍田、兼住吉、仲房日吉、致時梅宮、氏人賴兼吉田、眞兼廣田、仲房祇園、實基北野、憲明丹生、貴布禰、已上神祇官六位官人給畢、

〔本朝世紀〕康治元年二月十七日辛巳、被レ立二祈年穀奉幣使一、右大將藤原實能卿參二仗座一、召二權少外記清原景兼一、被レ尋二使散狀一、召二少内記藤原守光一、守光入二宣命草於筥一、覽二上卿一、内覽清書之間、上卿召二外記景兼一、被レ仰レ可レ持參卜串之由、景兼持參之、依二上卿氣色一、開之、上卿仰曰、可レ令レ勤卜合稱唯退出、次外記進出申二使王御馬一、上卿付二藏人一、被レ奏二宣命畢、清書畢、内記覽二上卿一、上卿起座進二弓場一、付二藏人一奏之、次向二八省一、此間使等參、召二外記一、被仰云、使王御馬可レ給、上卿起座著二東廊座一、右少辨藤光賴、右少史中原宗遠著レ座、上卿召二伊勢使宗重王一、賜二宣命一、自餘如レ常、宗重王賜二左馬寮御馬一、也、今度依二寛治一、○堀河天仁、保安○鳥羽例、使之無レ懸レ手也、

〔台記〕仁平元年二月十九日庚申、是日祈年穀奉幣、上右大臣、○源雅定宣命清書不レ可二内覽之由一昨日示、右大臣先例輕服日數之内不レ見之故也、

〔兵範記〕仁平三年二月十四日癸酉、今日祈年穀奉幣、主上○近衞無二伊勢幣御拜一、依二中宮御懷妊有一レ也、

〔山槐記〕應保元年七月廿五日丙申、被發遣祈年穀奉幣云云、巳刻右大臣○藤原公能參陣、於二南殿一有二御拜一、頭辨候二御裾一云云、藏人方事、藏人少納言信範申沙汰云云、予不參依レ爲二御物忌一也、此殿無二宿所一、去夜頭辨可レ被レ宿之由、藏人定正示送、仍不參也、抑爲二御物忌之時一、於二石灰壇御拜先例一也、而出二南殿一、未レ知二其由

緒事也、

〔兵範記〕仁安四年二月廿四日辛亥、今日祈年穀奉幣、巳刻太皇太后宮大夫公保卿參著仗座、先覽宣命草、次令藏人治部少輔兼光奏聞、依御物忌先被奏之、○中略 八幡使權中納言兼雅　賀茂修理大夫成賴　松尾右大辨定綱　平野左京大夫定隆　稻荷前民部少輔盛方　右大辨長方朝臣奉行、先於小安殿裹幣、大神宮以下各有宣命辭別、神宮宣命其趣云々、禁中御湯殿外無他事、無御拜、

〔玉海〕嘉應二年二月十五日丙申、巳刻以後、雨脚間灑、臨晚風雨甚烈、此日祈年穀奉幣也、○中略 次忌部經中臣之前、自小安殿南壇上東行、入自南面東第一間、取外宮幣授卜部、件卜部相隨忌部、跪一間砌上受取之、次執內宮幣、相共經本路出自東福門、今度先忌部、次卜部、次中臣、御幣過前之間余平伏、經房以下深平伏、如主上御前平伏、是不然事也、次召召使喚使王之間、王則入自東福門、經砌參進著膝突、余置笏於右、以右手給宣命、以本文爲使方、王取副笏左廻、經本路出自東福門了、○中略 次余目左衞門督、件人在端座、石清水使也、督揖進寄余前、余置笏於奧、以右手授石清水宣命、實國卿置笏左、若可置右歟、取副宣命於笏、右廻復本座、揖起座出自嘉喜門了、次目家通卿、給賀茂宣命、退出如初、但置笏於右取宣命也、次目實家卿、件人在奧座也、而經座間進寄、失也、在奧座之人、可經端座之人後也、但是又近例云云、給松尾宣命、次目信隆卿、件人在端座、給平野宣命、公卿使等各立座之後召召使、召稻荷使、卽重雅朝臣進著軾、余給宣命、以右手給之、以下如此、次召使等同前、但兼兩社之使、取合宣命二通給之、雖隔他社尙如此、住吉廣田是也、丹生貴布禰兩社宣命、以外記傳給之、舊例或召使於軾給之、今度且返給筥、次余起座經本路、自待賢門退出、于時戌刻也、今日始終發前聲、幣立之後、退出之時、可發否尋申攝政、○藤原基房之後、不可止之由有敎訓者、抑台山衆徒騷動事、被謝申七社、伊勢、石清水、賀茂、春日、祇園、北野等也、尤可然、但長曆三年二月祈年穀奉幣之次、被申衆徒事於廿一社、尤可被准彼例也、今度被追長治天永等例云云、是非如此之次、臨時別被申之、其例頗不相叶歟、

〔顯廣王記〕治承二年八月十二日、祈年穀奉幣、伊勢王中臣定輔、忌部孝吉、卜部兼綱、丹生致賴、貴布禰社致友、上卿藤大納言實國卿、奉行右少辨光雅也、依不造大極殿、於神祇官有此例、是先例也、

〔玉海〕文治三年二月廿一日癸巳、此日祈年穀奉幣也、○中略 巳一點、余○藤原兼實及內府○兼實子良通共修祓、先是浴了、○中略 余先參內、直衣、前驅衣冠、隨身布衣也、相續內府、束帶、蒔繪劒、前驅八人、參陣、依陰陽師遲參、暫而勘奏日時、見了返給、行事辨親經所持來也、暫之覽宣命草奏、依余候御前、直進弓場殿、內覽奏聞所相兼也、是雖略儀有便宜之說也、幼主○後鳥羽之時、雖不可有奏聞之儀、於宣命者、猶別可奏之由、有確執之人々歟、見了返給、○中略 又申使王御馬之由、仰聞食之由、卽於弓場殿返給上卿、上卿直召內記返給、○中略 上卿昇自小板敷、經南殿御後、出自右衞門陣、參神祇官了、余暫可候、然而聊依有可見沙汰事退出了、今日依御物忌、於御殿可有御拜、上東對坤角間南面格子一間、垂御簾敷小筵、其上敷半帖一枚、巽面也、件間東邊立御屛風一帖、仰實敎宗隆等可行御拜之間事之由了、御總角御裝束等料、經家朝臣遣召了、

〔吉記〕壽永元年九月二日庚午、今日祈年穀奉幣也、○中略 入郁芳門參神祇官、入北門著西腋南口西座、賴實卿在東巽南座、賴輔卿在西乾北座、次上卿藤大納言參入、自南方著東腋座、西向 次通親卿參著、自東著東艮北座 次上卿召辨兼忠問幣物具否、召外記弘康問使參否、次內記持宣命參進、次上卿經壇上西行、當門間降壇下、辨外記史等移著東舍、伊勢幣發遣之後、上卿歸著北門座、於舍北辨以下出立、南上西面、次內記進諸社宣命、次上卿雖被目通親卿、其座敢不見、且聞咳聲、且隨傍輩氣色、起居如初、於東著沓參進上卿座前、當南面 脫左沓懸片尻、給八幡宣命退出、次賀茂使賴定卿依上卿目參進、於座南著沓 當上卿座南、一揖昇、懸片尻給宣命、降立一揖退去、次松尾使賴輔卿起座、○中略 如前、次隨上卿目、予一揖起座、乍背著沓、沓在南 又一揖、東行至于上卿座南間、脫左沓使懸其膝幷片尻、給宣命、退降著沓左廻、不揖、爲兩說歟、後日堀河納言雖脫片沓、猶可揖云々、前源納言云、必不可揖云々、出北門披宣命見之、天永於嘉喜門外披見之、天治復座披見之、二代所爲如此、又非無其謂歟、仍逐彼例所披覽也、社幷使付爲無違失也、次次官邦兼來、予給宣命、至郁芳門下取返宣命留了、近代之例也、强召具無其詮之故也、次參平野社舞殿、口儲手水具、棉手洗紙一枚、以供人令取寄之、洗手之後著舞殿座、兼敷

高禮半帖小筵等先再拜、次插笏讀宣命、其聲聞程次再拜、次召社司給宣命、天治闕中退出云々、尤不審事歟、次社司申祝、先是寶前當中門、立黑漆案、倚立幣、次申還祝拍手、次予退出、于時昏黑、秉燭之後歸家、○中略予供人二人兵衛尉貞俊、馬允康業、也、人々車、源羽林網代差繩、三品羽林網代、牛童遣之放埒歟、刑部卿幷予毛車也、

公卿仗座指圖事○中略

第一人自扉南合眼上卿、依目著沓進寄上卿座南、脫左沓懸片尻、給宣命退、不復座出門、於門外尋次官賜宣命、次官來車下申障者、取返宣命留次官、第二人、第一人進寄上卿前之時、直移著第一人座、是如先爲蒙上卿目也、次第如先、第三人又如第二人所爲、第四人乍本座當上卿眼路、仍不動座、此事爲故實、而上卿不存之、或以使召之、或每度開閤扉目使、或又使不存此儀惘然、

已上差圖幷作法、尋堀川納言之處、被注送之旨如此、此說爲指南之間、又不尋他人、此次第皆有其謂歟、今度人々所爲、若異說歟、但無其謂歟、於座者今度南北二行敷之、三品羽林云、或北上對座、或南上對座也、今日傍輩三人南北對座、三品一人西面也、上卿當後如何、又其旨有自稱、有居置之氣、當時座如愚案東上、雖不違一人、源羽林可著南而著北、最末參著人也、三品羽林可著北而著南、早參人也、是等相違歟、但有說々歟、不可守一隅歟、

〔吉續記〕文永四年八月五日、今日祈年穀奉幣也、○中略上卿向神祇官、次南殿御裝束如例、格子下之、額間幷東第一間不下之、御拜座立廻御屛風、及晚伊勢幣使發遣之由告申、親朝奏之、自御殿有出御、御束帶敷筵道、兩貫首不祇候、依重服輕服也五位職事三人皆參、親朝候御裾、御草鞋予○藤原經長可獻之由奉行人相觸、藏人淳範可傳進之由、親朝下知之、申子細、雖有出御、淳範不承之、此條不可然、慥可承進之由以親朝被仰下、此事都不可叶之由申、有逆鱗、雖有出御、依此事被扣之、太狼籍、猶申子細者、定有後悔歟之由雖被仰、猶不承引、被召淳範猶被仰下、拍子揚之間淳範承之傳予、事之次第太奇恠也、御笏光朝、極臈則任傳之於南殿光朝進之、淳範卽逐電、可召淳範上之由被仰親朝、　八年二月廿七日辛酉、祈年穀奉

幣也、○中略奉行職事逐電參神祇官、入北門衣笠中納言被著門西腋經廳東入西幔門、經南砌於第三間北一揖、昇揖著座、辨座南敷之北面、辨侍相從、內侍座副北壁立廻屛風、忌部座西第一間敷之、內侍已令參未下車、忌部依未參也、再三被催、遲參奇恠事也、頃之忌部參仕著座、次內侍自東門令參敷筵道、女官指几帳、次內藏寮官人內外宮御幣送文覽忌部、忌部先裹內宮御幣、加錦定八段也、錦藏人方沙汰也、女官奉裹、加送文織尺等次外宮色々絹六段裹了、寮官以葉薦裹之後、女官覽內侍、次寮官捧持奉置東第一間、此間予平伏、諸社幣以史令裹也次揖起座、上卿以召使被召、予於本路持笏於軾一揖、被問幣物具否、申具之由一揖退出、○中略次忌部二人捧持內外宮御幣出東門、此間上卿予等平伏、次召使王給宣命、上卿伊勢幣發遣之由、可申內裏之由被命、予下知之、

〔伏見院御記〕正應二年二月十二日壬戌、依明日祈年穀奉幣、自今日神事也、　十三日癸亥、今日祈年穀奉幣也、上卿右近大將藤原朝臣○實兼參著陣、爲兼朝臣書定文、頭中將冬季朝臣奏聞三使、中宮權大夫、通重、八幡、左兵衛督、雅有、春日、基光公世等卿也、頃之奏宣命草、見了返給、卽又奏淸書、著直衣見之、廿二社入一箱、大神宮頭橫入之、覽了返給、上卿給之向神祇官、秉燭之後、冬季朝臣告伊勢幣發遣之由、卽著束帶奉拜大神宮、淸涼殿東端間裝御裝束、立廻大宋御屛風、其中敷席、其上敷半疊、向乾於屛風外、冬季朝臣獻笏、乍筥可獻之、而笏許取之失也、兩段再拜了還入、於屛風外返給笏、令座同以筥可受之、而取笏授藏人、藏人持笏之、不可然也、

〔薩戒記〕應永三十二年二月十三日甲寅、右衛門督敎豐以狀被問祈年穀奉幣使間事、　五月一日庚午、傳聞今日被發遣祈年穀奉幣、○中略公卿使於神祇官賜宣命之時、依社次第召之云々、又件使座北上東面一列也、近年如此云々、如何、但又或儲四ヶ座事有之云々、若依上卿命歟、　三十三年三月十日甲辰、左頭中將隆夏朝臣來臨、明日祈年穀奉幣事、藏人方事、藏人右少辨經直奉行也、而於兼日雖奉行之、當日參事依所勞不可叶云々、仍我可申沙汰也、仰詞事被尋問、大概示之、先公仰云、可被發遣祈年穀奉幣日時使令定申、日時奏聞了返下、仰云依勘申禮、但此事或以辨奏之歟、可在上命、宣命奏聞了返給、仰云、御

覽シッ、使王御馬事聞食ッ、已上此外無殊事歟、抑御拜之時、南殿御格子、近年東一間許上之、不可然、額間同可上之、自件間職事持參御笏、自御後可獻之也者、

永享五年二月廿八日壬子、今日被發遣祈年穀奉幣也、予○定親藤原勸春日使也、仍巳刻著束帶如例帋笏蒔參內、○略中納言直被向神祇官、予相從之、○中略上卿被入官北門間、少外記內記列立西方、右少辨重政立東方、納言不及揖、剩不下、裾被過、予欲向辨相揖之處、辨乍持裾於左手立、甚不足言、仍予又不能揖、只下裾過了、若各不存出立之由、只假所列立歟、雖然、上卿已下猶可揖歟、迷惑體也、上卿被著北門內東腋座、此後勘修寺中納言、經成、兼在門內、予在門外四條宰相、隆夏前右兵衞督繼等、著北門內西座、此座須數四ヶ座於門西腋壇上也、今日不然、北廳北庭北上東面一列數之、予先以隨身問勸修寺中納言云、予使座可爲此定歟、此答頗不審、去々年納言予共參入、納言殊張行、今數四ヶ座、今日又被答之旨如此、此座如何、兩納言尋事具否、仍持伊勢宣命於少內記、就北廳行事、伊勢幣發遣了、歸著本座、召諸社宣命、次以召使被示合勘修寺中納言云、使次第可召歟、社次第可召歟、納言示合予、予云、於公卿者、使次第可然歟、納言被答此旨、次上卿次第召之、賜宣命、今日上卿座有墻下、其前敷軾、使々著仗軾賜宣命、頗違例也、仍予進上卿前、不揖乍著沓突膝置笏、賜宣命、取副笏出門、於門外招次官仰云、雖可授宣命、長途之儀、先例於宣命者使持之、於社頭授次官之例也、仍予隨身可下向之由示之、使承諾、次予歸蓬華欲乘車之間、右少辨重政在後方、予立歸揖乘車了、○中略今日主上有御拜、如此御拜今日初度也、予見南殿御裝束、東第二間御格子上之、自餘下之、此事如何、常儀第一間、幷額間許可上之歟、廿九日癸丑、天曙程出門、申始剋著南都、秉燭之程著束帶劔乘輿參社頭、入藤門慶賀門等次官越中前司友長未參、然而於宣命者、予自京隨身、仍取副宣命於笏、欲著舞殿座、先是御幣之由社家申之之處、使座設樓門下云々、此事先例歟之由尋之、社司申云、近年皆如此者、太違例、雖可令改敷于舞殿事々及夜景、且近例皆如此云々、仍著移門下座、先是撤劔、是祭之時、上卿已下於舞殿者帶劔不可有煩事也、依樓門下頗思煩者也、猶可勸先例、其間暫不可爲例、再拜了讀宣命、次再拜、其儀皆如去々年神主申祝、歸出拍手、予如形拱手、則可起座也、然而予有私

奉幣、仍猶在此座祝師時元持來幣、兩段再拜、了參若宮奉幣、了歸宿所、

〔公名公記〕永享八年二月十二日、今日祈年穀奉幣發遣日也、○中略直出禁門於陣頭乘車、四條宰相已下外記史相從也參向神祇官、爲發遣伊勢已下幣也於郁芳門舊跡大炊御門大宮下車、先招召使密相尋事具否、是非作法、內々爲知之、春日使幷內侍來參者、于細也、故實也、召使云、事具了後可申案內之由仰、暫不及下車、入北門、門小時召使來申云、近年皆如此者、太違例、雖可令改敷于舞殿事々及夜景、且近例皆如此云々、仍著移門下座、先是撤劔、是祭之時、上卿已下於舞殿者帶劔不可有煩事也、依樓門下頗思煩者也、猶可勸先例、其間暫不可爲例、再拜了讀宣命、次再拜、其儀皆如去々年神主申祝、歸出拍手、予如形拱手、則可起座也、然而予有私

〔公名公記〕永享八年二月十二日、今日祈年穀奉幣發遣日也、○中略直出禁門於陣頭乘車、四條宰相已下外記史相從也參向神祇官、爲發遣伊勢已下幣也於郁芳門舊跡大炊御門大宮下車、先招召使密相尋事具否、是非作法、內々爲知之、春日使幷內侍來參者、于細也、故實也、召使云、事具了後可申案內之由仰、暫不及下車、入北門、門小時召使來申云、事具之由間則下車也、入北門、門外辨已下有出立者、乘裾揖可過之、而辨令裹御幣、外乘笏入門也、所到東腋座南、古來柱內構板敷、中略其上敷座之路、今日經座東北、自南著之、縱雖敷座於砌下、猶散々、只如泥土、不可說、不可爲後例事也、爲愚味之實行、公事頗招耻之基歟、而欲補公事之闕而已、呈圖以雖是非於左行、後日此此矣、北面揖脫沓、突膝居寄笏、向北又揖居、向西刷裾、以上作法、惟陣座、可知歟、仍召使直參兼敷軾也、宣陽殿平座之時、又如此例次公卿使勸修寺中納言經成、卿葉室中納言宗豐、卿右衞門督隆盛、卿頃參也四條宰相隆夏、卿著門南庭西方、南上東面、上卿著座已前、早參使等、緣可著門西腋、柱內座也、有板敷者、其上敷座、可爲東上南北對座也然而予欲入門之間、勸修寺中納言已下存之間、暫猶豫云々、予云、東西對座儀、雖異說存、猶可叶歟、然之時不在背上卿之人無便于目許歟、以常儀南北對座可宜乎、養和二、五、廿四、臨時廿二社奉幣時、坊城入道內大臣殿御記云、門西腋對座東上云々、是南北對座意也者、皆以諸之、又勸修寺中納言問云、賜宣命之儀、社次第歟、官次歟、予答云、可爲社次第也、家記說無所見、而當家公事被執慥說、仍可然者、先可進人等、可無便宜歟者、予云、誠不便歟、但門腋座今體以外狹少難堪歟、今年門南庭一列敷座之儀出來歟、如何、右衞門督去々年則如然者、予云、末代之法、依某所便宜、有背古記事、不可勝計乎、殊近年有一列之例者、不能左右歟、但非禮以外事歟者、人々入興、大略一同則敷改座了、後聞門腋座聊雖狹少、柱內對座近代無相違云々、所詮依人々所爲、古儀與新儀相交也、然者今日猶敷門下柱內庭中一列之非禮、可守門下兩座本儀者也、

公卿使著座之後、予召召使(二音)仰辨可召由、(其詞、右中辨コナタニ、)幸房來軾、予問幣物具否、(其詞、幣物ハ具タリヤ、)辨申具之由、予目許辨退、次召召使仰外記可召之由、(其詞、外記召セ、)權少外記清原忠種直參著軾、(違陣儀、)予問使々參否、(其詞云、使ハ候ヤ、)外記申候之由、此次使王申御馬事、聞召之由予可仰外記也、然而忘却不仰之、已奏宣命草時、同奏此事之間、還陣可仰外記之處忘失、於本官可仰之處又失念、遂不仰勅許也、子細甚不可說之事也、旁有若亡散々也、次召召使仰宣命事、(其詞云、內記ニ伊勢ノ宣命持テ參レ、)少內記安倍盛時宣命(入筥)入北門立北廳北簷、(宣命筥不置上卿前、持參直立此所定例也、)次予居向北揖、又居向南著沓、起右廻更北面揖、左廻南行著東舍代座、(近代不構幄代、空庭ニ敷座、散々事也、其儀見圖、)次右中辨幸房著座、(予座列當西著、予問云、外記史同列可爲南上東面上者、幸房云、近代如此云々、猶不知由緒事也、)次外記著座、此間內記置宣命筥於予前之後、使著座、(外記南方也、依兼史所意也、但往昔內記モ著此座歟、)次予仰辨令催幣、辨仰史、史不知案內不及仰史掌、不足言事也、此間內侍參入輦車於北廳北面、(其間公卿使著座前、頗無骨之體也、)頃而伊世幣發遣、(大中臣卜部齋部等、捧幣物警蹕、)予以下平伏、出東門之後起揚、次召召使欲召使王之處、不待使王召則來軾、尤奇恠也、予置笏取宣命賜使王、次目內記令取筥、次外記辨等起座、辨出立北廳東簷下、(外記史等不見如何、)予揖起座、著沓經本路、(向辨相揖過、)直歸著北門座、次召召使仰諸社幣事、(其詞云、內記諸社宣命持テ參レ、)內記盛時持參宣命(入筥)置予前、次予正笏目賀茂使、(常儀先召石清水使也、予兼帶之間如此、)葉室中納言、(○中略)起座來予前、(無板敷之間、不及懸膝儀著軾也、)予撰出宣命(賀茂紅紙也、仍不可混餘社之間不書銘也、又舊儀皆封宣命等、時解賜之也、然而近來無封之儀也、)賜之、納言置笏取之、取副笏直出北門給次官歟、次予目松尾使、右衞門督(隆盛卿)起座來軾、(如元)予給宣命、(見銘賜之也、)次目平野使、四條宰相(隆夏卿)來軾、予給宣命、次召召使欲召稻荷使之處、使遮而參入之間則給宣命、(○中略)次召使(行嗣)於北門下、大原野已下社次第召使々、(地下五位等也、)不待予命所召也、(普通之儀、每度受上卿命可召其使々也、今日召使行嗣行爲頗雅意也、)使々任社次參進給宣命、(一使兼兩三社之時、撰取其社之宣命、一度賜之例也云々、使友長遲參之間、召外記給件宣命、仰可傳賜由也、又丹生貴布禰宣命同給外記、是定例也、古儀猶直召兩社使賜之歟、)次召內記令撤宣命筥、先之取副石清水宣命於笏、內記退出之後、居向北方揖、更居廻南、著沓經本路、出北門、召次官美作守親尙、(予前驅也、去八日任受領、)給宣命、先之辨外記史列立門外、(西腋南上東面、)予左廻向辨揖、辨以下答揖、予右廻東行、出郁芳門乘車、大宮南行、於二條邊扣駕、立入或在所、解脫裝束、乘輿密向南山、(普通之儀、束帶乘車、直可參向也、而縡不旁易、偏存省略、近來之風也、但不可爲後例、)酉刻登猪鼻、步行入宿坊、(號阿彌陀院、淨華院末寺也、件長老借與之、社頭近々究竟所也、)暫休息相催社家之處、奉幣事、每度自兼日蒙催致用意之處、奉幣無承旨、仍臨期不可叶者、又遣人云、自官方必相觸事也、而爲使更雖不可知、事遲怠不可然、早可催具之由堅仰也、及夜社務送使者云、祝師等在遠所、定及曉天歟、今暫不可參仕、事具程可啓案內者、不慮成一宿之構、臨期迷惑了、其後度々雖加催促、猶不具歟、　十三日、自早旦連々相催社家、然而猶無音、不可說事也、未刻許適申具之由、仍著裝束、(帶劒、前驅一人如昨日、)參社頭、於樓門外解大刀入門、(先可洗手也、然而手水不及用意云々、雖可責出、彌遲々基歟、無不淨疑間、偏仰冥鑒了、猶不可然事也、)到舞殿座後、(舞殿中央座敷也、)乍立揖脫沓、懸膝著座揖、直足縿寄裾、次再拜、次插笏於腰、(此間持宣命於左手、如笏持也、)次披宣命讀申、(不及出聲、)次如元卷之、拔笏又再拜安座、(或先兩段再拜、讀宣命後又兩段再拜、但兩說之間今日如此、)目祝師、祝師來予前、予置笏給宣命、祝師給之置幣於案上、冠黃衣之神人、敷席於予前、祝師於其席上向正殿再拜、次向右腋殿再拜、又向左殿再拜、次著座、申祝之後拍手、予置笏同拍手、次祝師又如先再拜三箇度了退、(祝師之作法定存例歟、)次予揖著沓揖、右廻出樓門、(於門外可帶劒歟、而略之、)經本路入宿坊、改裝束下山、(以便宜聊巡禮、今度用懸路、反步行、)於山下乘輿歸京、于時申刻歟、窮屈失何方云々、

〔康富記〕文安元年七月廿二日己亥、是日祈年穀奉幣也、(○中略)御拜之儀如常、但南殿御殿通用之間、御劒次將不入之云々、奉行兼日先雖被催促、庭田中將重賢朝臣、前日稱不可入之由、不被催之云々、此皇居(一條東洞院伏見殿)南殿御殿通用故也、本官之儀可尋注之、式事於四度幣被下者置之、祈年穀奉幣之時不置式者也、今日一臈申此分、又於內裏置硯之時、參議之右方ヨリ可置之由存之處、自左方可置之由、上卿參議被示之間、今日自相公左方置御硯云々勿論事也、參議之上方ヨリ置之也、土御門殿皇居之時、參議之座東上北面也、仍東方ヨリ置之、今此皇居(伏見殿)陣座參議之座東面北上也、然間自北方可置事也、參議起進上卿前之時、硯ヲ押遣ニ就テ有進退作法之者也、局務外史退出之時、於茅屋

被改朝衣被語云、今日奉幣使次官事、自久我前內府可召進秀直之由、兼日被申之間、定文ニモ此分也、內記ニモ宣命清書ニ、此分書入之處、今朝俄秀直故障之間、仲重朝臣可召進之由雖被申、已宣命已下可爲事煩之間、只不改定文等、雖然於宣命者、名字之處、以押紙書付仲重者也、事爲聊示之由被物語者也、

寶德元年八月廿三日辛未、是日被發遣祈年穀奉幣使者也、○中略神祇官儀、上卿右中辨康顯盛時、召使久繼秀國內侍等參之、大內記在治朝臣同參之、先於北門持參伊勢宣命、相從上卿後參進東屋代座、事畢上卿歸著北門、大內記持參諸社宣命畢、每年如例歟、此餘事不遑于尋記、

〔朝野群載十二內記〕祈年穀

天皇我詔旨止掛畏支某大神乃廣前仁恐美恐毛申賜ヘ止申久、農者民之天奈利、民者國之寶奈利、而今年乃春始女雨澤隨旬天年穀豐稔奈留ヘ支由乎聞食シ悅給不事在利、是則大神乃厚御惠美廣御助奈利止、所念行天奈牟、故是以吉日良辰遠擇定天、某官位姓名乎差使天、禮代乃御幣遠令捧持天奉出給布、掛畏支大神此狀遠平久安久聞食天、東作乃春天與利西成乃秋日木天仁、旱蝗風水乃患不聞須、農圃蠶養乃業如意爾之天、天皇朝廷乎寶位無動久常磐堅磐爾夜守日守仁護幸給ヘ止恐美恐毛申給波久止申、

饒仁護幸給ヘ止恐美恐毛申給波久止申、

寬仁三年二月廿日

〔柱史抄上二月〕祈年穀奉幣

宣命非二例狀新作也

天皇我詔旨止掛畏岐其大神乃廣前爾恐美恐美恐毛申賜者止申久、云々、天皇朝廷乎寶位無動常磐堅磐爾夜守日守爾護幸倍奉賜比天、云々、恐美恐毛申賜波久止申、

廿二社有辭別之時、隨上卿命書載之、但丹生貴布禰等社、祈雨止雨之外、不載他事云々、

宣命載卜部有勅難事

寬弘七年九月十一日御記曰、辰刻沐浴、午剋治部卿藤原朝臣、令藏人季任奉幣宣命草覽了令給、仰云、前例不載卜部名、而今日書之、令問其由令申云々、召問內記菅原資高、令申偏任神祇官差文、不尋先例書載之由、仰令改書、暫改書令奏覽了令入省院發遣使、則刻限出南殿拜伊勢大神宮、

宣命文勅難事

延久三年三月十四日、大內記成季進宣命草、頭中將實季朝臣仰云、宣命文作雨澤順旬之句、如何、先例順時也、入祈年穀狀也、而載蠶養之事、如何者、余返給宣命、書改件文等奏覽之、次奏云、件兩條事、祈年狀先例多作載、又有不載之例、仍書改所奏覽也、重仰云、順旬之句、御前所候之舊宣命、屢令作載、又蠶養事等、只如本清書之時可書載者、

〔左經記〕長元元年二月廿一日、參關白殿○藤原賴通次藤中納言朝經被參令申云、明日祈年穀幣使可令定奏之由、今朝有仰、○中略又被申云、宣命趣如何、仰云、年穀豐祭、幷今年可愼御坐之由、頻有恠異、可無事故之由等可令作者、奉仰被退出了、

〔後二條關白記〕寬治六年二月十六日己巳、晚頭頭辨來云、祈年穀奉幣被仰、承給之由承了、十七日庚午、黃昏參於內、著右仗、余行之事如常、被仰宣命趣、辭別等仰事、三合年天下公家可愼之由所被仰也、廿三日丙子、申刻許參右仗、○中略卽內記參、仰可令獻宣命之草之由、起座奉之、付御在所奏聞返給、其後內覽披見之間、傍字者可載宣命歟如何、大內記申云、舊宣命合申被載之由、又問左大辨爲之如何、而无先例之由大內記所申也、左大辨申云、最可候由所申也、其後令申殿下其由、良久歸來、已及黃昏、傍字不可載宣命、次申云、種々發炎孽五字者如何、令申先例候之由、然而五字不可留之由所被仰也者、明日宣命經內覽、而早可被行之由所仰下也、卽仰清書由內記出了、廿四日丁丑、參右仗、○中

略召大内記卽參、仰云、昨日二字可被直入云々、直了奉之、仰可令獻宣命淸書之由、承仰天退奉上、一々開見了、昨日不經内覽早可被奏、仍令持内記、〇中略

裏書　宣命

天皇我詔旨度掛畏支大神能廣前仁恐美恐美毛申給波久止申久、食者民之天奈利、農者政之本奈利、方春戒節天人以天耕種須、而風雨順時天稼穡有年牟事波、大神乃厚支御助計廣支御意可在奈利止所念行天奈牟、故是以吉日良辰乎擇定天官位姓名乎差使天、禮代乃御幣令捧持天奉出給布、掛畏支大神此狀乎平久聞食天、東作乃春與利西収乃秋麻天仁、風水旱蝗乃難不聞須、農業蠶養乃勤叶期天、天皇朝廷乎寶位无動久常磐堅磐仁夜守日守護幸給比天、天下泰平仁海内淸寧仁護恤給へ止恐美恐美毛申給波久止申、

辭別天申給波久、今年波公家可有御愼加上仁、曆運乃所推呂已當三合天、種々乃厄難可發幾由乎有司上奏世利、其乃咎徵不輕須止聞食天、畏懼大坐之天、殊凝叡誠給天令致祈請布、大神此旨乎聞食天件等乃不祥厄會乎未兆之前仁早仁拂退給天、玉體安穩仁黔首歡樂仁護幸給へ止恐美恐美毛申給波久止申、

寛治六年二月廿四日　作者大内記有長

〔中右記〕嘉保三年二月廿六日丁亥、今日祈年穀奉幣也、〇中略宣命有辭別、今年御愼之上、天變地震頻至、其恠可无事妨由云々、

〔永昌記〕大治元年二月廿七日癸亥、今日有祈年穀奉幣、上卿藤大納言、詔書草、實光朝臣奉之、辭別大神宮正殿高欄上白玉黑玉各々一顆破損、被改作奉之由也、

〔中右記〕大治二年二月廿三日、今日祈年穀奉幣也、二箇度延引也、〇中略宣命辭別、心柱榊被破損事、神祇官燒亡事、大神宮穢出來之由、奉幣度々延引由、皆被載辭別云々、　四年七月六日壬午、祈年穀奉幣也、上卿内大臣、〇源有仁行事右中辨師俊朝臣、外記範兼、史孝忠、大神宮宣命有辭別、度度穢氣驚思食由云々、八幡宣命辭別、璽御筥被奉送由云云、諸社辭別、近日炎旱之事云云、璽御筥行事、史淸原季俊於八省東廊、渡奉幣行事史、未時使立、宰相□□師時伊通三人使、八幡實房朝臣、稻荷時俊朝臣、出御南殿有御拜云云、　五年二月十八日辛卯、今日祈年穀奉幣也、予依爲上卿、早旦沐浴祓、辰刻參内著仗座、〇中略頭中將忠宗來仰云、天變頻示、恠異屢呈、司天所奏、公家御愼不輕、可无事咎由、諸社宣命、件旨可載辭別者、是去夜進天文奏之間有件旨、只今俄所被仰下也、

長承二年二月十八日、藏人兵部大輔資信入來云、大神宮恠異解下給、早勘例可行軒廊御卜也、來廿一日祈年穀奉幣也、其前被行御卜、可被載宣命辭別之故、所被忩行也、則可勘例由下大外記許了、廿日丙午、今朝爲行軒廊御卜參内、〇中略召外記筥入本解卜形等、付本奉行藏人兵部大輔資信奏聞、〇中略明日祈年穀奉幣、辭別ニ可被載由依被仰下、所忩行也、　廿一日丁未、祈年穀奉幣、〇中略昨日軒廊御卜趣、被載伊勢宣命辭別云々、

〔兵範記〕仁安三年七月十七日丙子、被仰下令勘申祈年穀奉幣日時由、〇中略

伊勢別宮月讀宮有七日穢式日御祭延引事　賀茂別雷銀花開事

平野社松樹折事

已上以軒廊御卜趣被載宣命

〔玉海〕嘉應二年二月十四日乙未、兼宣命可有辭別之由有其聞、而未被仰下、〇中略未刻許賴定朝臣送書狀、是宣命辭別事也、〇中略大略衆徒事被申七社、又豐受宮、松尾、日吉等恠異事也、　十五日丙申、此日祈年穀奉幣也、〇中略大内記光範參軾、余仰云、宣命草持參禮、光範退持參之、余披見了、一通諸社宣命、一通大神宮以下七社辭別、一通松尾辭別、幷三通也、返給令讀之、一々讀了、仰可内覽之由、光範持參殿下、于時御坐三條堀川少將通能朝臣家也有數刻歸來申云、殿下仰云、台嶽衆徒事、被載七社辭別、而蜂起未止之句可被書直、是則大衆已和平之故

也、件大衆事、日來彌聞騷動由、而今依此命、始所聞和平之由也、余仰云、早可改者、○中略其間家通卿語云、件大衆兩方相分、或和平或騷動、而座主付印鎰於寺家、忽欲離山之間、去十二日一向令和平了云云、山上無事、天下之悅也、○中略抑台山衆徒騷動事、被謝申七社、伊勢、石清水、賀茂、春日、祇園、北野等也、尤可然、但長曆三年二月祈年穀奉幣之次、被申衆徒事、於廿一社尤可被准彼例也、今度被追長治天永等例云々、是非如此之次、臨時別申之、其例頗不相叶歟、

〔吉記〕承安四年二月十三日庚午、今日祈年穀奉幣也、○中略伊勢宣命有辭別、外宮狂男事也、少外記成棟草之、

〔玉海〕承安五年二月七日己未、此日祈年穀奉幣定也、九日辛酉、宣命辭別事、終日無音、仍尋遣光雅之許曰、宣命辭別有無如何、若明日可被仰者、聊有相憚事、明日當遠忌、故人曰、忌日不從神事、不從佛事云々、然者明日宣下辭別事者、即可謂從神事、依可有其憚示此由也、然者明後日參內之次可宣下、但事尤可懈怠、仍且直可仰遣大內記之許也者、返報云、諸社恠異等多以可被載、而他人奉行占形等尋集之間自然懈怠、任被仰下之旨、內々可仰遣業家之許、於宣下條者、可期明後日者、十一日癸亥、此日祈年穀奉幣也、上卿予、辨經房、職事光雅、○中略光雅就軾、仰曰、大神宮寶殿鷺居事、荒祭宮坤角口木顚倒事、豐受宮朝夕御膳荷前、蛇虫喰損事等可載大神宮辭別、又賀茂別雷社御釜鳴事、可載賀茂辭別、又疱瘡事、可載諸社宣命者、

安元二年九月廿三日乙丑、此日祈年穀奉幣也、○中略宣命有辭別、天變恠異月蝕等事云々、

〔山槐記〕治承四年九月十二日辛酉、今日祈年穀奉幣定、○中略後聞奉幣宣命被載賴朝反逆、十月十七日丙申、今日改勘祈年穀奉幣日時、○中略此奉幣四箇度延引、十月例希代事也、○中略伊勢高宮御裝束鼠喰損、調改被獻之、來廿八日奉幣次被副獻也、予問曰、可被載辭別哉、答云、於恠異條、先日延引之時被載了、調進之由者不可被載、只書目六可被副進之由、隆職宿禰所申也者、○中略次召內記、少內記成行來、仰宣命事、即持來草、不書入辭別、只改秋時狀也、內記申云、大內記依所勞候宿所密々申云、先日延引度、宣命清書了、少內記成棟持參舊都、○京都了、此宣命辭別不改直、只改時節所許了、然者可摺改其所許之由、內々可仰遣成棟許、今日清書內覽定令申請歟、如清書可存此儀也、事雖不當、末代遠都、○福原都公事只可隨便宜事也、廿七日丙午、今日被發祈年穀奉幣、自舊都神祇官被發遣、

〔吉記〕壽永元年九月二日庚午、今日祈年穀奉幣也、○中略上卿被示予云、日前宮恠異事、可載諸社宣命之由職事有下知、可何樣事哉、予答申云、諸社恠異、差其社被載辭別者常例也、滿遍被申之條、若勘先例、殊有議定被仰下歟、至于日前宮、非廿二社之內、尤不審事歟、上卿召大外記賴業被尋問、又召頭辨親宗朝臣被問之、可被止之由申云々、頗無四度計沙汰歟、○中略宣命辭別被載東國北陸反逆事、

〔三長記〕建永元年八月一日庚戌、以時兼申新大納言御方、兼基卿云、祈年穀奉幣宣命辭別事、先例上卿被仰下內記歟、而近例職事直內々仰職事、不可然歟、但可依近例者、可隨仰可被載事注出持參候、被仰云、可下知、仍注折紙進了、注進書樣此體也、

大神宮

去四月十四日、別宮荒祭宮帛御被壹帖濕損上、爲鼠喰損事、

神祇官卜云、依神事違例不淨所致之上、可有公家御愼、及天下口舌病事、

陰陽寮占云、依神事不淨所致之上、公家非愼御藥事、從艮巽奏口舌兵革事歟、

去六月月次祭幣馬於路次斃事、今度可被進件替馬、

平野社

去五月廿三日未時、口徑三寸、長一丈五尺口木枝折落事、

官卜云、依神事違例不淨所致之上、可有公家御愼、及恠所口舌驚恐病事歟、

寮占云、依神事不淨所致之上、有天下疫疾之憂、從震艮方奏口舌鬪諍事歟、

北野宮

去五月晦日、神殿巽方槻片俣裂落、打破東廻廊事、
官卜云、依神事違例不淨所致之上、惟所有口舌事歟、
察占云、依神事違例、穢氣不淨所致之上、公家非愼御藥事、禁裏可被誡火事歟、又從惟所并震巽方
奏口舌事歟、
宣命辭別事、定日可宣下也、然而兼日宣下又可無難、或當日定之時、卽當日宣下歟、重令奏之、
〔明月記〕元仁二年三月四日、巳時許參九條殿、〔藤原實〕大藏卿參會、〔略〕中相共入見參之次雜談、去月祈
年穀奉幣、左府〔藤原公繼〕當日定、大內記覽宣命草、大臣問云、辭別何書奧哉、申云、廿二社一同被申時、奧
書流例也、一兩社有辭別時、別草進也、聞之甚有不審之氣、重云、伊勢猶於草
者無各別之儀、淸書之時、諸社所書分也、伊勢一社奉幣時、猶其社卜書、又草奉書伊勢由、兩說候之由
被陳之、聞之甚分明之由更有感氣、每年蒙々、中納言中將可行給此事由兼有沙汰、改之被行祈年祭
了、
〔平戶記〕寬元三年七月廿三日乙卯、今日被發遣祈年穀奉幣使、〔略〕中後聞右府〔藤原平〕御參行、天變事、
被載宣命辭別、日月蝕事、同可被載哉之由有沙汰之處、日蝕不現、月蝕又不現、或又難申現由、事在兩
端、不可被載之由有殿下仰云々、此事如何、月蝕正現之條勿論、而御祈僧正有申旨歟、被御引級之故
歟、人々成奇云々、
〔康富記〕文安元年七月廿二日己亥、是日祈年穀奉幣也、〔略〕中今年甲子、去年三分彗星出現等事、被載
宣命辭別者也、職事已下上卿折紙寫之見左、
今年大歲在甲子、迎一元、去年大陰與害氣已三合、彗星示災、司天示變、恐懼非一、謹愼多端、仰明神
之加護、致蒼生之安全、水旱疫疾永蠲、賊惡兵革悉銷、退可來之屯難於未兆、攘可臻之災殃於未然、
帝業萬機之務无闕、聖祚千歲之基有餘、可書載宣命辭別矣、

奉幣使及奉行官人

〔玉海〕安元二年九月廿三日乙丑、此日祈年穀奉幣也、〔略〕中宣命有辭別、天變恠異、月蝕等事云々、
〔吉記〕文治二年閏七月十四日己未、是日祈年穀奉幣也、異虫小蝶降事、被載廿二社之辭別、先日被行御
占之由、辰巳未申方角神祟之由占申之、然而御占之趣殊重、仍不限彼方角、凡所被辭別申也、北野社
有靈木顚倒事、仍辭別被副載也、
〔新儀式四臨時〕祈年穀事
若有可祈年穀、上卿奉仰、先以陰陽寮勘吉日、文并十六社或社員增減不定也使差文、伊勢使依卜不載之、賀茂
又丹生、貴布禰二社使、神祇官差之、上卿不差奏云々、
〔江家次第五二月〕祈年穀奉幣〇中略
上卿仰參議令書、〇略中參議書畢奉上卿、
伊勢依可卜定不書入
賀茂上下參議一人、次官五位一人、
平野以上同賀茂
春日藤原五位
大神
大和
龍田
日吉近代被加五位
吉田藤氏五位
祇園以上五位
丹生
石清水源氏四位
松尾
稻荷四位
大原野同五位
石上
廣瀨
住吉以上五位
梅宮橘氏五位
廣田
北野菅氏五位、不論大業非成業、
貴布禰以上令神祇官進差文、

〔朝野群載十二内記〕廿二社奉幣次第○略中

奉幣使　伊勢王中臣忌部各一人　石清水源氏四位　賀茂公卿一人、五位一人、　松尾公卿一人、五位一人、　平野上同　稲荷四位一人

丹生、貴布禰神祇官五位各一人　自餘諸社五位各一人

〔神祇官年中行事二月〕祈年穀奉幣中下句廿二社幣

内藏寮之沙汰、伊勢使王、外記沙汰中臣一人、忌部一人、卜部一人也、差文長官加署、同付外記、丹生、貴布禰兩社使、同本官差文也、廿八日發進中臣知經、忌部孝差文、卜部□名、已上本官差文、

〔建武年中行事〕祈年穀奉幣、この月よき日して奉らる、廿二社なり、上卿陣のざにて使をさだむ、○中略八幡使は中納言、賀茂、平野、松のを、春日は宰相、その外は四位五位の使、ならびに公卿使には次官あり、外記これをもよほす、

〔夕拜備急至要抄上正月〕一祈年穀奉幣

上卿一有故障之時、大納言奉行、　使公卿已下、隨外記催之、　伊勢四姓使、外記催之、　八幡中納言

賀茂參議　松尾參議三位　平野同　春日同　稻荷四位諸大夫、外記催之、無、　自餘社外記催之、諸大夫勤之、

官外記○略中　御劔將頭中將、有便者他將、　御笏役人頭藏人　御草鞋同前　脂燭殿上

〔年中行事抄二月〕祈年穀奉幣事○略中

齊光卿獻天德書云、奉幣諸社時、忽上卿有障、若不可延日之時例、亦寬平年中、以非參議右大辨藤原有德朝臣、後爲中納言爲上代被行、是稀有例也、

〔小右記〕天元五年五月三日甲午、參內、今日爲祈年穀奉幣諸社使、○中略松尾、平野等使、參議申障不參、仍差遣侍臣、松尾懷遠、平野下官、○中略下官參平野、戌時許歸參、令復奏之宿侍、

永觀三年二月十七日壬辰、早朝參內、被立祈年穀御幣使、○略中賀茂、松尾、平野、等使、參議申障不參、仍以權中納言保光爲賀茂使、以三位道隆爲平野使、以三位義懷爲松尾使、

寬弘二年五月十九日丙寅、定申祈年穀御幣使、　廿六日癸酉、○略中申二點幸八省、右大臣進東福門、給伊勢宣命、少選御輿歸御本宮、右大臣於仗座給石清水等宣命、石清水使權左中辨道方、依使闕怠、奏事由所差遣也、賀茂使參議輔正、年已八十有餘、不可被差遣之使、左相同陳此旨、松尾參議行成、平野參議正光、自餘不記、了酉刻許退出、

〔法成寺攝政記〕寬弘四年二月九日丙子、參內○略中參內奏宣命草、次奏清書、使上達部左兵衞督、宰相中將等、相共未三刻著八省院立使等、宰相中將松尾、平野相兼大和三人也、各相兼、申二刻勘申時刻事了退出、

〔小右記〕長和五年五月廿一日甲子、今日祈年穀使立、　廿二日乙丑、頭中將云、○略中昨日御幣之使、宰相二人申故障、仍以三位二人能信、憲定、被差遣也、右大臣○藤原顯光奏云、朝經四位爲參議誠雖下臈可爲賀茂使歟、可隨仰者、攝政云、雖非參議、以三位可爲賀茂、松尾使者、右府申請太無便、只依位階、不依參議耳、

〔左經記〕長元元年二月廿一日、參關白殿○藤原賴通、次藤中納言朝經被參、令余申云、明日祈年穀幣使可令定奏之由、今朝有仰、使差文日時文等可內覽歟、又使可差諸大夫多故殿○藤原道長御服也、爲之如何、被仰云、使定文等不見給早可被奏定也、又給素服之家司等之外、專不可申服由、早差定可被催也、○略中

奉仰被退出了、

〔柱史抄上二月〕祈年穀奉幣○略中

地下公達受領功輩勤奉幣使例

延久五年九月十八日、今度使依關白殿仰、地下君達相交勤之可然也、成受領功之輩幷舊吏等、稱陰于徒不務公役、自今以後、如此之輩相交可令勤仕者、諸大夫等各感悅云々、

〔中右記〕大治四年二月九日、早旦頭辨送消息云、

來十四日祈年穀奉幣事可奉行、是內大臣一日令定使々了、而依犬死穢被辭申也、依御氣色上啓

如件、

申〻承了由、十一日庚申、奉幣行事外記來云、四位使二人有〻障、時俊朝臣申〻障、全不〻進〻車、實房朝臣雖〻進〻車、妻万死一生、不〻可〻過〻今明日〻所〻申上〻也、又邦家宗明、各在〻女院皇后宮女房宅〻不〻相逢〻也、爲〻之如何、

十二日、行事辨外記等申旨、以〻消息〻示〻頭辨許〻了、返事云、奏〻事由可〻申〻子細者、入夜頭辨送〻消息〻云、四位使季房顯親顯俊等早可〻催者、〇略中件旨下〻知行事史外記〻了、十三日、入夜行事外記來云、使々多猶以申〻所勞由、仰云、大略如此進奉人之事不〻可〻闕、但藤氏五位二人猶以不足、邦忠泰盛猶相扶可〻參仕由慥加催、早旦可〻申〻一定也、十四日癸亥、祈年穀奉幣也、早旦行事外記重實來云、泰盛可〻參之由申也、於邦忠者申〻所勞更發由、早以〻此旨可〻申〻殿下〻仰了、藤氏五位今一人不足也、

長承二年二月廿一日丁未、祈年穀奉幣、上卿左大臣、〇家忠藤原行事右少辨俊雅、後聞八幡使闕了、被〻相催殿上人顯盛之處數度辭退、遂被責仰、夜及深更申〻所勞由、宣命幣遣左大辨實光、新宰相中將公教兼二社稻荷使爲重、昨日軒廊御卜趣、被〻載伊勢宣命辭別云云、七月廿五日戊寅、夜前可〻定申祈年穀奉幣使之由有催、廿八日、召〻奉幣行事外記、尋〻使々參否之處、重奉之輩甚少、事及闕怠、且重加催、且又可〻申〻殿下〻由仰了、宰相皆故障、只右宰相一人被參者、申〻殿下〻可〻催〻散三位之由仰了、且又付職事可〻奏由示了、〇略中凡近代叶〻外記催大夫纔六七人許云々、奉幣使四位二人、五位十七人可〻入也、十二人催出者事不〻可〻叶由仰〻外記〻了、是兼行社所々之故也、廿九日、外記來云、殿下仰云、候〻殿下〻致信致時二人可〻入〻奉幣使者、早任〻仰旨〻可〻催由仰了、五位十二人事、强不〻可〻闕也、八月一日癸未、實房爲重四位二人、共服藥之由申上、仍付〻兵部大輔奏了、仰云、件服藥、兼日不〻觸〻外記〻仍不〻行、又致信申〻發心地由、可〻申〻殿下〻由仰〻外記〻了、殿下仰云、給〻泰盛篤昌者、被〻仰〻下外記〻了、遠所使五人、伹兼定中所四人、近所六人、相兼定

已上四位二人、五位□□□□兼、

〔台記〕康治三年二月十九日庚子、祈年穀奉幣、巳刻參內、〇略中賀茂使修理大夫忠能散位三依〻參議等不〻參〻申〻殿下〻催〻之、松尾平野使參議經定朝臣、八幡使中將源師仲朝臣、依〻地下四位不〻參、申〻殿下〻忠藤原通盛催〻之歸宅、

〔山槐記〕應保元年七月廿五日丙申、被〻發〻遣祈〻勅勘〻定宗申所勞、此外無〻五位、仍被〻尋〻例、遣〻式部大夫爲範云々、

〔顯廣王記〕應保三年二月廿七日戊子、祈年穀奉幣、上卿右大臣殿、〇藤原基房伊勢使資遠王、中臣親賴、忌部、卜部兼康、八幡使被用公卿始也、平中納言〇清盛爲〻使、自〻今以後立爲〻例云云、

〔玉海〕嘉應二年二月五日丙戌、午時許、左頭中將賴定朝臣來云、可〻奉〻行祈年穀奉幣事、左府被申〻障也、〇略中雖有〻所勞、相扶可〻參仕之由令申了、內々問行事辨事、未申定云々、八日己丑、早旦尋〻遣奉行辨於頭中將之許、〇略中頭中將返事、狀云、行事辨經房領狀之處、法勝寺常行堂修二月可〻奉〻行之由有〻院宣之間、已以違亂、子細只今可〻參啓者、卽來、余又相逢之、賴定云、奉行辨事次第如此、而間只今光能朝臣申送云、於修二月事者、可〻仰〻少納言〻行之、神事有〻限、經房早可〻奉〻行云々、卽令見〻件狀、余見了返給、賴定朝臣退了、則召遣經房了、戌刻許來、余又出逢、仰云、明日可〻有〻祈年穀奉幣定、陰陽寮可〻召設者、經房退了、以〻光經申云、明日拜任辨官之後可〻申〻行政、又官掌以下史部等可〻給〻祿、是來十一日爲著〻列見〻也、且是逐〻父祖跡也、而依〻指合此定、被〻延〻引列見、由相語、左大辨、而不〻承引、彼日欠日也、仍明日必可〻隨〻事、其事畢參〻陣者可〻及深更、此事生涯之大事也、若被〻延〻引哉、以〻私事申延嚴重之神事之條、付〻冥顯有〻恐、雖然奉幣期日尙遠、枉可〻蒙御恩云云、余案之、依〻私語延〻引公事之條、頗雖不〻打任事、儲日十二日也、件日雖〻定申不〻可〻事闕、加之以〻限式日之事默止人之大事、似無會釋歟、仍可〻延〻引來十二日可〻被行之由答了、經房恐悅退出云云、十一日壬辰、召〻外記祐職、問〻使王事幷大內記參否使々事等、申云、大內記所〻出仕也、使王在京只一人、雖所〻澁申、責取領狀〻了、使等催調可〻令申也者、十三日甲午、奉行外記祐職來、所〻遣

召也」問、内記不參事幷使々事、申云、大内記兼申「可」參由」而俄出「障、於「定日者不「能出仕由令」申、仍觸「頼業」之處、先例六位内記奉「之恒例之由令」申、仍不「及「譴責」、又不「申「案内「也、使々事、頭中將奉「仰、所々充「諸院殿上人「、各被「申「本所「、隨「彼左右「催具、明日可「申「散狀「者、内記事仰「子細「了、申狀無「謂也、外記又申云、使王一人可「參、今一人催出必可「有「卜串「之由頼業所「申之「了、仰云、尤可「然、外記退出、十四日乙未、早旦外記祐職來云、王大夫已二人催出、可「有「卜串「、又使等事未「奉「左右「、夕方可「申「散狀「、又大内記加「勘發「之處、所勞儀出來不「出仕「當日必可「出仕「返々恐申云云、仰云、卜串明日早旦可「開也、○略中秉燭之程、祐職持「參日時定文等「書寫了返給、問「使等事「、申云、當時進奉之者十二人闕如七人、職事沙汰懈怠之間、于「今如此、頭中將經「奏聞「可「譴責之由被「仰、

〔吉記〕承安四年二月十三日庚午、今日祈年穀奉幣也、上卿新大納言、辨右少丞親宗、○略中

伊勢　參納言、綱王、權大納言、隆能、大中臣祐定、朝臣祐茂、參議、祐家、卿、大中臣能隆、大祐定、朝臣祐茂、參議、祐家、卿、

松尾　參議、頼定卿、

平野　皇太夫、朝臣資泰、

春日已下如「例、

〔顯廣王記〕承安四年八月十八日壬申、祈年穀奉幣也、有「使論「、中臣永親定相也、

裏書　定輔奉「殿下仰「、藏人左衞門權佐奉行、仍以「定輔「入「進差文「了、然間永親以「立官人「觸「右少辨「故令「恐「

〔此事、以「本官過失之由、被「改「定永親「了、王代之法、諸事如「此、可「云奇異也、

〔吉記〕承安四年八月十八日壬申、今日祈年穀奉幣也、上卿源大納言、右少辨親宗行之、○略中使八幡左宰相中將實家卿、二條院御字以後被「用「納言「近年有「沙汰「、被「用「參議「云々、

〔玉海〕承安五年二月十一日癸亥、此日祈年穀奉幣事光雅、大内記業實之外、政官等一人不「參尤不敵、○略中次六位外記持「參使々交名「、書「折紙「入「筥「、余見「之、此中春日使載侍民部大夫貞光、余召「頼業「問云、春日使同藤氏之中尋常之者可「勤仕「也如何、頼業云、近代無「此

沙汰、但式部大夫五位等兩三可「改歟、余云、可「隨「近例「歟、但相計可「改之者、○略中召「大外記頼業「問「使々參否「、申曰、兩三使等在「所勞候「門外「、余仰「慥可「催之由「、○略中次以「召使「仰「内記「可「持「參宣命之由「、○略中予置「笏於左「、以「右手「取「宣命「給之、○略中此間使兩三人、或遲參或不參、仍取「宣命五六通「許「給「奉行外記「、○略中次召「大外記頼業「、今日使々多以不參於「陣相尋之處、申「不可「事闕之由、今如「此、頗以爲「奇、近代例使等各申「所勞由「、遂不「進「社頭「云々、神事違例也、慥加「問「可「責「可「追「立「、又奉行外記沙汰懈怠、各成「阿容「、不顧「公事「陵夷「、不「思「神事違例「、爲「將來「慥可「加「問「責之由召仰了、頼業申云、近代例多以如「此、敢無「皆悉參入事「、依「外記催「不「相叶「申「奉行職事「、又以無「始終之沙汰「、因之非「外記之過怠「、但奉行外記若可「殊過斷歟可「隨「仰者、余云、事雖「非常「、已爲「近代例「云々、然者不「可及「殊罪科「、只自「今以後事「、能々可「誡仰者、七月五日甲甲、兼光仰云、來十七日可「被「發「遣祈年穀奉幣「使々事、如「今春多不「參者、外記過怠也、慥可「催「具「者、十日己丑、申刻兼光來、依「遣召「也、余相逢、○略中此次示「兼光「云、祈年穀奉幣使等各不「向「社頭「、或數日取籠宣命「、無「王事「、今度奉幣殊申沙汰、慥不「經「日數「、其身可「參「社頭之由可「被「下知「也、如此事上卿直仰「外記「、糺行恒例也、然而近代事不「可「叶「、使々事又職事殊爲「奉行事仍所「示也、兼光云、尤可「然、早可「申「沙汰「、神事陵夷不「可「云々、又使等進奉不「參、無「始終之沙汰「之間、每度兼數ヶ所「使、是又不穩事也、

〔吉記〕壽永元年八月廿八日丙寅、今日祈年穀奉幣定也、上卿藤大納言、執筆頭右大辨親宗朝臣奉仕之、行事辨光雅朝臣遲參、左少辨光長勤「其代「而乍「置「光長「頭辨執筆、强不「可「然歟、未「知「其理「、天治之頃、雅兼卿爲「非參議「、大辨奉「仕執筆「、有「相傾人「歟、勤仕縱雖「無「難「、有「他人者勤歟、但可「引「勘先例「、行事辨執筆常例歟、

〔玉海〕文治二年閏七月十四日己未、是日祈年穀奉幣也、○略中春日使者、元暦元年、自「今以後可「用「四位之由有「勅願「、被「載宣命「、而去年奉幣兩度依「闕如「被「用「五位「、非「曾違例「、又似「欺「神、今度地下四位皆稱障、

外記勘去年例申可被用五位之由然而余專敬神之志召出文章博士光輔朝臣令勤仕彼使儒士之條雖無近例依無官家氏人儒者奉仕北野使今又地下藤氏四位其人已稀仍准官家例用儒者使可無其難加之祖案古跡例云儒者云云君達皆勤仕此役恐計之至何背時議後日法皇感之但不可爲流例是關如之秘計耳

〔玉海〕文治三年四月廿三日甲午去祈年穀奉幣住吉使倫仲不參社頭仍社司未進御幣之由令言上於倫仲者有沙汰既可被召籠早可申祝之由可仰遣口下知了　四年二月四日庚午此日祈年祭也○中略仰祈年穀奉幣可忩沙汰御藥事可被載辭別之由了　十三日己卯申刻許召棟範仰宣旨事（先可注進仰詞之由仰之）此次申奉幣之間事元被催右大臣而爲當日定者可參之由被申云々而新中納言忠良可奉行之由所望云々仍職事內々此旨觸右府歟然間忠良俄辭退云々仍重告右大臣之由棟範所申也家習初度神態所勤祈年祭若吉田祭也而奉幣奉行之由雖不及難不似家例然而彼邊事專不能口入而今忽辭退若有教訓人歟

〔三長記〕元久三年二月廿八日己卯今日被發遣祈年穀奉幣使上卿中納言中將殿○藤原基通子息基（被用神態略也）○中略上卿令歸里亭給之後召使等給饗祿○中略予○藤原長兼不參御所饗祿

〔百練抄十四條〕嘉禎二年十一月廿九日壬午祈年穀奉幣使定可爲同日之間書狀闕如之處參勤有叡感叙正四位下云々

御神木事也參議從三位宗平以爲使

〔薩戒記〕應永卅三年三月三日丁酉藏人右少辨經直送御教書云宿紙

來十一日可被發遣祈年穀奉幣使可令參陣給者依天氣上啓如件

此催非使事使定書手事也然而不載其旨如何又中山宰相殿書之可載中將字也尤散々

請文云

來十一日祈年穀奉幣使定參陣事謹承候了但此間依雜熱事不能出仕候可令得其意給候恐々

謹言

立紙用彼職事立紙口經職事之公卿或如此予歷頭之故也又今日用之事返遣彼立紙爲令知達失也

十一日乙巳今日被發遣祈年穀奉幣○中略稻荷侍從行豐朝臣（祿被仰侍從永豐朝臣申領狀而俄故障仍一昨日被仰彼朝臣無左右申領狀云々）

〔公名公記〕永享八年二月十日明後日祈年穀奉幣予奉行事兼日頭左中將隆遠朝臣觸仰之（其狀云來十二日可被發遣祈年穀奉幣石清水使同令勤給者仍天氣言上如件禮紙云日時定并使定可爲同日可下知給由被仰下候也者予案此狀雖仰使并定等事不仰發遣奉行事也仍後日□示子細之間書狀闕如之處參勤有叡感叙正四位下云々）

仍今日出請文（其狀云來十二日可被發遣祈年穀奉幣使定并石清水使事同可令奉行之由謹承了可令存知之狀如件禮紙云追申二日可被發遣日時使定并石清水使事同可令存知候也退案之狀文章不可大然歟可令奉行之狀所請如件卜可書也又謹字事當家納言以後不書之由聊有所見旁不思得一書遣之條短慮不可淨也抑御教書到來之時即雖可云請文臨下始潔齋之期上可云之由存了暫猶豫是先例也文曆二三十五階相御記去伊勢一社奉幣可奉行由有催請文已後可始神事云々仍日可獻請文由返答了同十七日依獻一社奉幣者嘉承保延雖有例祈年穀奉幣使定書手事也然而不載其旨如何又中山宰相殿書之可載中將字也尤散々儀了

十二日今日祈年穀奉幣發遣日也○略予依催行此事公故障時大納言行之又故障時中納言行也三間有行例然而近曾大臣不在中納言不下歟仍大納言多行之不可必然事也又可相兼八幡使云々此使往昔源氏四位之納言勤之於一社奉幣者嘉承保延雖有例祈年穀奉幣已下發遣儀等大臣所奉行也言（山槐記治承三正廿四條）

穀井臨時諸社奉幣時例未見及子細長寬□五十臨時廿二社奉幣日平中納言清盛卿勤了（山槐記治承三正廿四條）（職源抄云々）自餘以降爲流例祈年穀及臨時幣時納言大略勤了或參議間又雖勤之至應永廿八四五祈年穀多分者納言勤了然而應永廿九年二月廿四日祈年穀奉幣久我前內府（通宣）爲大納言行發遣云々（職源抄寬元顯定等）參議相兼八幡使其後又爲流例（長寬元顯定等）一社奉幣時各爲大納言勤之但不兼上卿歟此上豐卿已往此社使爲參議而近來爲納言應永廿九年祈者不能左右仍所領狀也○中略穀奉幣已來每度此定也但已前儀未勤見之○中略

召召使欲召稻荷使之處使遞而參入之間則給宣命（改四位使猶眷日已前是嘉元三如元）

〔康富記〕寶德元年八月廿三日辛未是日被發遣祈年穀奉幣使者也○中略未刻陣儀始先有日時使等定勘文○中略大內記持筥從上卿後參役弓場淸書儀同之康顯雖參陣少內記御訪以祈年穀總用內可被下之由連々員職相共雖申入之遂以不被下然者可辭申少內記之由員職康顯兩人捧辭狀先日付奉行職事申切畢今日尙以及數ヶ度少內記役事雖被仰下不可存知之由堅申入之間藏人佐

無力于問答、被聞之、於大內記者、四位五位共以從上卿後之條、爲連綿之由、堅申所存了、此事兼日藏人佐被尋兩局務之間、四位大內記從上卿後之例一卷被註進之、就此等之儀、職事堅被責仰大內記之間、應別勅、今日可從所役之由、在治朝臣被領掌、申之、又前相公在卿豐同被參陣也、被承伏申者也、大內記菅原言長朝臣四品之時、度々被勤此役了、○中略

伊勢

石清水

陣本官上卿　權大納言藤原朝臣隆夏

賀茂

權中納言藤原朝臣明豐

松尾

陣執筆　參議藤原朝臣資綱

平野

參議藤原朝臣持爲

稻荷

從五位上　侍從藤原朝臣雅保

春日

參議藤原朝臣家輔

大原野

前備後守藤原朝臣忠敦

大神

自九條殿被召進之　前出雲守源朝臣兼益

自近衛殿被召進之　刑部少輔大江朝臣俊宣

万里小路前內府被召進之　前備後守藤原忠敦

自二條殿被召進之　前越中守高階朝臣賴行

前越中守高階朝臣賴行

石上

前越中守高階朝臣賴行

大和

從四位下前修理大夫花山院殿被召進之　散位藤原朝臣敦國

廣瀨

散位藤原朝臣敦國

龍田

散位藤原朝臣敦國

住吉

久我前內府被召進之　前能登守源朝臣爲治

日吉

自鷹司殿被召進之　前越前守大江朝臣匡具

梅宮

前備後守藤原朝臣忠敦

吉田

前越前守大江朝臣匡具

廣田

前能登守源朝臣爲治

祇園

前越前守大江朝臣匡具

北野

從四位下於陣幷本官從內記役畢

大內記菅原朝臣在治

丹生

貴布禰〇中略

神祇官差進祈年穀奉幣使々交名事

從四位下行神祇權大副中臣朝臣清直

忌部從五位下行神祇權少副齋部宿禰親雄

正五位下行神祇權少副兼中務權少輔卜部朝臣兼敏

右依官宣所差進如件

寶德元年八月廿三日

從五位下行大祐齋部宿禰親季

從三位行伯資益王

神祇官差進祈年穀奉幣使々交名事

丹生川上社使

正四位下行神祇權大副大中臣朝臣秀忠

貴布禰社使

從五位上行大學助卜部朝臣兼濟

右依官宣所差進如件

寶德元年八月廿三日

從五位下行大祐齋部宿禰親季

從三位行伯資益王

頒幣

〔日本紀略四村上〕天德元年七月十八日癸卯、祈年穀奉幣使、廿日乙巳、月次神今食、天皇幸中院、去十八日祈年穀幣帛被付奉之、

〔日本紀略九一條〕正曆元年八月廿二日甲子、奉遣伊勢以下諸社幣使、依祈年穀幷天變恠異御惱事等也、四年三月廿三日辛亥、祈年穀奉幣、五年二月十七日己亥、奉幣伊勢以下諸社、依祈年穀也、天皇行幸八省院、

〔日本紀略十一條〕長德四年二月十九日戊申、祈年穀奉幣廿社、

〔日本紀略十一一條〕寬弘元年二月廿九日癸未、祈年穀奉幣、二年二月十五日癸巳、祈年穀伊勢以下諸社、三年二月廿七日庚子、祈年穀廿一社、四年二月十七日甲申、祈年穀廿一社、五年八月十二日庚子、奉幣廿一社、祈年穀也、七年閏二月九日己未、於八省院奉幣廿一社、依祈年穀也、八年二月廿三日丁卯、奉幣廿一社、依祈年穀也、

〔日本紀略十二三條〕長和三年三月十八日癸卯、奉幣廿一社、祈年穀也、四年閏六月十一日己丑、奉幣廿一社、祈年穀也、

〔日本紀略十三後一條〕長和五年五月廿一日甲子、奉幣廿一社、依祈年穀也、

寬仁三年二月廿日戊申、奉幣廿一社、依祈年穀也、五月十六日壬申、奉幣廿一社、依祈年穀幷祈雨也、四年二月十四日丙申、祈年穀奉幣、辭別被載今年三合之由、

治安元年八月十六日己未、奉幣廿一社、依祈年穀也、二年二月廿四日甲子、奉幣廿一社、祈年穀、

萬壽元年二月廿五日癸未、奉幣廿一社、依祈年穀也、三年二月十七日甲子、奉幣廿一社、依祈年穀也、

〔日本紀略十四後一條〕長元元年二月廿六日辛卯、祈年穀廿二社、二年二月廿五日甲申、祈年穀、奉幣廿一社、三年二月九日壬辰、祈年穀奉幣定、十七日庚子、祈年穀、奉幣廿一社、

〔經信卿記〕寛治二年十月十九日辛卯、有祈年穀奉幣云云、上卿內大臣〇藤原師通辨、右中後聞祇園幣物今一前不足、日吉御幣可有一前、而持參二前云云、

〔長秋記〕天承元年八月六日庚午、有伊勢奉幣事、但本宮有穢氣云々、奉幣使賀茂、松尾、平野三社使、宰相中將〇藤原成通相兼云々、七日辛未、自內府有御消息、六日奉幣使等皆給宣命退出、下官〇源師時已下行事官等漸至待賢門之頃、大神宮有穢氣之由使中臣等申也、佇立問先例之處、如此例不覺、但於途中有穢之時、御幣奉安離宮院之由、仍下官答云、使等皆立畢、是可准途中穢歟如何、辨以下同之辨申云、隨無奏狀、只脚力許走來各告申也、仍忽難奏聞者、件口土記途中穢事候樣思給ヲ引見給之處治曆記未求得候ヲ所借申大切文也、又件事等何樣可候哉、御幣已進發大神宮許有穢、自餘不穢者、持參離宮院可過穢歟將如何、其後無音也、案此事一端理可然、但如愚案中臣申穢由者、於幣物者暫納神宮且經奏聞可隨勅定歟、

〔康富記〕嘉吉三年五月十二日丙寅、權辨被語云、去二月祈年穀奉幣、八幡御幣依入夜衛士顚倒、自御山下落損其身、血付幣布之間、社家申子細不請取幣物、仍使權大納言通淳卿爲私奉幣、被用意幣布被借與之取替之間、無爲奉納云云、仍此事如何可有之由、後日權辨爲奉行被尋仰先例於兩局之處、不得所見之由各被申之云云、

〔年中行事秘抄二月〕祈年穀奉幣事

依一社穢諸社奉幣延引例

永久二年二月十四日、今日可有祈年穀奉幣、權大納言家忠卿著仗座、內記覽宣命草之間、春日社穢氣沙汰出來忽延引、廿二日祈年穀奉幣、

承安三年二月十八日、祈年穀奉幣也、而依平野社五體不具穢延引、

〔伊勢公卿勅使雜例〕內裏有穢諸司不穢不立月次使例

延引

延久四年二月、內裏觸穢諸司不穢、然而不被立、但同月廿五日祈年穀辭別云、今年二月乃祈年祭乃式日乃內裏ニ觸穢出來禮利、須久以不穢諸司天被行倍支奈利、而外記先例乎令尋問給布處諸司モ同久觸穢氐延引セ時乃例ヲ勘申セリ、因茲天式日ヲ過天令行給布コ已了支、縱件事ニ付咎祟ノ可出來ト深御助厚御惠ヲ施給云々、

〔水左記〕承保四年十月卅日丁未、被立祈年穀奉幣使云々、有宣命、少內記通國草之上、春宮大夫云々、依使等牢籠、臨乘燭事了云々、去八月依赤疫事延引及今也、

〔中右記〕天永三年二月四日辛卯、祭主申上曰、祈年祭以前不可被立臨時伊勢幣、仍來六日祈年穀奉幣可延引者、如此沙汰了、入夜從殿下〇藤原忠實退出、三月廿八日乙酉祈年穀奉幣也、從殿下有召仍參入、殿下令參內給、雖內御物忌、御于殿上奉幣、仍上卿右大將〇藤原家忠參仗座、內覽宣命草之間、俄從春永久二年二月十四日、今日可有祈年穀奉幣、仍上卿右大將〇藤原家忠參仗座、內覽宣命草之間、俄從春日御社穢氣之疑出來之由、預實經申上長者殿也、仍如此一社有穢時、奉幣猶香之由、令大外記師遠勘申之處、先例不分明、猶止春日一社、可被立他社幣歟沙汰之間、興福寺權別當永緣僧都、一日參御社之後、歸參院者、仍穢氣遍滿之疑出來、今日奉幣凡延引、廿二日、今日有祈年穀奉幣、上卿右大將依御物忌、主上〇鳥羽於石灰壇有御拜云云、

大治二年二月十六日丙子、今日雖可有祈年穀奉幣、依神祇官燒亡事延引、三月五日雖可有祈年穀奉幣、依本官穢又延引云云、二箇度延引頗以可奇歟、廿三日、今日祈年穀奉幣也、二箇度延引也、上卿內大臣〇源有仁行事右少辨宗成、申時使々立、左宰相中將、左大辨、右兵衛督、八幡寶房朝臣、稻荷親口朝臣、

〔山槐記〕治承四年十月廿七日丙午、今日被發祈年穀奉幣、自舊都神祇官被發遣、上卿左大將實定辨右少將忠、八幡使藤中納言成範賀茂右京大夫基家松尾一條三位實清平野法住寺三位雅長云云、此奉幣自去

八月四箇度延引、尤爲奇、今度被勘改日時直宣命、予福原去十七日可奉行也、十月祈年穀希代事歟、
但有例云云、

〔吉記〕壽永元年八月三十日戊辰、今日可有祈年穀奉幣、爲勤使節、已著冠帶之間、延引之由或者告之、
依不審遣尋頭辨許、答云、依幣料闕如延引實也、勿論了、仍歸勘解由小路亭、　九月二日庚午、今日祈
年穀奉幣也、雖可早參、近代公事依難、遂先規、午斜參內、

〔仲資王記〕元久三年七月廿三日壬寅、祈年穀奉幣也、　八月六日乙卯、參、祈年穀奉幣也、去月廿三日、
依院御所牛產穢延引也云々、

〔三長記〕建永元年七月廿四日癸卯、今日祈年穀奉幣延引、有穢疑之故云々、　八月七日丙辰、今日被
發遣祈年穀奉幣使、

〔岡屋關白記〕寶治三年三月十六日、今日祈年穀奉幣也、○略　中參神祇官、伊勢幣發遣後有御拜、如例、余
祇候、御拜座儲辰巳角、不立御屏風、唯小筵上敷半帖、

〔吉續記〕文永四年七月廿二日、今夜被始行金輪法、日來光朝奉行、予○吉田經長　籠居之程也、然而予出仕
之間、自昨日沙汰、關白殿○藤原實經　被召予、來廿七日祈年穀奉幣也、然者御神事中以憚歟、又運時廿六
日以前可結願歟、爲前齋者、自廿六日御神事歟、且可仰合阿闍梨之由被仰下、予以此趣仰阿闍梨、然
者可運時之由申之、予申此由、自今日運時廿五日被結願者、可爲四箇日候、尤可被憚歟之由申之、關
白殿尤可然、奉幣使未催口歟由被聞食、然者奉幣延引之條可然歟、可仰此由於親朝之由有仰、　八
月五日、今日祈年穀奉幣也

〔康富記〕文安元年七月廿二日己亥、是日祈年穀奉幣也、去二月分也、依武家要脚未濟度々令延引、今
日所被發遣也、

〔康富記〕寶德元年○文安六年　八月廿三日辛未、是日被發遣祈年穀奉幣使者也、文安三年八月廿八日被

中絕

幣料及用途

發遣之同四年五年兩年遂以不被行之、中絕不可然之由武家被執奏申之、有興行矣、

〔建武年中行事〕祈年穀奉幣、この月○二よき日して奉らる、廿二社なり、○略　中幣料はかねて辨諸國
にもよほしあつ、

〔新編追加神社〕神事祭禮條
一可興行諸社幣物不法事、○略　中祈年穀以下伊勢幣、率分所納物、延年季、充國々等、猶致對捍、當日晚
陰纔以進濟、因茲陣役之營入夜景、發遣之義送半更、神事之陵夷、職而斯由、自今以後專存如在、殊致
謹愼、

〔權記〕長保二年二月廿七日乙亥、參內未剋　祈年穀奉幣使可發遣、行事權左中辨書出幣料未進國國奏
覽、召余被仰云、刻限欲過、幣物不具、所祈無止、不可默爾云々、仍忽求練用絹十四匹、令付行事所、件代
召納、早可返補之由、示行事辨、

〔中右記〕大治四年二月六日、今夕祈年穀奉幣定、　十一日庚申、左少辨差使示送云、幣料數多、雖被切
宛飛驒國、彼國司在女院御修法壇所、不相逢、是醍醐阿闍梨云々、不知名、仍不能加辨濟、催爲之如何、
予以行事史孝忠雖觸大藏卿、不改成他國及深更、今夜不能左右也、　十二日、入夜頭辨送消息云、○中略
飛驒幣料可濟之由申上云々、件旨下知行事史外記了、

〔台記〕仁平元年二月十八日己未、左中辨師能朝臣來申、明日祈年穀幣料、四ヶ國不濟之由外記內覽、
〔玉海〕承安五年二月七日己未、此日祈年穀奉幣定也、○略　中經房、光雅等云、期日近々間、幣物定難具歟、
此條近代定例也云々、　八日庚申、權右中辨經房來、○略　中余著冠直衣相逢、問幣物事、昨日依申難之由也　期日
近々、如只今者凡不可叶、今日參院分申處、不可及子細、慥可令責濟之由有御定、尙若難濟者、行事辨
廻計略成公事、近代之例也、事若及闕如者、前日可申案內云々、良久談語退出了、　十日壬戌、入夜經
房朝臣示送云、幣料諸國難濟之間、明日定懈怠歟云々、　十一日癸亥、此日祈年穀奉幣也、上卿予、辨

經房、職事光雅、〇中略召光雅仰云、去夜幣物事、難具由經房朝臣示送如何、已參陣了、早可催具由可仰遣者、光雅云、無仰之前仰遣也、重可遣仰者、〇中略以召使召辨、經房問幣物具否、申具了由、

文治三年二月廿日壬辰、宗隆來申祈年穀奉幣之間事、使王依料田近江國訴、申不可勤仕之由云々、奉幣每度有此訴、返々奇恠、有訴者兼日可申也、而寄事於此訟、每度欲闕如事、慥可釣出之由仰之、但於訴訟者、有理者可有沙汰之由仰了、　廿一日癸巳、此日祈年穀奉幣也、辰刻行事辨親經申幣物事、伊勢幣催具了、諸社幣二百疋許不足、所召置藏人方之成功物少々欲借渡云々、仰云、皆悉被渡行幸用途之由所聞也、但及闕如者、雖在官行事所何不借渡哉、依爲最少事也者、

〔平戸記〕寛元三年七月廿二日甲寅、明日祈年穀奉幣、伊勢幣闕如云々、今夜終夜被責加州、日來無沙汰歟、近來之風、不可說不可說、當國近年多被召越之間、無用意之由雜掌申之、甚難堪事也、　廿三日乙卯、今日被發遣祈年穀奉幣使、伊勢幣依去夜之平責、今日進濟了、

〔吉續記〕文永八年正月廿八日壬辰、來月廿七日祈年穀奉幣幣料、諸國御教書書給、奉行官掌國鄕錦事仰遣奉行職事、　二月十日、參殿下、外宮假殿遷宮用途帳、幷來廿七日祈年穀奉幣幣料諸國散狀等以擧俊申入、用途帳事可奏聞、幣料事申事由、對捍國々可責催之由有仰、　廿五日、自今日殊始神事、依祈年穀奉幣奉行也、女房有憚服事之間下棟各別所、此事兼尋兼文宿禰、依被諷諫也、祈年穀奉幣幣料錦、前日可渡行事所之由、相觸奉行職事、諸國及遲濟者、以上文使詔可催立之由仰官、

〔康富記〕應永廿七年八月廿二日戊午、來廿五日祈年穀奉幣、外記御訪貳百匹到來、召使行秀連歌會衆也、仍令持下部來臨、今度奉幣總用料足貳百六十貫文也云々、此外記御訪事、兼日令申召使行繼、一度傳奏ニ直申之云々、予今月臨時奉幣爲分配之故、如此令出仕者也、請取案如此、

請取　祈年穀奉幣參役六位外記御訪事

合貳百匹者

右所請取之狀如件

應永廿七年八月廿二日　　權少外記判

文安四年四月三日甲子、祈年祭御訪貳百疋、內一貫七百七十文、自官掌季包許到來、予分配也、　廿日辛巳、祈年祭御訪百七十六匹到來、其內酒直引留云々、　六年〇寶德元年二月五日丙辰、高大史來臨、伴之先勸一盞向藏人佐綱光亭、令對面給、祈年穀奉幣奉行也、少內記御訪事、高大史隼人正兩人申狀用意令申之、可奏聞之由返答、案文見左、〇中略

少內記員職康顯等謹言上

祈年穀奉幣御訪事

右內記役事、三節會叙位之入眼、幷祈年穀祈雨止雨奉幣、其外每有詔勅宣命、不云恒例臨時、或兼日存所役構參之、或俄蒙催令參勤之、不斷致奉公粉骨之條、頗超等倫、尤朝要之職也、雖然近來者俸祿令相違、一年中之間、更不浴一塵之恩波、又不被下御訪、不便至極也、爰祈年穀奉幣料足、被加總用內、少內記兩人各三百匹宛可令申沙汰之由、被仰遣武家奉行方者、定無子細歟、是雖爲少事之御訪、先少支羽翼、且爲成奉公之勇、粗言上如件、

文安六年二月日

廿八日己卯、自藏人佐綱光可來之由被申送、仍進康顯了、先度令申祈年穀奉幣內記御訪事、粗申入了、目安又可書給之由被示候間、今度者五百疋宛可有申沙汰之由、書改付進了、　三月二日壬午、早朝參藏人佐亭、少內記御訪事尋申候處、十四日祈年穀、依八幡閉籠事可延引歟之由有其沙汰、追可申承之由有返答、　五日乙酉、祈年穀總用內、少內記御訪事、自藏人佐今日遣奉書於飯尾備中守許云云、先日所進候目安被副下之云々、　八日戊子、昨日依招引向飯尾備中守之處、〇中略少內記御訪事、自藏人佐可被申、可有申沙汰之由令申之處、職事奉書內記字不見之、申直可付給之由申候間領掌、

其後以康顯申入職事藏人佐了、九日己丑、
祈年穀奉幣用脚悉下行候哉、就其少内記員職康顯等如此言上之仍而披露之處、不便事候、可然之樣可被申沙汰之由被仰下候也、謹言、
三月五日　　綱光
飯尾備中守殿
八月十日戊午、康顯伴員職參廣橋、來十九日祈年穀内記御訪事、重可被仰武家奉行之由申候間、被出狀了、持向之處、備中出行云々、預置子息孫〇孫一本作彌三郎云々、
祈年穀奉幣被發遣、來十九日候、先度申候少内記員職幷康顯兩人無足之間、參勤難叶之由歎申候、御訪事、可然之樣可有申沙汰候也、謹言、
八月十日　　綱光
飯尾備中守殿
十九日丁卯、藏人佐綱光招少内記康顯、祈年穀奉幣參役事、堅雖申入、未無一途御返事、載狀可付給之由被示之間、入夜高大史令同道捧一紙付申之、各可爲書狀歟之由存候處、兩人同心之上者、注一紙有何事候哉、仍兩人中令一通進入之、
少内記員職康顯等謹言上
右少内記兼任事、就御事闕候被推任、至于今從内記方之所役、既經年月候、雖然於内記方者、無一塵之恩祿、又雖少事更不被下御訪候、不便事候哉、於今者微力盡候間依不諧、至少内記者辭退申候、此旨可得御意候、凡少内記參役事、三節會幷叙位除目入眼以下諸公事、祈年穀祈雨止雨等臨時奉幣、又諸社臨時祭、其外詔勅宣命作進、公事每度被召出、少内記致粉骨之條、殆越傍輩候、爰祈年穀總用之内、諸司公人悉多少之御訪被下之間、可被加被内之由、去々年以來數ヶ度捧歎狀、言上事舊候、至少事御下行者、無足之奉公難治候所詮一年中奉公之御訪五百匹宛兩人可被下行者、年中之内記方公事、兩人相互令結番、諸公事每度不御事闕之樣可致拜趨之忠節候、不然者外記史兩役奉公之外、重役難叶之間、辭退之分可預御披露哉、仍言上如件、

雜載

寶德元年八月日
廿二日庚午、四位五位大内記持筥參軾、幷從上卿後參弓場之儀、藏人佐綱光被尋之間、局務被注獻之、
少内記兩人辭申職之間、大内記可從事之由爲被責仰及此沙汰云々、廿三日辛未、是日被發遣祈年穀奉幣使者也、〇中略於總用幣料御訪等者、去々年大略自武家被下行、至不足分者、此間別而自室町殿被付其職云々、仍開閤飯尾備中守存分者、爲文安四年分歟云々、〇中略今日參仕外記事、任去々年二月分配者、一蔀忠種可參也、任同年七月分配者、予當之、於御訪者、文安四年十月自氏鄉許早請取了、可爲何樣哉之由、兼令申局務之處、先可召進康顯之由被命之間、今日召進布護了、可爲相轉歟如何、
〇按ズルニ、是ヨリ前文安四年五年ハ、祈年穀奉幣中絶シテ行ハレズ、本書去々年トアルハ、即チ文安四年ヲ指スナリ、
〔法曹類林二百二十六公務〕延喜廿年六月十四日符云、應奉幣轉經攘災異兼祈年穀事云々、宜下知五畿七道諸國、符到之後擇吉日、每社長官以下潔齋奉幣、祈以件事、〇略節
〔貞信公記〕延長五年四月十日、召祭主仰明日於神祇官可祈年穀之狀、其諸神數書出給、延喜二年例也、八月七日祈〇空格恐年字穀官符給五畿七道事、仰左大辨、
〔日本紀略二朱雀〕天慶六年七月十五日辛卯、〇此下恐脫下字官符於五畿七道諸國名神〇此下恐脫俠字可祈年穀也、
〔中右記〕天仁元年八月六日、夜知信爲殿下御使來云、明日祈年穀奉幣也、仍殿下可參御八省也、而當

申日、雖神事、申日初令臨大極殿給事可有其憚哉如何、但故大殿御賀茂詣申日也、三條院幷院御時、初賀茂行幸申日也、先例如此事可量申者、予申云、先初令臨八省給事、攝政之後即位日已以吉日令參之、又御即位習禮之日所令參給也、今度非始臨御也、神事以申日爲最吉、全不可有憚事也、就中九月例幣日又後日也、又令憚給者、以私忌度々不令勤神事給、尤無由事也、

〔仲資王記〕承元五年七月廿三日壬申、祈年穀奉幣、今度使可實驗外宮造否、是先例云々、中臣知雅、忌部明茂、卜部兼義、王氏云々、

〔業資王記〕建暦二年二月十七日甲午、祈年穀奉幣、廿日丁酉、今夜戌刻許、藏人少輔資賴奉行立祈年穀幣神宮神馬引落、廿二日奉納以前可被引進云々、予請文如此也、神馬本官請取令引進之處、近例不覺悟之上、廿二日奉納行程不可叶之由令申了、而猶推引來、今度權大副兼茂使卜部也、□□可相觸之由令返答了、兼茂云、兼直請取令引進云々、

〔玉海〕文治三年二月六日戊寅、藏人次官宗隆來曰、祈年穀奉幣、伊勢幣錦箱如□爲之如何、可召付成功歟、仰曰、下名拜任衞府之中、多有越之功、彼中少々可用歟、近代又有自院被奉之例云々、且可尋近例歟、

〔康富記〕應永廿七年八月廿五日辛酉、今日祈年穀奉幣發遣也、〇略中

大和廣瀨龍田□□□□大炊御門大納言殿御沙汰也、仍本社參向之事難治之間、內々相語神部云々、御訪百匹ヲ、神部ニ自大炊御門殿被下行了、仍請取三社宣命領狀了云々、

文安元年七月廿二日己亥、是日祈年穀奉幣也、〇略中自早朝人々雖有參集、陣官人就知行敷地、武家輩違亂事致訴訟、不可參陣之由申之、數及催促之後參入之間、被始行午刻許陣儀了云々、陣官人訴訟事、乞取局務之擧狀、□付奉幣奉行藏人權辨雖申之、稱无日數□□□取之故、申不可從所役之旨也、六年二月廿八日己卯、祈年穀來月十四日可被發遣云々、但石清水社家訴訟未落居、神人社僧令閉籠可爲如何樣哉之由被尋之間、有一社障之時、御幣被預置社司例准據分注進之由局務令語給、三月二日壬午、早朝參藏人佐亨、少內記御訪事尋申之處、十四日祈年穀、依八幡閉籠事、可延引歟之由有其沙汰、追可申承之由有返答、八日戊子、昨日依招引向飯尾備中守之處、祈年穀奉幣、八幡有神人閉籠此一社奉遣難叶、雖然可被行哉否可注遣例之由示之間、先度奉行藏人佐方令注進了尙々可引勘之由被返答、且可被尋前局務權大外記等之由令申了、定可尋申歟云々、此後有招引、卽罷向備中守之處、一社障時、祈年穀奉幣例可注給之由申之間、其例不覺悟、可注進准據例歟之由返答了、九日己丑、

一社有障時奉幣被發遣哉准據例

康和二年四月廿六日、賀茂上下幷松尾社奉幣也而賀茂社依有卅ケ日穢、幣帛不被奉之、只勅使持宣命參向鳥居外云々、被申祭停止者也以件年例、建久六年三月六日臨時廿二社奉幣時、北野社有卅ケ日穢止幣物、勅使參鳥居外讀宣命云々、

建長三年六月五日、八社奉幣也、伊勢幣發遣之後、自平野示社頭觸穢出來之由於外記、外記申上卿大納言隆親卿、然而平野使參向也、觸穢爲一定者、預置幣帛帛於不觸穢神宮、穢限以後、可奉納之由可下知之旨仰使了、

文安四年四月廿一日、祈年祭也、鴨社依御蔭山祭祠官各指合、不可請取幣帛之由申之間、被發置神祇官、後日可奉遣之由被仰了、

三月九日

十六日丙申、早朝依召參左府御亭、祈年穀奉幣、八幡使難參向之間、可延引否事、以藏人佐綱光有勅問、御意具狀可被進之由也、兩局務註進被進之、如何樣可被申由被談仰之、用意草案進入之、執柄殿一條

幷右府二條殿等同被申云々、一條殿へ自左府被尋申之時、御返事之樣見左、二條殿御申詞自奉行被進之、

一度奉幣被分獻兩日例

天曆六年六月五日、依祈雨被立臨時幣使、十六社同十九日、在五社幣、伊勢以下今月五日被奉十六社內也、

長和四年十月廿七日、有春日一社幣、去月十四日、依御目事被立奉幣使、而件社漏被日幣、仍追奉遣之、

寬治二年十月十四日、被定祈年穀奉幣日時、同十九日、被立同奉幣使今日祇園幣一前漏了、

治承四年十二月二日、被立伊勢以下十三社奉幣使、住吉宣命、依使不參召少外記清俊給之、相具幣物、宿納本官東院、明日光綱參二本官一給幣參向〇中略

是等列可爲准據候哉之間令注進之、

大外記業□

祈年穀奉幣八幡使依難參向延引准據例

依一社指合延引例

永久二年三月十四日、可有祈年穀之處、依春日社穢延引、

承安三年二月十八日、可有祈年穀奉幣之處、依平野社五體不具穢延引、

建長三年八月六日、可有祈年穀奉幣之處、依春日社穢延引、

正元元年四月十一日、臨時廿二社奉幣也、當日定已了、宣命草奏聞程、日吉社除八王子三宮大略燒亡之由告來間俄延引、

文永九年五月四日、可有祈年穀奉幣之處、住吉社自四月四日有卅ケ日穢、被行清祓之後可有奉幣之間、今日令延引、

雖有一社指合被行例

建久六年三月六日、臨時廿二社奉幣也、而北野社有卅ケ日穢、任康保二年四月鴨社例止幣物、使於鳥居外讀宣命、

建長三年六月五日、八社奉幣也、伊勢幣被立之後、平野社自今朝申觸穢出來之由、雖然不穢之社司、於門外請取幣帛畢、

古今間大概注進如件

文安六年三月十五日

左大史小槻晨照上

左大臣殿御申詞、小高檀紙押折被遊之、

祈年穀奉幣、依石清水指合可被延引哉否事、如兩局注進者、寬治度祇園幣漏之例有之、其外諸社奉幣內、或他日伊勢以下五社幣被奉之、或月追被立春日幣之由申之、至建長三年例者、就臨期之儀、被預置不穢之社司云々、今度之儀聊不同歟、雖然執奏之上、被准據此等之例可被延引歟、宜在聖斷矣、

自殿下被申鷹司殿御返事

祈年こくのほうべいに、八幡の使參向叶候まじく候ともたゝおこなはれ候はんずるやらんとたづね申され候程に、一社さはり候ときみなのべられ候事、ことに八はたの事は一だんの事にて候としろしめしながら、おこなはれ候事はいかゞ候べきと申され候程に、さづのべられ候べきにて候ひしかども、そのゝち武家よりかさねて申候は、この二三年おこなはれ候はねばしかるべからず候、おなじくはおこなはれ候やうにと申候ほどに、りやうきよくへせんぎを御たづね候へば、じゆんきよのれいをしるしてなゐらせ候、そのとき又この御所へ御申

候やうに候へば、いかゞ候べきと御申候ほどに、じゆんきよの例をもておこなはれ候べき事、これ又しさい候まじく候と申され候、いづれもべちに御申候ことばにては候はず候、御文の返事にひろかたへおほせられ候ほどにしるしとゞめられ候はず候、このぶんよく申され候べく候、

右府二條殿御申詞云々、小高檀紙折之被遊之、

祈年穀奉幣、石清水八幡宮社訴落居以後雖可然、以建長三年准據例可被始行之由執奏之上者、何事候乎、

今度有勅問御人數、左大臣殿、鷹司殿 右大臣殿、二條殿 内府、万里小路前内府、帥大納言、以上五人云々、享德三年九月五日癸丑、今度一色内穢及室町殿、仍室町殿爲乙穢、依之十一日例幣、同祈年穀奉幣可延引之由被仰下云々、〇中略 十月祈年穀奉幣被行例、被尋之云々、

〔年中諸公事裝束抄〕祈年穀奉幣、上卿束帶、公卿辨少納言史各束帶、

古事類苑

神祇部二十六

月次祭 神今食祭附

名稱　一一八
初見　一一九
祭神　同
齋戒　同
祭式　一二〇
祝詞　一二八
祭日及時刻　一二九
祭殿　一三〇
延引　一三一
停祭　一三八
職員　一三九
供神料物　一四五
雜載　一四八

附 神今食祭

名稱　一五四
初見　一五六
齋戒　同
供忌火御飯及御贖物　一五七
祭場裝飾　一六二
祭式　一六四
大殿祭　一七八
忌火庭火祭　一八一
解齋　同
祭日及時刻　一八六
祭殿　一八七
天皇親祭　一八九
不出御　一九〇
延引　一九三
停祭　一九四
職員　一九五
供御及調度用途　二〇二
雜載　二一一

神祇部二十六

月次祭　神今食祭附

月次祭トハ、月毎ニ祭ルノ謂ニシテ、其祭幣ヲ六月ト十二月トノ二季ニ諸社ニ奉幣シ、以テ國家ノ靜謐聖體ノ福祉等ヲ祈請スル祭儀ナリ、此祭ハ中祀ニシテ、其祭神ハ總テ三百四座アリ、卽チ祈年祭ニ案上幣ニ預ル神ニシテ、新嘗ノ祭神ト全ク同ジ、此祭ノ史ニ見エタルハ文武天皇ノ大寶二年七月ヲ以テ始トス、蓋シ祈年祭ト月次祭トハ、大ニ相同ジキモノアリテ、其祝詞モ祈年ノ一項ヲ加フルト加ヘザルトノ差アルニ過ギズ、祭儀ノ如キハ全ク同一ニシテ、當日神祇官以下諸司ノ官人參集シテ、中臣祝詞ヲ宣シ、伊勢以下諸社ノ幣帛ヲ頒ツコト祈年祭ト異ナルコトナシ、（但シ供神料物ハ少異アリテ、月次祭ニハ御年神ニ雜猪ヲ進ルコトナク、神馬モ大神宮、度會宮、高御魂神、大宮女神ノ外ハ進獻セズ、）其他諸社ノ祝部ノ懈怠ヲ戒メ、或ハ頒幣ニ就キテ種々ノ制度ヲ設ケシコトナド、祈年祭ノ制度ノ月次祭ニ同ジキモノ尠カラズ、故ニ此等ハ何レモ祈年祭ノ篇ニ收錄シタレバ、此篇ニハ總テ略セリ、

月次祭ハ毎年六月ト十二月トノ十一日ニ行フヲ以テ例トス、然ルニ一條天皇ノ寬弘元年六月ニ、十日ヲ以テ之ヲ行ヒシハ蓋シ異例ナルベシ、其祭場ハ、常ニ神祇官ニテ行ヘドモ、時ニ或ハ中和院ニテ行フ事モアリ、而シテ此祭ノ訖ル後ニハ、天皇必ズ中和院ニ御シテ、神今食ヲ行ハセ給フ、若シ觸穢等ニ由リテ神今食ヲ延引シ、若クハ停止スルコトアル時ハ、月次

名稱

祭モ亦共ニ延引シ、若クハ停止セリ、後世ニ至ルニ及ビ、月次祭ハ兵亂或ハ用途ノ不足等ニ由リテ、爲ニ延引若クハ停止スルコトモ多ク、且ツ其頒幣ノ如キモ、伊勢大神宮ノミニ限リテ、他社ニハ殆ド其例無キニ至リ、遂ニ應仁ノ大亂ヲ經テ神今食ト共ニ全ク廢絶ニ歸セリ、

〔令義解（二神祇）〕季夏月次祭（謂於二神祇官一祭、與二新年一祭同、即如二庶人宅神祭一也、）季冬月次祭

〔簾中抄（上年中行事）〕六月十一日月なみの祭　十二月十一日月なみの祭

〔倭訓栞（前編十五）〕つきなみ　月次と書り、月ごとをいふ、次は次て並ぶ義なり、

〔公事根源（六月）〕月次祭

これは六月十二月に二度、諸社へ御幣を奉らせ給ふ事也、

〔年中行事歌合〕三十二番

右　月次祭

宗明朝臣

夏のくれ年のをはりの月毎に報賽（カヘリマヰラ）の神の幣帛（ミテグラ）

右夏の暮年のをはりと侍ば、二度の月次の祭とは聞え侍ぬべきにやとて負侍ぬ、

〔祝詞考（上）〕六月月次祭（こは新年とひとしく、京畿諸國を合て、三千百三十二座の神たちへ、月毎に奉り給ふ幣を、六月と十二月の十一日に、諸國の神主祝部を神祇官へ集て頒給ふ也、その正月より六月までの幣は、十二月に頒ち、七月より十二月までの幣は、六月に頒ち給はせるなり、）

〔玉勝間（六）〕神今食

神今食は、年毎の六月と十二月との十一日にて、月次祭の同日の夜に行はるゝこと也、まづその月次祭は、三百四座の神たちに幣帛を奉り給ふ、それを月次と名くるよしは、月毎に奉り給ふべきを、合せて二度に奉り給ふにて、六月には、其年の七月より十二月までのを奉り給ふ也、その正月より六月までのを奉り給ふ也、

初見

〔續日本紀（二文武）〕大寶二年七月己巳、在山背國乙訓郡火雷神、毎旱祈雨頻有徵驗、宜入大幣及月次幣例、

〔二十二社註式〕月次（六月、十一月、十二月、○中略）第五十二代嵯峨天皇弘仁年中、此祭始被行之、○（又見公事根源）

〔祝詞考（上）〕六月月次祭　此祭は神祇令に出、又大寶二年七月、乙訓郡火雷神宜入大幣月次幣例と紀に見ゆれば、其始はいと古へなりけん、然るを或物に弘仁年中に此事始るといへるは何事ぞや、

祭神

〔延喜式（四時祭）〕六月祭（准此十二月）

月次祭奠幣案上神三百四座（並大○中略）

右所祭之神、並同新年、

○按ズルニ、月次祭ノ祭神三百四座ノ名稱ハ、社格篇官幣大社ノ條ニ具載セリ、

齋戒

〔禁秘御抄（中）〕一神事次第

二季月次神今食（自一日至十一日也、十二日朝解齋、仍自一日僧尼重輕服等人不參、但元行幸之時、眞實御身潔齋者、自十日也、中祀作法皆同之、）

〔年中行事御障子文〕一六月十二月月次、十一月新嘗祭、前後齋之日、僧尼及重服奪情從公之輩、不得參入、內裏雖輕服人、致齋之前散齋日不得參入、餘諸祭皆同此例、

〔師元年中行事（六月）〕十一日月次祭事（於大神宮、神祇官行之、十六日度會宮、十七日大神宮廢務、十二日有後齋、近代事也、）

〔中右記〕大治五年九月五日甲辰、參院御所三條東殿、○略中以別當被仰云々、來七日可參籠廣隆寺也、而難者云、例幣以前參御佛事、頗可有其憚歟、人々相議可申者、多以申云、此儀出來ハ、後日可參御歟、非急事之故也、重仰云、故院被仰云、我出家以前諸社祭日立幣、而神事極大事也、不可行給神事者、奉此仰後、神今食例幣之時、或熊野詣、或行佛事、已經年序、而今度忌例幣者、自今以後神事之日、可忌佛

祭式

事歟如何、重可量申、人々申云、其儀ニ候バ、凡不可此定候也、〇中略猶如此大神事日、不可御寺中歟、凡雖不令憚神事給、爲御用心也、被奏此者、後无左右仰、大略不可被忌歟、此事難申事、敦光朝臣云々、

〔園太暦〕延文二年十二月五日乙亥、時光朝臣神事中、輕服之人參內有無尋事、〇中略

抑輕服人、月次祭已前如御沙汰參內先例候哉、不可然候歟、御神事中モ陣邊ナドマデ參ハ、先例モ候ヤラン、咫尺龍顏、尤可有憚候歟、不思寄候哉、御參上不可有苦候哉、先々儀不審存候、兼又僧中吉服事可爲宣下候歟、但近年人々所存不然候、此事候、先々未觸耳事、曾無才覺候、僧中者存知人モ候ハント覺候、可被尋聞食候歟、謹言、可令吉服出仕給、如此仰旨歟、不可有子細候哉、被示下候者畏存候、以此旨可令洩申給、時光頓首誠恐謹言、

十二月五日　　時光

丹後守殿

〔建內記〕嘉吉三年六月十日甲午、四條新中納言隆夏卿來臨、明日月次祭神今食可參行、爲訪其間事云々、官女有服者可有憚歟、仍示子細、懸腰於沓脫申承云々、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀六月十二月十一日月次祭儀亦同〇下略

〇按ズルニ、儀式ノ文ハ、祈年祭篇ニ載セタレバ就キテ看ルベシ、

〔本朝文粹二意見封事〕意見十箇條　　善相公清行

一應消水旱求豐穰事

朝家每年二月四日六月十一日十二月十一日於神祇官立祈年月次之祭、〇中略其儀公卿率辨官及百官參神祇官、神祇官每社設幣帛一裹、清酒一瓮、鐵鉾一枝、陳列棚上、又社或有奉馬者焉、祈年祭一匹、月次祭二匹、亦皆左右馬寮率列神馬、爰神祇官讀祭文、畢以件祭物頒諸社祝部、奉本社、祝部須潔齋捧持各以奉進、〇中略

延喜十四年四月廿八日、從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事、

〔西宮記六月〕月次祭

延喜十六年六月十一日、自左近陣發遣伊勢使事、

同十七年六月十一日、臨時幣使在月次祭明旦、仍付伊勢幣於彼使事、

上卿著神祇官北門內東腋、西面、王大夫在同門外、外記在西腋、召史問供神物具否由、外記申代官、上卿著廳、大臣南面、入自北戶納言入自東著西面、豫置式筥、王大夫著、无王大夫用他氏、入自西置東面、上卿召召使、召召使、二人立艮壁外壇下、同音稱唯、又經東屋幷倉後立庭中、唯出、上卿云、式乃省遣刀禰奉入、乃召使唯、出南門召之、式部唯、辨史諸大夫著座、入自南門、神祇官掌云、申祝詞、祝師下自西廳著祝座、本官人皆著木綿、次上卿以下著壇下薦座、南舍座人皆著□砌下座西著砌內、申祝如例、在式御巫廻覽幣物、三人出自西屋、始自伊勢宮三百餘所、史二人持簡召諸祝、遠社幣納官庫、朝集使入京日可付送、祝等分幣、上卿退□次々退、

〔江家次第七六月〕月次祭廢務、於神祇官行之、

神祇官率御巫著西廳

上卿著神祇官北門座

大臣參者、著門內西腋東面云云、參議以上者、著門內東腋西面、王大夫座在外、外記在外西腋、史生外記北、

群官著南門外西腋幄、上卿著北門東腋、先立座南一揖著座、又揖西面、

外記申供神物辨備畢由於上卿

西宮記史申云云、然而北山抄、幷近代例如此、

若有不具諸司者、外記申代官、

上卿著北廳座、兼置式筥、

大臣者入自北面東戶、著東第三間北壁下座南面、參議以上入巽角、著東第一間、西宮記南面、北山抄西面、

青縹書勘物西面北上

延長二年伯安則申、先例大臣入自西戸、納言入自東戸、參議入自東壁下云云、而儀式及先年例、納言入自巽角、王大夫入自坤角、著西第一間東面、或用代官、

上召召使二聲

召使稱唯參立、二人立艮壁下壇下、同音稱唯、一人經東屋井倉後立庭中、上宣、式乃省刀禰奉入禮止宣邊、召使稱唯出召之、式部唯

式部省率群官、入自南門、著南屋座、東上北面、五位前、六位後、入門間、辨在式部輔上可尋、

御巫坐西廳前座

左右馬寮各引馬二匹、立刀禰殿東庭、

神部祝部等、入立西廳南庭、

神祇官人降座

次上卿以下、降著廳前庭、雨儀砌上敷薦、南屋辨以下亦同著砌下座、

中臣進宣祝詞十段度別祝唯

其詞在式

中臣退

上卿以下拍手、雨段不唯各復本座、祝還座、

御巫廻見幣物三人出自西屋、始自伊勢三百餘所、

史二人持簡、召使諸社祝次第班幣、雨儀立砌上

遠社幣物納官庫、朝集使入京且可付送之、

訖史申其由

上卿以下退出

近代上卿立伊勢幣後、令召使觸辨諸社幣慥可頒由退出、

自左近陣發遣伊勢使延喜十六、六、十一、

臨時幣使在月次祭明旦、仍付伊勢幣於彼使、同十七、六、

延引停止時、於建禮門前行大祓、更仰上卿令勘日行之、(中略)延長七〇中略上卿辨外記史皆穢、仍於門外行事、不著齋院、貞觀十八〇中略致闕怠辨少納言、令侍從傳給祿、康保二、七、十七、

〔公事根源六月〕月次祭　十一日

是は先神今食以前、上卿神祇官の北門の內東の腋に著て、供神物具否をたづぬ、次に廳につきて事を行ふ、神祇官官掌祝詞を申、祝師祝の座につく、本官の人みな木綿をつけたり、上卿壇下の薦座におきて、御巫幣物をみる儀あり、

〔西宮記十二月〕月次神今食事

承平六年十二月十一日、依例於神祇官有月次祭事、但差副神祇伯從四位上忠望王、卜合令賫臨時幣參向伊勢、其儀中納言扶幹參奏宣命之後、向八省行事、內侍裹幣、午二剋、陰陽寮勘申中臣忌部給幣了、王參給宣命退出云々、

〔中右記〕天永二年十二月十一日、依分配參勤月次祭、巳刻著神祇官北門座、東腋內座召使置式、披見之處、神今食式也、早返給可進月次祭式之由仰之處、件式近代缺了者、雖然可置祈年祭式之由仰下之處置件式、是依爲同事也、召外記問諸司、王大夫未參、早々可催之由仰下了、又召史俊兼問幣物具否、各皆具了、但祭主卿未參早可催者、藏人辨雅兼參入、祭主親定卿參入、但王大夫等參、而相尋之處、外記申旨頗有不定氣、仍差使尋大外記師遠之許、月次祭主王大夫有不參例者、早可勘申者、頃而少外記兼職申云、大外記勘申云、治安四年二月四日祈年祭、王大夫不參、仍以神祇權少副卜部兼忠爲代官也、祈年月次是同事也、尤可被准行者、次可申代官之由仰外記之處、頗有不案氣、予起座經北廳東壇上、著廳中東座、西面王大夫代神祇權少副卜部兼宗著西座、東面次祭主親定卿依爲三位來著予下座、同西

面、頗絕席、祭主三位座、此間頗無一定所、彼後一條院御時、輔親卿以後無三位祭主間、久不見件座之故也、但案式云、參議以上西面、仍予今日可著西面座之由所諷諫也、則著了、次予召召使、二聲召使立庭中、予仰云、式省サヲ刀禰入口、召使稱唯、卽式部以下參著、祝師下居庭中、木綿纏頭、左官人皆可纏頭、近代祝師一人纏頭、失之由、見永承三年六月十一日大宮右大臣殿御記也、予幷祭主等下居砌下座、祝師讀文、御巫廻庭中見幣物、伊勢幣使立、祭主卿、次予歸著本座、此間漸給諸社幣、本官史申幣分了由、予起座退出之間、出北門程、王大夫初參來、召外記問遲參由、所陣申頗不當也、昨日行向西山、只今歸洛者、但昨日蒙催、前後相違、大略不覺者歟、仍免了歸家、

永久六年〇元永元年六月十一日、天陰雨下、午後天晴、依勤月次祭、本民部卿分配也、有所勞不被出仕之間參勤也、入從郁芳門幷神祇官北門、著東腋座、以召使召外記問諸司參否、申皆參之由、又以召使事具了歟由尋辨許、辨在南門、右少辨師俊勤之、歸來云、申幣物具了由、予起座就北廳座、回東壇上著西面座、王大夫入從西一間著座、東面予召召使二聲、稱唯來南庭、仰云、式省ヲ奉入ト宣ヘ、召使稱唯、出南門召之、右少辨以下著南屋座、予幷王大夫以下居、依雨儀敷座於壇上、祝師著庭中座、讀祝詞、了上卿以下拍手、御巫子廻伊勢幣案三回、伊勢幣出從東門、伊勢使坐前庭圓座、了上卿歸著本座、本官史來申幣分了由、以召使諸社幣慥可分給之由仰了、則起座退出、向八神殿前、出入時如此、

大治二年六月十一日己巳、月次祭於中院所被行也、左兵衞督實能卿、右少辨師俊、右少史俊重著行云々、依院宣如法被行、諸國雜掌交取幣云々、　十二月十一日丙寅、午時爲參勤月次祭參仕、入從待賢門幷中和院南門、著北門內西腋座、東腋ニ座ヲ可儲歟、神祇官燒亡之後、月次神今食被移此中院也、〇中略中和院無北門、仍南門儲上卿座也、而西腋如何、猶依神祇官儀、上卿座可用東腋間歟、又神祇官人座可敷西屋也、今東屋也如何、但去六月神今食時如此、令定尋舊跡被沙汰歟不知例、只所見之相違也、若神祇官修理時、月次神今食被用中和院云云、可尋知彼時事歟、但西屋被用神祇官座事歟、是彼官人可向東方事也、〇中略

裏書、後朝以史俊重問大夫史云、月次祭以東屋爲神祇官座也如何、猶可用西屋事歟、大夫史返事云、被仰下旨尤可然也、去六月之時、實能右少辨宗成參勤也、件日不被沙汰、所記置也、是無指證歟、少納言忠成參入云々、

〔愚昧記〕仁安三年十二月十一日、依月次祭、申刻參神祇官、下自郁芳門著北門內東腋、西面兼置式筥、南地敷諸司軾、予(藤原實房)自南方著之、此座或南面敷之、次召召仕、二音召仕參入跪南地、予仰云、外記召セ、外記參軾、予問云、諸司ハ候哉、外記申候由、仰云、候セヨ、次令召使相尋幣物相具否之由於行事辨、召使歸來云、已具了者、仍起座廻東方昇東妻著座、兼置式、第二間西面敷之、此座或一間南面敷之、或入東戶著之也、王大夫入西戶著座、東面次召召使、召仕立南庭、予仰云、式ノ省ヲ、刀禰奉入ト宣ヘ、召使稱唯退出、出召之、辨式部省參入、著南舍座、左右馬寮引立御馬於庭中、次神祇官降居西廳前、次予幷王大夫同下居壇下座、南面次祝師著座讀祝詞、了拍手、二段次御巫廻伊勢幣、三度、依幼少人把之廻、次伊勢幣請取出東門、齋主相從出之次予幷王大夫歸昇著座、撤春日幣之後退出、藤氏爲上卿之時如此、抑以召仕諸社幣慥可分奉之由示辨了、左少辨爲親也諸社司等可著本官人後座也、仍左少辨可著座之由加催之處、難澁不著、是每度如此云々、又稱幣物不仕之由不請取云々、然而後日可有沙汰之間、忽不力及歟、早可請取之由、可被下知之由示辨了、隨又請取了、抑欲昇降之時、向八神殿方小揖之西ニ東面社等也、

嘉應元年十二月十一日、風雨、及晚風休雨頻下、〇中略昨日光雅示送云、月次祭新大納言分配也、而爲仁王會檢挍、早可參勤者、申可參之由了、仍未時許沐浴、卽著束帶、而陰陽師遲參之間、申刻許解除了參神祇官、於郁芳門欲下車之間、召使來向云、此門北腋下女生產云々、然而不可爲穢之由云々、仍行事辨幷官人等參入已了、予云、不可爲穢之由法家所申歟、又慥被仰下候哉、答曰、然也、仍參入自此門、著神祇官北門東腋座、西面自南方著之、南地所司置軾、召外記令召使召之問事具否、依申皆具了由、欲著廳之間、左少辨爲親就軾云、外宮御馬斃之由、先日進宮司解狀云々、而付月次祭使、可被獻御馬歟旨、右少辨日來申

沙汰云々、而未一定、仍尋遣藏人少輔許了、返事未到來候、予答云、暫可相待、兼日可有一定事歟、已黃昏欲暮尤不便、又云、先々雖雨下、猶被用晴儀云々、何樣可候哉、伯朝臣申云、年來之間、此祭雨儀未見給、先年六月祭日、忽雖暴雨、卽晴了、仍不用雨儀云々、予答云、貞觀年中始行雨儀禮云々、其後又有此例歟、而何甚雨之中强可行晴禮哉、早可改雨儀歟、爲親諾云、其儀何樣可候哉、予依不覺悟、取出次第（故殿御次第也）令讀聞了、件儀見□□□記仍不輕耳、已依黃昏令召使雖□可立明之由、主殿寮依申未參之由、暗然而在門腋、良久道擧庭燎、抑御馬事相尋之處、未承左右之由、左少辨所答示送也、于時亥刻歟、或云、辰一點、參議已上著廳行事云々、而今及此時、神事違例在今日歟、小時史某來云、御馬如例可被奉繫飼御馬、於□御馬者、撰日次追可被引獻云々、仍著北廳行事、其作法如恒、且見二月祭記、仍不委注、

〔顯廣王記〕安元三年六月十一日己卯、月次祭幣於北舍裹之、依柏殿燒失也、上卿新大納言實定卿、

〔百練抄（十六後深草）〕寶治元年七月十一日被行月次神今食、月次祭上卿大宮大納言（公相、本分配、）辨權右中辨親賴朝臣、本官使長氏、（○中略）上卿已下參向神祇官、使發遣以後、主上出御南殿、大宮大納言（公相）奉抱、攝政令扈從給、頭中將雅家朝臣取御劒先行、雅家朝臣獻御笏、次御拜、攝政令扶持給、職事祇候、

〔康富記〕應永八年六月十一日己巳、今夜月次神今食也、上卿中納言源光顯卿、參議源通守朝臣、少納言菅原言長朝臣、左少辨藤原重房、權大外記□□新少史安倍盛久、官掌召使行嗣、使親雄王、忌部親憲、內侍已下參官、酉刻著朝衣帶劒參官、于時無其人、其後盛久親憲行嗣等參官、少時上卿次辨次參議少納言參官、先是左少辨著北廳（西第二間東面）史（北一間南面）官掌史末（西上南面）忌部（南三間、北面對史、）幣裹也、頃之史起座進辨前、覽木工寮請奏、其儀如常、幣裹畢、

幣裹之時、辨遲參之間、不待辨史官掌忌部先著北廳幣裹、其後辨參官之間著座、辨著座之時、史官掌忌部□□動座、辨著座之後歸著之、

次上卿著北門內東掖座（西面）次□□著同門外西掖座（東面）兼置式筥於上卿前（右方、此式筥以使部可置也、）次上卿召召使（二音）召使進上卿前平伏、上宣、外記召（セ）、召使稱唯、右廻召外記、了揖立座進候軾、上宣、諸司候（ヤ）、申云候、仰云、令候（ヨ）、□□稱唯退、右廻歸著本座、次上卿召召使召辨、辨未被進以前上卿被立座、

今夜代官被略之、近年例也、

次上卿被著出居座（北廳南壇上南面）□□著出居座（南面東屋前座）北座、以前上卿雖可被著北廳（第三間南面）北廳既爲神殿御裝束之間、北廳座被略之、直被著出居座畢、仍□□又直著出居座者也、參議少納言辨史著南廳出居座、次伊勢幣發遣、上卿已下平伏、諸社幣諸社等請取之、　廿九年十二月十一日甲子、月次祭幷神今食也、予月次分配也、（○中略）予沐浴著朝衣（帶劒平緒丸鞆如常）參神祇官、于時無人、（酉刻）南廳代幄未打、總而公人一人不見、早參之至也、（○中略）月次祭如例、但上卿被入北門之時、不下裾被過、予存出立之儀、雖構之曾無其儀、予式筥於北門置之、上卿先召外記問具否、次召辨被問幣物具否、了著座如常、御幣發遣之時、出居座上卿不被平伏、予一身平伏、頃之上卿被平伏了、予著座北廳簷東外、上卿座通南面也、是出居座也、無東舍代之間、不著東舍代者也、

寶德三年六月十一日癸未、月次祭也、上卿權中納言藤原隆遠卿、左中辨同親長朝臣、外記康顯（本分配三）、（藤康純也、相代參之、）史康純、官掌親秀、召使秀國、內侍等也、（○中略）先有幣裹、辨史官掌忌部等著北廳如例、史不覽請奏、如何哉之由辨被尋之、失念不用意之間遂不覽申之、拜前請奏覽辨之由見正和御記了、木工寮請奏トモ云也、（木工寮出之付史云々、覽申辨、辨被返下者也、舊例兼日、辨被覽申一上云々、）式筥北門上卿前令置之處、可置北廳之由上卿被仰之間、康顯奉談少納言、申云、置北門之上者、重不可置北廳歟云々、上卿重仰云、北門或召使取之、又置北廳之條定儀也云々、如江次第者置北廳之由見了、置北門之儀不見之、但近例置北門之條既爲法例歟、雖然從上宣、今夜北門之式筥、召使秀國取持參、昇北廳置上卿前者也、又於北門召外記仰云、幣物具否事、被尋辨之由被仰之、康顯申云、召辨被尋幣物具否、不然之時以召使被尋申辨歟、强外

祝詞

記不爲御使之由返答、上卿重仰云、只可尋辨也、外記重申云、以召使可傳申者、上卿仰云、兎毛角毛云云、仍康顯退軾、以召使此由傳申辨、辨返答之趣、召使直歸參軾、申上卿了云々、式筥兼令置之、御疊事、前者少納言、中者外記、末者史康純也、爲年少之間、笏懷中之、此疊事如舊記者、平サマニ舁歟、給事中此儀ヲ被執之、雖然近例先竪ニ側テ可舁之由、去年十二月月次祭時被談了、

〔延喜式祝詞八〕六月月次十二月准此

集侍神主祝部等諸聞食登宣

高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以、天社國社登稱辭竟奉皇神等前爾白久、今年乃六月月次幣帛、十二月者、云今年十二月月次幣帛、明妙照妙和妙荒妙備奉氐朝日乃豐榮登爾皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

大御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、神魂高御魂生魂足魂玉留魂大宮賣御膳都神辭代主登御名者白氐辭竟奉者、皇御孫命乃御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸閉奉故、皇吾睦神漏伎命神漏彌命登皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

座摩乃御巫辭竟奉皇神等乃前爾白久、生井榮井津長井阿須波婆比伎登御名者白氐辭竟奉者、皇神能敷坐下都磐根爾宮柱太知立高天原爾千木高知氐、皇御孫命瑞乃御舍仕奉氐、天御蔭日御蔭登隱坐氐、四方國乎安國登、平久知食須故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

御門乃御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、櫛磐間門命豐磐間門命登御名者白氐辭竟奉者、四方能御門爾湯都磐村能如久塞坐氐、朝者御門開奉、夕者御門閉奉氐、踈布留物乃自下往者下乎守、自上往者上乎守、夜乃守日乃守爾守奉故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

生島乃御巫乃辭竟奉皇神等乃前爾白久、生國足國登御名者白氐辭竟奉者、皇神乃敷坐嶋能八十嶋者、谷蟆能狹度極鹽沫乃留限、狹國者廣久嶮國者平久、嶋乃八十嶋墮事無久皇神等寄志奉故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

祭日及時刻

辭別、伊勢爾坐天照大御神乃大前爾白久、皇神乃見霽志坐四方國者、天乃壁立極國乃退立限、青雲能靄極白雲乃向伏限、青海原者棹柁不干舟艫乃至留極、大海原爾舟滿都都氣氐、自陸往道者荷緒結堅氐、磐根木根履佐久彌氐、馬爪至留限、長道無間久立都都氣氐、狹國者廣久峻國者平久、遠國者八十綱打掛氐引寄如事、皇大御神寄志奉良波、荷前者、皇大御神乃前爾如橫山打積置氐殘乎波平聞看、又皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸閉奉故、皇吾睦神漏伎命神漏彌命登鵜自物頸根銜扳氐、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

御縣爾坐皇神等乃前爾白久、高市葛木十市志貴山邊曾布登御名者白氐、此六御縣爾生出甘菜辛菜乎持參來氐、皇御孫命乃長御膳乃遠御膳登聞食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

山能口坐皇神等乃前爾白久、飛鳥石村忍坂長谷畝火耳無登御名者白氐、遠山近山爾生立流大木小木乎本末打切氐持參來氐、皇御孫命乃瑞乃御舍仕奉氐、天御蔭日御蔭登隱坐氐、四方國乎安國登平久知食須我故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

水分坐皇神等乃前爾白久、吉野宇陀都祁葛木登御名者白氐辭竟奉者、皇神等依志奉牟奧都御年乎八束穗乃伊加志穗爾依志奉者、皇神等爾、初穗者穎爾母汁爾母瓱閉高知瓱腹滿雙氐稱辭竟奉氐、遺乎波皇御孫命乃朝御食夕御食乃加牟加比爾長御食乃遠御食登赤丹穗爾聞食故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登諸聞食止宣、

辭別、忌部乃弱肩爾太繦取掛氐、持由麻波利仕奉禮留幣帛乎、神主祝部等受賜氐、事不過捧持奉登宣、

〔本朝月令四月〕十一日月次祭事

弘仁式云、凡六月十二月十一日月次祭、奉班幣帛、大臣以下集神祇官、如祈年儀、

〔儀式一〕二月四日祈年祭儀六月十二月十一日月次祭儀亦同

其日卯四刻、月次祭、六月卯一刻、十二月辰一刻、所司辨備庶事、

〔延喜式一四時祭〕凡〇中略月次祭、六月十二月十一日、

十一日

〔公事根源六月〕月次祭

これは六月十二月に二度諸社へ御幣を奉らせ給ふ事也、

〔三代實錄清和三〕貞觀元年六月十一日乙未、月次神今食祭、十二月十一日壬辰、月次祭神今食祭如常、

〔三代實錄光孝四十九〕仁和二年十二月十一日乙卯、月次神今食祭、

〔日本紀略四上〕應和元年六月十一日癸亥、月次祭、

〔日本紀略十一條〕寬弘元年六月十日癸卯、月次神今食也、

○按ズルニ、十日月次祭ハ異例ト云フベシ、

〔年中行事秘抄〕諸祭刻限

六月月次祭

卯四點以前所司庶事辨備訖、辰一點參議以上、就座始行事、十二月亦同之、

以前右大臣宣、永以爲例、

弘仁十四年十二月廿八日　　少外記都宿禰廣田麻呂奉

祭殿

〔年中行事秘抄六月〕十一日月次祭事

或於中院行之、有行事、

〔三代實錄清和三〕貞觀元年六月十一日乙未、月次神今食祭並於神祇官行事、親王公卿參會所司供事如常、

〔三代實錄清和九〕貞觀六年六月十一日丙寅、月次幷神今食祭、親王公卿向神祇官奉祭如常、

〔三代實錄清和十四〕貞觀九年六月十一日戊寅、於神祇官修月次祭、於神嘉殿修神今食祭、遣親王公卿奉

延引

祭、

〔三代實錄清和二十〕貞觀十三年十二月十一日壬子、於神祇官修月次神今食祭、親王公卿行事、

〔三代實錄三十陽成〕元慶元年六月十一日庚辰、月次幷神今食祭、公卿向神祇官而行事、

〔百練抄六崇德〕大治二年三月廿日、諸卿於攝政直廬定申神祇官燒亡事、可有廢朝哉否、幷月次神今食於何所可行哉、六月十一日、月次神今食、於中院行之、

〔中右記〕大治二年三月廿日、大外記師遠勘申神祇官燒亡之後可被行事等、〇中略至月次祭神今食者、於中院神嘉殿可被行歟、〇中略神今食月次祭ハ、同人々定申、治部卿被申云、大略同人々定申、但長元長曆之比、神祇官正廳顚倒之間、神今食於中院被行也、依彼例於中院可被行歟、六月七日、頭中將送書云、月次祭神今食、今年於中院可被行也、而件旨可被下宣旨歟、將又只可仰神祇官歟、被尋官外記之處、不慥見由所申也如何、予返事云、件事誠不知例、但神今食月次祭、朝家嚴重神事也、延引停止之時、必被下宣旨也、准彼例猶被下宣旨可宜歟、外記件旨可下知諸司事也、後聞件事右府奉行、仰中院所被行也、〇中略神今食同於中院所被行也、五年六月十一日、月次祭、源中納言顯雅右少辨宗成參勤、神今食左兵衞督實能、右兵衞督伊通、右少辨宗成、少納言忠成參勤云々、神祇官新造後初被行之、

〔三代實錄清和十三〕貞觀八年六月十一日甲申、停月次祭神今食祭、以有穢也、大祓於建禮門前、七月五日丁未、是日修月次祭神今食祭於神祇官、去六月十一日、因穢停止、仍今日修焉、

〔三代實錄四十陽成四〕元慶七年十二月十一日癸卯、停月次神今食祭、大祓於建禮門前、十四日丙午、於神祇官修月次神今食祭、而十月十日內裏人死、今月十日滿三十日之限、十日是在祭前散齋之內、又今月五日豐樂院北人死、故延而行之、

〔類聚雜例〕長元九年六月一日戊申、大外記賴隆令申關白相府云、參著淨土寺之人可爲穢歟、其故者

延喜廿一年六月十一日、故中納言源當時卿、去五月四日薨、六日葬、七日骸骨爲粉入一器、安置東山住僧蓮舟法師私寺屋、而故民部卿道明卿追福法事、以今月七日於道澄寺被修、而彼蓮舟法師參會件態、仍會集上下被穢、彼師參入內裏、依是穢被停月次神今食云々、以七月九日可被行之由被定者、

〔日本紀略四村上〕天德元年六月十一日丙寅、月次神今食、依內裏穢氣幷錫紵事、延引、於八省院東廊有大祓事、四年六月十一日己卯、停月次祭神今食、以內裏有死穢也、於建禮門大祓、七月十日戊申、月次神今食也、內裏依內穢被付諸司、又被副奉伊勢臨時幣帛、

〔日本紀略六圓融〕天祿三年十二月十一日丁酉、月次祭神今食延引、依公卿故障也、十五日辛丑、月次祭神今食、

天延二年六月十一日戊子、月次祭神今食、依內裏穢延引、仍於建禮門大祓、七月九日乙卯、於神祇官月次神今食、

〔日本紀略十一條〕長德元年六月十一日丙戌、月次祭延引、依上卿不參也、十二日丁亥、於建禮門大祓、

依月次祭延引也、十六日辛卯、月次祭神今食、中納言公季勤之、雖爲觸喪不被許仍行之、

〔日本紀略十三後一條〕萬壽二年六月十一日辛酉、月次祭神今食延引、依皇后宮之穢也、十七日丁卯、月次祭神今食、

〔左經記〕長元八年六月八日庚申、參內、頭辨相示云、去七日大內有大死、仍月次神今食等延引、先例有內穢之時、於神祇官被行、而件官屋等去年顚倒後未造立、仍延日於中院可被行之由有定也、頃之退出、十一日癸亥、月次祭使、公家先被祈申大神宮之後、自廿一日可被始行之由所定申也、〇略中今日月次神今食等延引之由、八省東廊有大祓、上右兵衞督云云、

〔經信卿記〕治曆四年十二月十四日、未刻參內、宮內卿左衞門督左兵衞督昨日被參會、傳聞去十一日月次祭使齋主元範宅有死人、而隱申勤仕使役之由、被神祇少副公輔語按察大納言、大納言使左兵衞督洩申公家、公家被驚仰、被召問公輔公輔申云、雖承其由、依无一定所不申也、又被仰檢非違使令拷訊、元範寄宿宅女法師等已不承伏、今朝被問子日御卜之例有軒廊御卜、各占申有穢氣由、仍遣使被停幣使、但被仰宮內卿令勤觸穢幣物可被行例云云、臨昏退出、十七日、僕幷上官等參內、途中右少辨大外記上卿御車過間爲長下立來逢相共參內、于時申一刻、今日被行月次祭幣物觸穢、神今食延引、大祓云云、

〔中右記〕寬治六年六月十一日、月次祭神今食、禁中依觸穢延引、仍其以前御修法護摩加持、如例進御前修之、又重服之人參內也、十九日辛未、有大祓、是月次神今食延引之由也、而或人談云、前々延引之由大祓、雖穢中十一日被行者可尋、夕方治部卿參右仗座、被奏月次神今食日時、來廿五日丁丑、月次神今食被行、

長承四年〇保延元年六月十一日、月次神今食也、

月次祭右衞門督實能神今食新中納言顯賴右宰相中將公教、

〔吉記〕承安三年七月五日丙申、今日被行月次祭、依神祇官穢延引、〇略中入夜被行神今食、上卿中御門中納言、參議新宰相、少納言信季、左少辨兼光等行之云々、

〔顯廣王記〕安元二年六月十一日甲申、月次祭神今食、依內裏穢氣延引之由被仰下、觸事諸司了、件穢去八日、法住寺殿池小童一人落入死去云々、終夜有沙汰、被定穢氣了、下宣旨延引月次祭神今食了、

〔玉海〕文治四年六月一日乙丑、神祇官人卜部兼基參上申云、神祇官西院有穢物小見已卅日穢也、御體御卜月次神今食皆以不可叶、今日爲御卜參官之間、官人等觸穢之故也、此事宗隆所傳申也、仍直奏此由、且可尋例之由、便仰宗隆了、二日丙寅、晚頭宗隆來申云、神今食事奏聞之處、任先例可計沙汰之由有院宣者、〇略中入夜進外記勘申月次神今食七月被行之例、仰云、延引之由早可宣下者、三日丁卯、月次神今食延引事、宗隆宣下了、七月六日庚子、棟範來申條々事、御體御卜、來十一日可被行

之由外記所申也、神今食月次祭等十二日可被行、（陰陽師勘申一二兩日也）其故御體御卜、多在神今食之前之故也、神今食不延引、御體御卜許被延引之時ハ、神今食以後被行御卜奏例也、於其延引之時者、猶被先御卜奏云々、

（百練抄十六後深草）寶治元年五月十九日辛未、依關東將軍室家他界事、天下觸穢、可至來月十三日之由被仰下云々、廿七日、穢中事猶不定、但於御靈會者、寬治六年雖穢中猶被行之由外記雖申之、件度月次神今食延引畢、六月一日、可爲穢之由猶依被定、仰月次神今食可延引之由、爲經俊奉行被宣下、七月十一日、被行月次神今食、

（園太曆）康永三年十二月十一日丁卯、月次神今食、依禁中穢延引云々、廿三日己卯、藏人勘解由次官朝房、爲勅使入來、予咳病無術之間不謁、以守賢朝臣問答、月次祭事也、予申詞注出授之、本儀職事可書也、未練不合期歟、仍注出與也、月次神今食可爲來廿六日之處、立春以後發遣之例不候云々、以祈年祭次可被付行之由、載事書幣使令申間、被相尋匡遠清澄之處、兩樣所見不分明之由申候、可爲何樣哉、

今月月次官幣發遣事、節分以後被行之例不存知之處、如承者被尋外記候云々、御左右何樣候乎、縱以來廿六日雖爲發遣路次越年又以違先規候歟、若年內可被行者、今明日之間可被遂行歟、將又以祈年祭之次可被行者、非無先例歟、兩箇之間急速可有申沙汰候哉、

月次神今食事已及月迫、先規誠不審而以祈年祭次發遣月次祭幣物、非無先規之由雖載幣使事書件例分明不覺悟之由、匡遠清澄令申者、神官所申又難偏信、來廿六日縱雖爲吉日、不被行今年神事、空踰年之條神慮難測、路次越年者無處于彼勘例歟、當年發遣尤大切歟然者不擇日之吉凶、明日被發遣之條可然歟、（略中）先規不分明者、就新儀雖立春以後可被行月次祭之條、可在時宜矣、廿六日壬午、今日月次神今食、（略中）右衞門督向神祇官、行月次神今食云々、

貞和三年六月十一日壬午、月次神今食、依武家產穢延引之由被宣下云々、廿二日、抑月次神今食延引、六月中者常事也、及次月之條不審之間、相尋匡遠師茂清澄等處、注送先度所申無相違歟、

六月月次祭神今食延引及七月例

康平五年七月三日、式日依內裏穢延引、以七月廿一日可祭祀之由、同廿九日被宣下之（但七月延引、九月廿五日被行之）

天喜元年六月十一日、依有穢氣延引、

治承四年六月十一日、延引、七月九日被行之、

文治四年六月十一日、依本宮穢延引、七月十二日被行之、

寶治元年六月十一日、依關東穢延引、七月十一日被行之、

文永六年六月十一日、依內裏穢延引、七月十一日被行之、

永仁三年六月十一日、依同穢延引、七月十二日被行之、

元弘三年六月十一日、月次神今食延引、依天下穢也、七月十二日被行之同四年六月十一日、月次神今食依無使延引（或祭主）七月三日被行之、

貞和三年六月廿二日、

七月廿五日乙丑、今日月次祭幷神今食、竹林院大納言參行云々、四年十一月十三日丙午、依法皇（花園）崩御穢、諸社延引宣下事、頭長顯朝臣尋事、（略中）

去十一日、依太上法皇崩御、穢氣廣及天下、今月諸祭宜令停止、賀茂臨時祭及月次祭神今食等、穢限以後擇吉日行之、

若如此可候歟、賀茂臨時之祭幷來月月次神今食事モ、如此可被宣下歟、ト存候、是ハ重事候歟、尤可被申談執柄候歟、

十二月一日、藏人辨俊冬爲勅使入來、今日御贖物忌火御飯穢中可爲何樣哉云々、○略中　其外猶不審之間、相尋兼豐宿禰之處、請文到來續之、○略中

被仰下之旨、謹奉候畢、○略中　去月中諸社祭事雖被停止候、於月次神今食者、穢限已後、若被勘日次、任代々例可被行候歟、然者發遣覃月迫候者、本宮之儀及明春可爲違例候、發遣相當六箇日候、相當口于本宮之儀候之故也、○略中

十二月一日亥刻

十一日、月次神今食依穢延引、先日宣下云云、

貞和四年十二月三日宣旨

月次祭神今食、依觸穢延引、任例令行大祓者、　藏人頭左近衞權中將藤原定宗奉

〔園太曆〕文和元年十二月十一日庚戌、今日月次神今食延引云々、元來勢州道路難參之間、伊勢奉幣難通歟、其上陽祿門院○光嚴后、文和元年十一月崩穢氣遍滿天下、不能左右、

延文二年十二月十一日辛巳、月次神今食、又不及沙汰歟、　廿六日丙申、傳聞、今日被發遣月次祭幣、○中略上卿松殿大納言、辨親顯朝臣、

○按ズルニ、上文文和延文兩度ノ延引ハ、共ニ兵亂ニヨリテ、奉幣使ノ參向シ難キニ由レルナラン、

〔園太曆〕延文四年六月十一日、月次祭幣料闕如、又延引也、定例年等式歟、不便不便、　十二月十一日庚午、月次神今食延引、幣料無足之故云々、　廿七日丙戌、傳聞、月次神今食、今日被行之、坊城中納言奉行云々、

〔續史愚抄後小松〕應永二年六月十一日癸酉、月次祭神今食等延引、內侍申障故也、蓋有不參被行例、今食、中宮女房土佐局、爲內侍代參向、天治元年六月神此外延喜及堀河院御宇被用代云、

〔康富記〕嘉吉二年九月廿五日壬午、去六月十一日月次祭神今食等延引、于今不被行、又今月十一日例幣延引不被行之間、大藏省年預判官員弘等令申於管領、月次祭用途同被付足充云々、例幣者自元今月中可被行之由爲叡慮、被仰遣武家、致用脚之沙汰云々、所詮月次祭例幣、同日被付行例被尋下之處、清外史局務外史等、無所見之由注進了、官務晨照宿禰、天承元年四度幣一度被付行之例候之由注進申云々、傳奏招清史被糺決之處、天承元曆記已下所載者、四度幣各式月被行之上者、被付行之例不可在也云々、此分重招官務被尋之處、天承例任所見注進了、相違條不存知云々、注進楚忽之至極之由人々傾之云々、又四箇度幣トハ、祈年月次例幣新嘗、此四箇度事なるよし、官務口傳之由被申之云々、清史等不審事也云々、祈年例幣六月十二月月次兩度加テ、四箇度幣トハ可申歟、新嘗ハ御幣發遣之儀無之者哉、返々不得其意之由密々被話候、　卅日丁亥、是夜被行月次祭幷神今食者也、去六月十一日依無用脚令延引畢、例幣以後月次祭被行哉、先例被尋候處無所見候間、於例幣者來月可被行也、仍先被發遣月次御幣使者也、延引之間先於陣被勘日時也、上卿權中納言隆盛卿、職事權右中辨俊秀、外記親種、史員職等參陣、

〔建內記〕嘉吉三年六月十日甲午、四條新中納言隆夏卿來臨、明日月次祭神今食可參行、爲訪其間事云々、○略中　新少納言來云、延引云々、　十一日乙未、月次神今食總用內五千匹、武家先下行之、其外未事行、仍延引云々、三合之年厄尤可有臨時之御祈、結句恒例神事退轉有其恐事也、

〔康富記〕嘉吉三年六月十一日乙未、月次祭神今食延引、御料足無之故云々、

文安四年十二月廿八日丙戌、今夜月次祭神今食也、今月十一日延引、先於陣被勘日時者也、○略中　月次祭立春以後被行例、局務被注進申之故被行云々、

寶德元年十二月廿六日辛丑、月次神今食也、式日依內外宮合戰事、通路不叶仍延引、依爲他日、先被勘日時者也、

享德三年十二月廿一日戊戌、是夜月次神今食也、式日依無要脚延引、○中略抑九月例幣未被行、雖然依有先例、

停祭

月次神今食被行之、

康正元年十二月十一日壬子、月次神今食延引、武家用脚未被沙汰出之故云々、

〔三代實錄二十七清和〕貞觀十七年十二月十一日庚申、停月次神今食祭、先是今月六日、左近衛府人死、神祇官染汚其穢、大祓於建禮門前、

〔三代實錄二十九清和〕貞觀十八年六月十一日丙辰、停月次神今食祭、以內裏有穢也、大祓於建禮門前、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十二月十一日庚寅、停月次神今食祭、以太上天皇〇清和崩日近也、

〔三代實錄五光孝〕仁和三年六月十一日癸丑、禁中有孕婦胎傷穢、由是停月次神今食祭焉、十四日丙辰、去十一日依例可修月次神今食祭、內裏有婦人胎傷之事、仍隨停止、但胎孕之後未三月、是以今日欲行月次神今食祭之禮、以內藏寮忽人死、大祓於建禮門前、以停祭事、

〔日本紀略五冷泉〕康保四年六月十日丁卯、奏明日月次神今食可停止、依先帝〇村上御穢中也、十一日戊辰、於八省院大祓、依月次神今食停止也、

〔日本紀略十一條〕長保元年十二月十一日庚申、月次神今食停止、依太后〇冷泉后昌子崩也、猶有廢務、

〔日本紀略十三後一條〕寛仁元年六月十一日戊寅、停止月次神今食、依太后〇圓融后遵子崩也、又於八省院大祓、萬壽四年十二月十一日丁丑、月次祭神今食等、依入道大相國〇藤原道長薨、被停止畢、仍有大祓、

〔小右記〕萬壽五年〇長元元年十二月一日辛酉、早朝藏人辨資通傳關白命云、於堂相逢外記賴隆申、月次神今食、依穢付神祇官被行、亦過穢被延行、又依穢停止等例、此間何樣可被行哉報云、天慶元年犬死穢兩度停止、同三年依內膳司死穢改日被行、件同三年例可相合歟、但者廿八日死人、廿九日曉取棄其穢、及廿九日歟、若依被延行例、去卅日可被行、然而寅日不可被行神事歟、又廢務日者不可被行他事、追儺儀被行歟、依輕穢有停止例、依死穢被付神祇官之例、不載件勘文、抑又可有勅定、若不被行、可有大祓歟、

職員

○按ズルニ、此月終ニ行ハレズ、停止セラレタリ、

〔左經記〕長元元年十二月一日辛酉、藏人辨資通奉仰、今月神事等依穢被停止、并付神祇官被行之例令勘云々、二日壬戌、藏人辨云、昨日依殿御消息參右府、申可被行今月神事等哉否之由、有大外記賴隆眞人勘文、被申云、如勘申或付神祇官被行、或延日被行、或被停止、但此度延日被行無遺日、付所司被行之、此度皆是丙穢也、猶於此度被停止有何事者云々、三日癸亥、參御堂、藏人辨云、殿仰云、於穢之甲乙丙、所忌皆無差別、但依觸穢可停止神今食月次祭大神祭等之由、奏事由可仰下也、但未被行大祓以前、明日御讀經不可被行者云々、

〔日本紀略十四後一條〕長元元年十二月十一日辛未、月次祭神今食停止、依內裏穢也、

〔園太曆〕觀應元年十二月十一日壬辰、今日月次祭依路次難義停止云々、如此先例尤可被尋沙汰歟、

二年六月十一日、今日月次祭、勢州神境爲敵陣難通幣使仍不及沙汰云々、

延文元年十二月十一日丁巳、今日月次神今食不被行、近年之例也、去春仗議無益歟、

〔建內記〕嘉吉元年十二月十日壬寅、藏人右少辨敎忠入來、〇略、申明日月次祭、依要脚事大略不可被行歟云々、所驚入也、停止分已及御沙汰云々、延引之分先可然歟、此用脚事、近年洛中土藏致其沙汰而依當年德政之沙汰、土藏等損失之間免除云々、其外武家無用途、無力次第云々、四條中納言隆夏卿入來、月次祭進退事談云々、

〔續史愚抄後土御門〕文正二年〇應仁元年六月十一日乙巳、月次祭神今食等不及沙汰、依合戰也、

〔延喜式十三大舍人〕凡六月十一日、供月次祭所小忌官人二人、五位一人、六位一人、向神祇官、日中小忌人等向宮內省、卜食若有不合者更差定數、

〔延喜式三十宮內〕凡六月十二月月次祭所參五位一人、六位已下官人一人、

〔神祇官年中行事六月〕十一日月次祭、使祭主出居官人等次第、同祈年祭、

〔夕拜備急至要抄上六月〕一月次祭十一日

上卿分配　辨同　官外記

〔北山抄一二月〕四日祈年祭事

延長四年十二月月次祭、外記史皆觸內裏穢、仍用代官、

同七年十二月、辨史皆觸內裏穢、仍用代官、

天曆十年六月月次祭、伯勘事、無五位以上副、依無代官例、免忠望王勘事、令分行諸社幣畢、

〔江家次第七六月〕月次祭

辨史穢用代官、延長七　外記穢用代官、延長四〇中略　伯勘事、五位以上副無之依無代官例免伯、天曆十〇中略　以大炊頭爲辨代、天曆三、二、

〔小右記〕長和三年六月十二日丙寅、大外記敦賴朝臣云、昨日新中納言行月次祭事、依他上不參、又行神今食事、

寬仁二年十二月十一日己亥、宰相來云、可參月次祭、又可參神今食、依合御卜者、月次神今食等作法面示了、拜參議之後今日初神事上、仍官掌一人召使二人給饗祿等、匹絹　宰相著月次祭、從神祇官可參內、仍遣官掌召使於宅、可令給饗祿者、

〔左經記〕寬仁三年十二月十一日癸巳、臨夜參神祇官、爲行神今食事也、外記惟孝云、月次祭上卿申障不被參、仍依攝政殿仰、雖催諸卿、皆申障不被參、仍有仰、左中辨爲上卿代被行祭事、　四年六月十一日辛卯、天晴不他行、月次神今食祭等如常云云、今朝辨侍久江申云、月次祭分配左少辨、依服身不被參、又神今食祭先例合卜之人被參、而今諸辨皆有故障、唯右少辨幷余二人無障、先例有一兩人之時不卜、仍神祇官卜上卿不卜辨、若朝祭夕祭之間、一事可勤歟者、余仰云、尤可然之事也、但前日右少辨相語云、乍二度可勤者、先觸事由、有障者余可參也、頃之久江來云、右少辨乍二度可勤行之由被申者、

長元元年六月十一日甲戌、傳聞月次祭上卿春宮權大夫及秉燭被參內、被行神今食事云々、早旦參辨以下諸司多以爲歎云々、是不知案內之外記所申行云々、未見聞事也、

〔永昌記〕嘉承元年十二月十一日戊辰、今日月次祭、民部卿左少辨行之、予爲御使、〇中略　辨侍走來云、卜食辨三人、平尙書襪有障、左少丞勤晝祭、爲隆可勤仕之由有勅定、付侍中仲光執奏、年中官方公事一身勤仕、就中至今月者、向春日祭鎭魂新嘗祭、自他分配、況政陣公事如無傍輩、何被除晝祭人有此催哉、一旦欲蒙裁報、仰云、聞食、勤否可在雅意也、然而神宮事何以辭退、忽參神祇官、其儀如例、

〔吉記〕壽永二年六月十一日甲辰、月次祭、上卿內大臣實定公、相府被示送云、大臣參勤雖爲式文之所指、頗幽玄之古儀歟、延喜九年二月祈年右大臣、光天德元年二月祈年左大臣、小野宮正曆三年六月月次右大臣重信、此外近代斷了歟、於身者最吉例也、大納言還任大將拜任、自然相當此祭、最前勤行了、令无相違、歩中槐路上可謂神之冥睠歟、今度三箇度勤行、可然事也云々、　右少辨兼忠奉行之、

〔玉海〕建久二年六月十一日戊子、此日月次祭神今食等也、月次祭上卿權大納言忠良、神今食上卿源中納言通資、辨右中辨棟範兼行兩方云々、少納言平信淸稱遠忌之由、先例依不忌神事仰可參之由、猶法家申不可然之由云々、仰可勘進本文之由、而不注申、依先例仰可參之由、參議各稱障不參、合卜之輩自由對捍云云、

〔百練抄十五後嵯峨〕寬元二年六月十一日庚辰、禁裏有犬產穢、月次神今食可付諸司之由被下宣旨、而上卿已下不參被行、希代事也、後日被謝申云々、

〔園太曆〕貞和四年六月十一日、傳聞今日月次祭分配實守卿也、有故障申其子細爲別勅中御門中納言宣明卿參行云々、

〔薩戒記〕應永卅二年十一月卅日乙丑、未刻許、左頭中將隆夏朝臣來示云、月次祭奉行藏人左中辨房長、依勅勘被止職事、仍俄可奉行由被仰下、可賜符案者、

月次祭、任例可被申沙汰之狀如件、

十一月卅日
藏人中務丞殿
追申
神今食事、同可ㇾ被ㇾ下ㇾ知候也、
月次祭可ㇾ爲ㇾ式日使之事、任ㇾ例可ㇾ令ㇾ下ㇾ知給ㇾ者、依ㇾ天氣ㇾ執達如ㇾ件、
十一月卅日　　左中將
謹上　伯二位殿
月次祭御分配候歟、御參行事可ㇾ承存候也、仍言上如ㇾ件、
十一月卅日　　左中將
進上　權大納言殿
神今食御卜合候歟、御參行事可ㇾ承存候也、仍言上如ㇾ件、
十一月卅日　　左中將奉
進上　藤大納言殿
神今食御卜合候歟、必可ㇾ令ㇾ參向ㇾ給候哉、仍執達如ㇾ件、
十一月卅日　　左中將
謹上　清少納言殿
左少辨殿
已上公卿已下、近代兼行月次祭、仍書禮紙云、
上卿
追言上
月次祭、同可ㇾ令ㇾ存知ㇾ給之由、被ㇾ仰下ㇾ候也、

凡御敎書之樣、人々所ㇾ爲區々也、而分配幷卜合公事等、强不ㇾ可ㇾ爲ㇾ仰、爲ㇾ奉行職事ㇾ相ㇾ尋參否之由ㇾ也、若申ㇾ子細ㇾ者、其時伺ㇾ天氣ㇾ重可ㇾ相催ㇾ之、然者可ㇾ載ㇾ天氣之由ㇾ也、又神今食卜合上卿、兼ㇾ行月次祭ㇾ事近例也、然而私不ㇾ可ㇾ自由、仍仰之由所ㇾ載之也、
十二月八日癸酉、頭中將示送曰、月次祭分配、辨資親申ㇾ所勞之由、仍伺申之處、可ㇾ仰ㇾ後國之由有ㇾ勅答、御敎書案可ㇾ注給者、
月次祭可ㇾ令ㇾ參向ㇾ給者、依ㇾ天氣ㇾ執達如ㇾ件、
十二月八日　　左中將
謹上　藏人辨殿
追申、神今食同可ㇾ令ㇾ存知ㇾ給、卜合輩申ㇾ子細之間、別被ㇾ仰下ㇾ候也、
〔康富記〕文安四年十二月廿六日甲申、局務外史、今月廿日輕服事出來、昨日除服宣下也、藏人權辨被ㇾ申沙汰ㇾ云々、雖ㇾ然輕服中、神事奉行不ㇾ可ㇾ叶之處、月次祭神今食式日延引、明後日廿八日可ㇾ被ㇾ行之由治定云々、今夕藏人權辨親長被ㇾ送ㇾ御敎書、兼日局務便宜之時、月次祭申沙汰事、可ㇾ被ㇾ仰ㇾ康富之由有ㇾ入魂云々、
月次祭神今食可ㇾ爲ㇾ明後日廿八日任例可ㇾ被ㇾ沙汰ㇾ之狀如ㇾ件、
十二月廿六日　　權右中辨判
權大外記殿
追申、日時定可ㇾ爲ㇾ同日ㇾ可ㇾ被ㇾ存知ㇾ候也、
月次祭神今食可ㇾ爲ㇾ明後日廿八日由、謹承候了、早任例可ㇾ令ㇾ致ㇾ沙汰ㇾ候、仍言上如ㇾ件、
十二月廿六日　　權大外記中原康富請文
逐言上

日時定可爲同日之由可令存知候、康富恐惶謹言、

廿七日乙酉、早朝參局務史第奉謁之、〇中略月次祭神今食、局務輕服之間申沙汰事、權辨御敎書昨夕送給候、何樣可申候哉之由尋申候處、此間以便宜職事被尋候間、輕服中雖奉行之有例尙不甘心、幸爲位次之上者、可被仰權大外記之由職事ニ入魂了、請文案可書獻之由被仰染筆給之畏入者也、令語給云、追而書之奧ニ恐惶謹言と、中家輩五位職事ニ書遣之、四位貫首ニハ名字恐惶謹言トアリ、清家樣五位職事にも又四位頭にも、名字恐惶謹言無相違之由被示之、仍如右書給候間如案書之、今日付進甘露寺權辨了、

寶德三年十二月九日癸酉、自頭中將資繼朝臣月次神今食延引例幷參議行事例被尋之間、一紙令注進了、

月次神今食延引、又參議行事等例不審候、キト勘可奉候、謹言、

十二月九日　資繼

權大外記殿

參議行事例

永觀二年六月諸卿故障、參議伊陟卿參勤兩役、

天喜四年六月參議經長卿參行

康平四年十二月顯房公參入此外弘安正安以來近例存之

十日、今日又自頭中將資繼朝臣就月次祭有被尋問事、

月次祭神今食、辨不參例勿論候哉、仍上卿不參、參議少納言兩人參行之例同不審候、可注給候也、謹言、

十二月十日　資繼

供神料物

權大外記殿

十一日乙亥、月次神今食也、上卿不參、參議行事也、外記三藺康純爲分配之處、兩三日蟲腹更發平臥之間、不及召進者也、二藺康顯可召進候處、去月十七日室町殿食入之觸穢爲乙穢、依參三條殿也仍參仕不叶、兩人空以不令出仕、尤所恐存也、神慮難測、無力次第也、此由奉談合、局務可被沙汰進一藺外史之由令申處、忠種此間者不混穢之處、今月九日參入局務亭之間、又爲丙穢云々、局務外史日々被參申室町殿之間、爲乙穢之故也、依之去月十七日以來、神事局務無奉行、被與奪予者也、子細見日來之記矣、

〔延喜式一四時祭〕六月祭十二月准此

月次祭奠幣案上神三百四座並大

社一百九十八所

座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、倭文纏刀形、絁纏刀形、布纏刀形各一口、四座置一束、八座置一束、弓一張、靫一口、楯一枚、槍鋒一竿、鹿角一隻、鍬一口、庸布一丈四尺、酒四升、鰒堅魚各五兩、腊二升、海藻滑海藻雜海菜各六兩、堅鹽一升、酒坩一口、裹葉薦五尺、祝詞座料短疊一枚、前一百六座

座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、四座置一束、八座置一束、楯一枚、槍鋒一口、裹葉薦五尺、

右所祭之神並同祈年、其大神宮、度會宮、高御魂神、大宮女神各加馬一匹、但大神宮度會宮、各加籠頭料庸布一段、前祭五日充忌部九人木工一人、令造供神調度、其監造、幷潔衣食料各准祈年、

〔北山抄二六月〕十一日月次祭事同祈年祭、但御馬左右各引二匹、

〔中右記〕大治二年六月八日丙寅、頭中將送書云、月次祭桙柄等事、讃岐國所濟也、隨去春進濟神祇官

了、而彼官火事之時、已以燒亡重可ㇾ召ニ彼國ㇾ歟、但本官請取了、可ㇾ令ニ本官辨濟ㇾ歟、宜ㇾ令ニ量申給ㇾ者、依ニ御氣色ㇾ上啓如ㇾ件、予申云、件事忽不ㇾ知ニ先例ㇾ、但神祇官燒亡之次、一定燒失了者、本官何爲哉、猶重召ニ本國ㇾ可ㇾ宜ㇾ歟、不ㇾ然者事闕歟、期日近々也、早以ニ此旨ㇾ可ㇾ令ニ奏達ㇾ給ㇾ者、後聞依ニ院宣ㇾ、猶仰ニ神祇官所ㇾ令ニ進ニ梓柄ㇾ也、

四年六月十一日、月次祭、源中納言頭右少辨宗成勤之、諸國供神物事、頻殺生禁斷全不ㇾ濟、神事違例之由、右少辨來談也、於ニ中院ㇾ被ㇾ行、

〔延喜式三臨時祭〕凡梓木千二百卅四竿、讃岐國十一月以前差ニ綱丁ㇾ進納、

〔百練抄七近衛〕久安元年六月十一日、月次神今食供神物、依ニ宣旨ㇾ復ニ先規ㇾ、

〔吉記〕壽永元年六月十一日庚戌、今日月次祭也、上卿民部卿成範、右少辨兼忠奉ニ行之ㇾ、幣物不法云々、

〔北山抄一二月〕四日祈年祭事

承平四年六月月次祭、馬代進ニ調布八端ㇾ、上卿令ニ仰可ㇾ進ニ見馬之由ㇾ、〔後々多ニ此例ㇾ云々〕

天曆三年七月廿二日月次祭、依ニ穢引ㇾ也、延馬寮所ニ牽進ㇾ馬、腰損足蹇、已不ㇾ中ニ用ㇾ、右少史扶茂參ニ藏人所ㇾ、令ニ奏ニ事由ㇾ、仰以ニ板立御馬ㇾ可ㇾ令ニ牽進ㇾ者、

〔玉海〕文治五年十二月十一日丙申、此日月次祭、幷神今食也、月次祭上卿大宮大納言實宗、神今食上卿親宗、辨定經兼行云々、月次使被ニ付ㇾ別當伊勢幣是外宮御鎭謐固事也、仍上卿先參陣、被ニ奏ニ宣命草ㇾ、戌刻少內記以ニ業持ㇾ來宣命草ㇾ間懈怠之由、奉行職事光綱遲參之故也云々、尤不敵云々、去夜半奉行辨定經來、申ニ幣料一切闕如之由、此人奉行事每度如ㇾ此、非ニ其人ㇾ居ニ其職ㇾ實無ニ術事歟、家雖ㇾ可ㇾ貴、器無ㇾ可ㇾ褒、何爲哉、歲末忩忙之此又別被ニ立ㇾ奉幣使之條、尤不便歟、仍今旦余兩面綾絹等沙汰遣定經許了、事太不ㇾ穩、然而爲ニ重ニ神事ㇾ、爲ニ成ニ公事ㇾ也、

建久二年十二月十日甲申、親雅來申ニ條々事ㇾ、實實月次祭承ニ宣旨ㇾ、召ニ物諸國一切不ㇾ濟、可ㇾ付ニ吉上ㇾ之由存之如何、且經奏聞了云々、仰隨ニ御定ㇾ早可ㇾ付之由了、　十一日乙酉、此日月次祭神今食等也、申刻實

實來云、月次祭承ニ宣旨ㇾ、召ニ物諸國ㇾ對捍事奏聞之處、慥任ニ法ㇾ可ㇾ被ニ譴責ㇾ之由有ニ御定ㇾ、早可ㇾ責之由仰了、但當日事、於ニ今者勿論乎、

〔洞院家記〕德治三年六月三日、公賢奏ニ吉田中納言ㇾ

月次祭條々

諸國幣料散狀

仰被ニ御覽ㇾ了、兼又近年對捍國々事、有ニ限幣料役國等、稱ニ無ニ濟例ㇾ對捍之條太不ㇾ可ㇾ然、猶早可ニ責催ㇾ、

諸國召物幷諸司役散狀

仰被ニ御覽ㇾ了

木工寮申功人事

仰ニ法橋行清敬辨ㇾ、早可ニ宣下ㇾ之由可ㇾ仰ニ職事ㇾ、

〔康富記〕文安四年六月廿四日甲申、月次祭御訪百八十匹、自ニ堀河判官大藏省許預ㇾ到來、百八十文爲ニ酒直ㇾ引留云々、近年如ㇾ此、不ㇾ得ニ其意ㇾ事也、　十二月廿七日乙酉、月次祭御訪貳百匹內、八百文到來、去廿三日百匹到來、以上百八十匹也、二百文酒直引留之云々、三萬康繼分配也、

寶德元年十二月廿六日辛丑、月次神今食也、〇略中上卿今出ニ川中納言敎季ㇾ、職事頭左中辨敎忠朝臣、〇略中敎忠朝臣下ニ藏人方吉書ㇾ、以ニ同辨ㇾ被ニ下之ㇾ、辨於ニ床子座著ニ床子ㇾ下ニ史、康純爲ニ史代ㇾ參進賜ㇾ之、〇略中今日參ニ中御門大納言亭ㇾ、貢馬傳奏也、六位史以ニ貢馬用脚內ㇾ、二人貳百匹被ㇾ下之、外記准ニ傍局例ㇾ、三人三百匹可ㇾ有ニ申沙汰ㇾ之由申之、可ㇾ申ニ中山ㇾ之由有ニ返答ㇾ、

內藏寮

請米拾斛

右臨時公用、以ニ諸國所進年料內ㇾ、依ニ例所ㇾ請如ㇾ件、

寶德元年十二月廿六日

此吉書職事下上卿、上卿下辨、辨下史、

二年六月十一日癸未、月次祭外記史御訪四四百匹內、三貫六百到來、到來、康繼參向也、外記分配被載之傍、局事官務被與奪之有狀、

請取月次祭御訪事

合四百匹者

右外記史兩分所、請取申狀如件、

寶德二年六月十一日　　權少外記康純判

史兼行

請奏舊草

木工寮解申請來十一日月次祭鉾前料事

合

鐵捌拾捌廷

錢肆貫文

右依例所請如件

寶德二年六月十日

如此可書進歟之由追注付之

享德三年十二月十七日甲午、月次神今食御訪一貫八百文、自是弘許到來、康純分配也、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年四月辛巳、勅曰、○中略在京文武官職事正六位上已上及月齋社祀等、賜正六位上行大屬藤井宿禰久國

正六位上行少允藤井宿禰國次

正六位上行少允平朝臣康義

物有差、

○按ズルニ、月齋社ハ、卽チ月次社ノ謂ナラン、

〔續日本紀二十稱德〕神護景雲三年二月乙卯、奉神服於天下大社、○中略每社男神服一具、女神服一具、其大神宮及月次社者、加之以馬形幷鞍、

〔伊勢公卿勅使雜例〕勅使於途中鬪諍例

治曆二年十二月、祭使權少副公輔弘明、十六日朝天、勅使以檢非違使時武天神主等云、昨日自飯高驛家立御幣令持天、神部等ノ前陣立參、勅使ノ遙曳後天參下之間ニ、前立衞士返對、與著綴牛皮兵、使等主從四人打合天、專不致亂、過通候之程ニ、衞士各待之間、件騎兵等不論是非、衞士射殺天罷過也者、爰後々來郎等男共、此由令仰知程、權追捕使藤原高行被射落了、又檢非違使時武隨身男一人被刃損、合戰之間、件騎兵一人被射殺已了、又步兵二人ノ捕得之由云々、此旣從來下人等所示也、仍乍驚御幣隨身シ天所立天進來也者、卽神主答云、件事左右禰宜等難沙汰申事也、執幣衞士家前射殺也、縱不中件箭シテ、於被參宮有憚、加之後々人々所爲、合戰无程射殺人セムト、此尤不隱申也、被參宮ノ可仰公家裁定者、仍件參宮留了天、勅使注解狀言上了、廿六日宣旨、三年正月五日到來、神祇權大祐大中臣惟經右史生佐伯親範使部二人等也、不著離宮院シ天、小俣村小宅來著、二宮神主宮司權少副公輔共任宣旨、件合戰亂行辨定勘記了、二月十日宣旨倩、應令奉供、去十二月月次御幣事、右權中納言藤原朝臣經輔宣、奉勅下知使等今度御幣相共合奉幣者、宮司宣承知依宣行之者、

祭主臨時勅使相並參宮例

二月十日參宮勅使王中臣神祇少副輔長、去年十二月月次使同石壺座著、先十二月詔刀了後、今度宣命、古記云、醍醐天皇御代昌泰元年十二月十三日、祭使下向之間、鈴鹿山內白川ニ强盜出來天、上道人物取彼此合戰之程、勅使郎從一人來會中矢死去、又盜人方二人被射殺了、仍使衞士前立過通

了、後云來人此事有仍官幣進納使使參宮了、其後奏聞、同廿一日被立祈謝使、王中臣眞臣等

官幣途中逗留例

承平五年六月、月次祭使祭主神祇大副奧生也、而十五日官幣氏人訴、然而奧生辨申有譽、

治暦二年十二月、月次祭使權少副公輔也、十五日於途中、源清經等依射穢衞士等、同三年二月十日被立祈謝使、相共參宮、

同四年十二月、月次祭使祭主少副元範、十五日參著離宮院、而使幣暫不納、有穢氣之由被宣下之、

中臣故障例

應和元年六月、月次祭使散位正六位上大中臣中理有故障不參著、以他人改替、同七月廿六日、奉幣使進發、宣命、辭別天申給久去六月乃月次乃祭仁、王從四位上神祇伯忠理中臣散位正六位上大中臣朝臣中理等ヲ差使天奉出賜比支、而中理途中留依有故障天不參著奈利シ、以他人改替之間、頗違例乃事有ケリ、此由乎聞食天同恐ミ恐ミモ御坐□留支止無限久此狀乎平久聞食天、無事故久護惠給ヘ止恐ミ恐ミ申給ハ久止申、

御幣漏忘天不被副進例

天德四年十二月、月次例ニシ天令副進給不神止神宮祭乃御幣乎漏シ忘天不副奉、仍應保元年閏二月十三日行幸八省被立祈謝使、

神今食加臨時幣物例

承平七年十二月十一日己丑、今日伊勢幣臨時幣、而納言以上皆有障、卽准仁和例、召觸穢大納言扶幹卿於左衞門陣外、不奏宣命、太政大臣後、大納言前、而內記手授使王、曰上官立行、〔吏部王記〕園太暦〕延文二年十二月三日癸酉、今日右府被送狀、〇略中藏人右少辨信兼奉行有勅問、官幣下著離宮院事也、請文續之、

月次祭官幣下著離宮院之間事、官狀幷祭主忠直朝臣事書如此候、何樣可有沙汰候哉、可相計申之由可申旨候、尤可參申候之處、此間相勞事候之間、且言上仕候、以參體內々可被伺申候也、恐惶謹言、

十二月三日　進上　丹後守殿　信兼

此年月次祭可相行之由沙汰候也、官幣下著離宮院事官狀、副祭主忠直朝臣狀事書等加一見返獻之、發遣通路、就囚徒之違亂、可被用新道之由被經沙汰候歟、然者下著在所又難義候者、被移轉之條不可有相替候哉、但延暦例雖載事書、其時子細不見之間、難商量候、委被尋究、廣有沙汰、可決時議候歟、以此旨可令披露給候、恐惶謹言、

十二月四日　信兼

上仕候事、載事書許候也、以此旨可令披露給候狀如件、

判

九日、抑藏人辨信兼示送、先日勅問、官幣下著離宮院間事、重傳綸言、所存載請文畢、〇略中

兩人注進在左

官幣下著離宮院事、祭主忠直朝臣幷兼豐宿禰注進、加一見返上之、如彼狀云、延暦沙汰之次第、今度所申强無差異候之上者、新道沙汰之、因准不可有子細候歟、然者依請被仰下候條何事候哉、但如兼豐宿禰申、若神宮被官之輩參洛事候者、猶具尋聞食可有裁下候乎、得此意可令披露之狀如件、

十二月九日　判

月次祭幣使下著離宮院難儀由事、昨日七日御書今日巳刻到來、謹奉候畢、如忠直朝臣事書者、凶

徒競來之災難、又賊難怖畏之上者、就延曆之例、被點便宜之地可被移造云々、此條如神宮雜記者、延曆十一年七月三日、依官符、從沼木郷字高川原移造離宮院於湯田宇羽西村○略中且當國違亂事、元來邂逅非常例之上者、依事難爲難儀、被裁下可被遵行御祭候歟、次此事日數已相迫、令言上候之條不審候、令移造事、若可被仰祭主候歟、又此間禰宜所望之輩上洛事候者、本之離宮院可爲違亂哉否事、廣能々可被聞食候歟之由存候、兼豐所勞事候間、此外之例只今不及委細之披見候、仍又以他筆言上候、兼豐恐惶謹言、

十二月八日午刻　　兼豐請文

祭主神祇權大副忠直申

月次官幣發遣下著離宮院事、自十五日大祓神事、迄至十八日豐明神事、逗留中三箇日也、而彼所在爲湯田野砌、凶徒往返之中途也、云賊難之怖畏、云凶徒之競來、旁爲難儀之間、先日委細載事書言上畢、仍可注申延曆之例旨被仰下之間、案文借于右公卿、被下綸旨、在所事相談神宮可注進而已、

廿六日丙申、傳聞今日被發遣月次祭幣、使到著離宮院事、先日有勅問、而武家警固無相違、不及改定沙汰、如例發遣了、如去年沙汰、經新道參宮歟、

〔薩戒記〕應永卅二年十一月卅日乙丑、未刻許左頭中將隆夏朝臣來示云、月次祭奉行藏人左中辨房長、依勅勘被止職事、仍俄可奉行由被仰下、可賜符案者、○略中

月次祭楯板事、任例可令下知春日社給之由被仰下候也、仍執達如件、

十一月卅日　　左少辨殿○略中

謹上　左中將

神今食參向內侍出車可令獻給者、依天氣執達如件、

左中將

十一月卅日

謹上　三條中將殿

〔康富記〕文安四年十二月廿八日丙戌、今夜月次祭神今食也、○略中傳說分、今夜月次祭參向內侍之車、於中御門西洞院邊、盜賊廿人許寄合、取籠內侍車、可給御小袖之由申之、扣御車云々、爲珍事之處、出車山科之中將○顯言也、小者走歸告示之間、山科靑侍中間等走向追散云々、希代之勝事也、雖然無爲無事云々、

〔樵談治要〕一神をうやまふべき事

六月十二月の月次の祭、九月十一日の例幣、十一月の新嘗會は、四度の幣といひて、伊勢大神宮へ王氏卜部中臣忌部の四姓のつかひをたてられて、とりわき兼日の御神事など有て、嚴重の祭也、

附神今食祭

神今食ハ、カムイマケト云ヒ、又ジンゴンジキト云フ、六月十二月月次祭ノ夜、天祖天照大神ヲ神嘉殿ニ請ジ奉リテ、天皇親ラ火ヲ改メ、新ニ炊ギタル飯ヲ供ジ給ヒ、又親ラモ喫シ給フ祭ニシテ、大略新嘗祭ニ同ジ、其異ナル所ハ、彼ハ新穀ヲ以テシ、此ハ舊穀ヲ以テスルニ在リ、而シテ此儀ノ史ニ見エタルハ、桓武天皇ノ延曆九年ヲ以テ始トスレドモ、二十二社註式及ビ公事根源等ニハ、靈龜二年六月ニ始マルトシ、本朝月令ニ引ケル高橋氏文ニモ亦同年十二月ニ神今食ヲ行ヒシコト見エタレバ、元正天皇ノ頃ヨリ、既ニ一年兩度ノ神今食アリシコト知ルベシ、凡ソ祭祀ニ前後ノ齋戒アルハ常例ナレドモ、神今食ノ時ハ、特ニ其月ノ一日ヨリ神事アリテ、忌火御飯、御贖物等ヲ供ジ、僧尼重輕服ノ人ノ參入ヲ許サズ、又祭ノ翌日ニハ忌火庭火祭ヲ行ヘリ、

當日ハ神座及ビ御座ヲ敷設シ、打拂宮ヲ執ルモノアリ、坂枕ヲ舁クモノアリ、寢具ヲ奉ズル

名稱

モノアリ、夕御膳アリ、曉御膳アリ、其明日ニハ大殿祭アリ、解齋儀アリ、是等ノ事ハ、大略新嘗祭ニ同ジケレバ、互ニ參看スベシ、

神今食ハ六月十二月ノ十一日、月次祭畢リテ後ニ行ハル、但シ月次祭ハ神祇官ニ於テシ、神今食ハ中和院ノ神嘉殿ニ於テスルヲ以テ例トス、故ニ中和院ヲ、一ニ神今食院トモ稱ス、然レドモ時ニ或ハ神祇官、若クハ中和院ニ於テ共ニ之ヲ行ハル丶コトモアリ、後世ハ觸穢其他ノ事故ニ由リテ、中和院ニ行幸シ給フコト稀ナリシカバ、神今食ヲモ多クハ神祇官ニテ行ヘリ、又宮內省ニテ行ハレシコトモアリ、淸和天皇ノ貞觀十四年六月、及ビ宇多天皇ノ寬平元年六月ノ如キ是ナリ、若シ月次祭ノ延引、或ハ停止セラル丶コトアル時ハ、神今食モ亦共ニ延引停止セラル、其祭儀ニ從フ職員ノ如キモ、月次祭ニ供奉スル官人ノ神今食ヲ兼ヌル事モ多クシテ、此兩祭ハ互ニ相關係セルモノナレバ、事ノ月次祭ト相聯レルハ彼篇ニ出シテ、此篇ニハ多ク省略ニ從ヘリ、

抑、神今食ハ、前ニモ陳ベシ如ク天皇ノ御親祭ナレドモ、觸穢方忌、及ビ職員ノ不參、若クハ諒闇等ノ時ハ、天皇出御シ給ハズシテ、多クハ所司ニ付シテ事ヲ行ハシメラル丶コトアリ、鳥羽天皇ノ天仁元年以降二十餘年間ハ親祭ノ禮中絕シ、崇德天皇ノ長承元年ニ至リ、再興ノ議アリシカドモ、偶、物忌ニ由リテ果サズ、繼デ保延元年ニハ藤原宗忠同敦光等祭祀ノ漸、衰フルヲ慨キテ、親祭ヲ奏請セシコトアリ、其後朝綱ノ弛廢ト共ニ益、衰微ニ趨キ、應仁ノ大亂以後ハ、月次祭ト共ニ終ニ全ク擧行セザルニ至レリ、

〔釋日本紀六述義〕私記曰、〇中略古者謂木爲介、故今云神今食者、古謂之神今木矣、

〔伊呂波字類抄志諸社〕神今食

〔年中行事大概〕六月神今食

十一日月次祭とて、まづ諸神をまつらる、その夜中和院に行幸なりて、天照大神をまつらせ給ふを神今食といふ、

〔公事根源六月〕神今食

十一日

神今食の儀は年に二度也、伊勢天照大神を勸請申されて、天子御みづから神饌を供せさせ給ふにや、

〔祝詞考中〕新嘗と云は、十一月卯辰巳三日の間、その年の新稻の御食を、朝は諸神に奉、夕は天皇聞食也、神今食は新稻にはあらず、一年に二度、六月十一日、十二月同日に、夕より曉まで神嘉殿へ奉て、是も天皇御親祭ります也、是卽月次幣を諸神へ奉りて、そは其社々にて祭らしめ給ひ、公にては、その諸神を皆御親祭ましぬ、仍て相嘗といへり、神今食といふは、その新嘗に對へて付たる字なるべし、其字音にぢんこじき、ぢんこんげなどいふは、後世此言を失ひて後のわざにて、いふにもたらず、四時祭式に相嘗祭と有、卽此祭の事なるにて、神今食の本言あひなめなるを知るべし、且この祭の事、延曆九年六月紀、又類聚國史にも同月日に出たり、然どもその文有ふりしさまなれば、いといにしへより有しを、前紀にはもれし也けり、

〔玉勝間六〕神今食

神今食は、ぢんごんじきと字音にのみ唱へ來りて、正しくはいかに唱ふべきにか、昔よりさたもなくしれる人なし、書紀の私記に、古は神今木と謂しよし見えたるによりて、ぢんごんけとも唱ふれども、上二字はなほもじこゑ也、これによりてつら〳〵此名を考ふるに、加牟伊麻氣（カムイマケ）と唱ふべき也、そは神は神嘗祭などの神に同く、今は新の意なり、すべて新に物したるを今某（イマナニ）といふこと多し、古漢國より新に參來つる人どもを、今木（イマキ）の漢人と書て、書紀に新漢（イマキノアヤ）と見え、大かたもあらたに參れる人を今參りといふ類也、さて今食といふは、世俗言に、稻を粟にてたくはへおきたる

初見

齋戒

を、新に磨て米にしたるを、今ずりといふ、其意にて、新磨の御食といふことなるべし、古に今毛人といふ人名の見えたるも、今食といふことのありしによれる名なるべし、かくて此神今食は、年毎の六月と十二月との十一日にて、月次祭の同日の夜に行はるゝこと也、〇中略かくて其同夜に行はるゝ神今食も、その同じ趣にて、天皇の月毎に新磨の御食を聞食すよしにて、其度ごとに行ひ給ふべきを、合せて二度に行ひ給ふよしにて、そは新穀にはあらざれども、新磨を聞食始むるをさへに重く嚴に齋給ふにて、先神に奉り給ひて、さて天皇のきこしめすこと、もはら新嘗大嘗のこゝろばへに同じ、さる故に此祭の儀式は、何事も大かた新嘗大嘗の儀の如くなる也、そもそもこの神今食の事、いかなるよしをもて行はるゝ御わざとも、むかしより其よしをしるせることもなく、考へたる人もなきを、おのれもいといぶかしく思ひわたりて、年月かにかくに思ひめぐらして、近きほどかく思ひえたるまゝにしるせるを、猶いかならむ、かしこき物しり人さだめてよ、

〔二十二社註式〕神今食

人皇四十四代元正天皇靈龜二年六月、始被行之、

〔公事根源六月〕神今食

靈龜二年六月よりはじまる

〔本朝月令六月〕十一日神今食事見儀式

高橋氏文云、太政官符、神祇官、定高橋安曇二氏供奉神事御膳行立先後事、〇中略至于飯高天皇〇元正御世靈龜二年十二月神今食之日、奉膳從五位下安曇宿禰刀、語典膳從七位上高橋朝臣乎具須比曰、〇下略

〔師遠年中行事六月〕十一日神今食事

十二日有後齋云々、近代事云々、左大臣令預給也、

同日供解齋粥、何有後齋乎、

〔公事根源六月〕神今食

十一日

御神事は一日よりはじまる、〇中略供解齋御粥、十二日、〇中略神今食はてゝの十二日に後齋あるは、中比よりの事にや、解齋の御かゆなどを供しては、神齋は有べからざるが本式にて侍べし、

〔吉記〕壽永元年六月十一日庚戌、今夜神今食也、依合卜、當日致神事、佛經送別屋、月障輩令出之、沐浴解除、

〔玉海〕文治五年六月一日己丑、自今日神今食齋如例、但散齋也、子良死去事進次第解、申穢之由不載子細、依不審重遣尋了、待使歸來之間、猶可爲神事也、

建久二年十二月一日乙亥、自今日神今食散齋之例、宮御方又月次、但依例不憚御堂參也、　四年十二月十一日甲辰、此日月次神今食也、余去一日旬有所思不遙拜、仍今日重修祓、遙拜大神宮春日兩社、〇中略今日月次祭事、資實奉行、神今食宗隆奉行也、來十八日千僧事經申沙汰、今日閣佛事可行神今食之由仰之、

供忌火御飯及御贖物

〔薩戒記〕薩戒御記中抄出、〇中略神事立札事、應永廿九、六、九、

明後日神今食可參向、仍自今夕始神事、沐浴立神事札於門口、自今日不念誦、伊勢神事皆如此、札云、大神事也、僧尼幷重輕服輩不可入來、

〔西宮記六月〕一日內膳司供忌火御飯、御粥前付采女、女房若侍供之、著服月事人不候、立御臺盤一基於大床子御座供之、稱警蹕、不奏御飯、付女房不仰罷由、陪膳或布袴、六位束帶、有穢氣時尙供之、進物所例云、六月一日早旦供奉忌火御膳四種、例銀器、御菜用土器、御盤四種、二干物御飯片垸、

九記云、承平元年五月廿九日、御讀經結願、先例第四日朝座御結願、而明日依可供忌火御膳、今日畢云云、

延喜十一年十一月一日、同十五年六月一日、共有觸穢、然而供忌火御膳如常云云、御記文云云、

延喜二年十一月一日、供忌火御膳依無四位殊令嘗根陪膳于時藏人頭

〔北山抄二六月〕朔日供忌火御飯事

内膳司早旦御前以前付采女於大床子御座供之、用御大盤一脚、不稱警蹕、或又稱警蹕未知得失、但不奏由、只觸女房、又不仰退由、是舊儀也、仍以不稱可爲善歟、陪膳或著布袴、若四位不候者五位供之、延喜之間希有之例也、今案正下五位、若大臣子可供歟、或又女房供之、著服及有月事之者不候、但禁中有穢時猶供之、

〔北山抄十二月〕朔日供忌火御飯事

〔江家次第七六月〕忌火御飯六月十一月十二月一日早旦供之、内膳司、

上大床子間御格子一間、以昨日番人爲陪膳、采女又同往年布袴、近代束帶、以御臺盤一脚供之、加土器、以土器爲馬頭盤、置木箸二雙、御膳等、盛次供御飯、有尻居土器、不警蹕、御菜四種、薄鮑干和布御汁一坏、不奏御飯參之由、只付女房、申之、主上出御、御冠直衣、食給之、三箸畢入兩手於袖令念給、是經信卿說、後冷泉院御時儀云云、後朱雀院御記無所見、自其以來此事已絕、不知何事、予以此說申之、後三條院被仰云、主上入御、陪膳折御箸如常、不仰撤之由、仍藏人於鬼間障子外窺見、取罷盤參入、御臺盤如常舁入御飯宿、件御臺盤、陪膳與藏人相共舁之、他人不相交之、

西宮記云、進物所例云、六月一日早旦供忌火御膳四種、例銀器、御菜用土器、御盤四種二干物御飯片垸、

今案不同齊光卿口傳、近代猶依彼口傳、

禁中有穢時猶供之

承平元年五月廿七日、被始臨時御讀經、廿九日結願、先例第四日朝座御結願、而明日依不可供忌火御飯、今日畢云々、西宮記云、警蹕云云、是彼書失歟、後賢被稱不字落之由云云、是後三條院所被仰也、

或記云、無男陪膳之時、女陪膳供之、以三尺御几帳立大床子坤、女房候其中云云、今按忌火每至神饌謂之忌火、良有以也者、

高橋氏文云、天皇〇景行五十三年八月、行幸伊世轉入東國、冬十月到上總國安房浮嶋宮爾時磐鹿六雁命從駕仕奉矣、天皇葛飾野令御獦、六雁留守、大后詔、此浦聞異鳥音、其鳴賀我久々欲見其形、音欲見貌、飛遷他浦、不見其形、自今以後不得捕、於是磐鹿六雁命詛曰、汝鳥戀其卽著弭而出、忽獲數隻仍號曰頑魚、此今諺曰堅魚、以角爲釣柄由也、船過潮涸渚上留居奴、掘出止爲留得

火也、

〔建武年中行事〕六月一日、忌火の御膳まゐる、昨日のはいせんつとむ、上格子よりさきに、あたりの間ばかりあげてまゐらす、四種かはらけに入て供す、つぎに御はんをしきにすゑながら齒以下四供す、一の御だい許たつるなり、みなまゐりぬれば、そのよしを申奏なし、さばとりて、三口めしていらせ給、そのゝち上かうし、〇中略十二月ついたちいんびの御せん御あが物、さきの月〇十一月におなじ、

〔公事根源六月〕供忌火御飯

内膳司より奉れるを、大床子の御座にて供する也、景行天皇の御時よりはじまる、忌火とは火をいむ心なり、神事などの時は、不淨の火をうちかふる事にや、是は月次神今食の御神事を、今日一日よりはじめらるゝ成べし、

〔年中行事秘抄六月〕一日内膳司供忌火御飯事未明供之

舊紀云、垂仁天皇之代、倭姫皇女爲伊勢大神御杖代、于時依隨大神託宣、從大和國向伊勢國到壹志郡齋片樋宮、發從彼宮乘三隻船、向佐志津御暫留、爰夜鳴鳥聞於葦原、倭姫皇女遣人令見、有一隻鶴守八根稻穗、長八握、可謂瑞穗倭姫皇女、使人苅採、欲供大神之御食、卽折木枝刺合出火炊彼稻米奉供大神、給從此時神嘗祭發、故每至神態鑽火炊爨、謂之忌火、良有以也者、

高橋氏文云、天皇〇景行五十三年八月、行幸伊世轉入東國、冬十月到上總國安房浮嶋宮爾時磐鹿六雁命從獦仕奉矣、天皇葛飾野令御獦、六雁留守、大后詔、此浦聞異鳥音、其鳴賀我久々欲見其形、音欲見貌、飛遷他浦、猶雖追行、遂不得捕、於是磐鹿六雁命詛曰、汝鳥戀其卽著弭而出、忽獲數隻仍號曰頑魚、此今諺曰堅魚、以角爲釣柄由也、船過潮涸渚上留居奴、掘出止爲留得

八尺蛤一貝、六雁捧件二種之物、獻大后、大后譽給氏欲供御食、爾時六雁命申久、令料理氏將供奉ト白云々、見河西山梔葉氏高次八枚刺作爪、見眞木葉、枚次八枚刺作氏、取日影氏爲蘰以蒲葉氏美頭良乎卷、採麻作氣葛天多須岐爾加氣云々、時爲供奉、太后詔之、是時上總國安房大神乎御食都神止坐奉、爲湯坐連等始祖意富賣布連之子豐日連乎令火鑽氏此乎忌火止爲天、伊波比由麻閉天供御食、幷大八洲爾像天八乎止古八乎止咩定天、神齋大嘗等供奉始支、但云、安房大神爲御食神者、今大膳職祭神也、令鑽忌火大伴造者、物部豐日連之後也、○中略

御食了入兩手於袖、令念給、是經信卿說、後冷泉御時儀云々、不知何事、予以此事申後三條院、仰云、後朱雀院無所見、仍此儀已絕、又不警蹕云云、又穢中有例云々、

〔延喜式十五內藏〕凡每年六、十一、十二、三箇月、起自一日迄于八日、幷八箇日、御贖御輿形覆料、紫弃汁染絹四尺、每度行神祇官、中宮同此

〔西宮記六月〕一日神祇官奉御贖物、自一日至八日、十二月同之、

〔北山抄二六月〕一日神祇官奉御贖事起自一日迄八日奉之

〔北山抄二十二月〕一日始奉御贖事

〔年中行事秘抄六月〕一日神祇官始奉御贖物事迄八日御巫者持參

舊記云、弘仁五年六月、依聖體不豫、同月七日己丑、行御贖祭、其後每年六月十二月、從一日至八个日御巫行事每日供奉、仍謂御贖者、弘仁神祇式云云、

〔神祇官年中行事六月〕一日自今夕至八日獻御贖物、內、諸宮、御巫史生調進之、○中略

御贖物御巫子持參之例事、近代官人巡役、

〔建武年中行事〕六月一日、○中略けふより八日御あが物まゐる、あがちごまゐりてけいひちす、藏人みちびく、內侍とりてまゐる、典侍あさがれひにてまゐらす、四のかはらけを御ゆびして、うへにはりたる紙にあなをあけて、御いきをいるゝ也、御たのごひ、ちひさき四足にすゑてまゐらす、御手水はうち〳〵まゐる、あかなへ小つぼなど、だいばん所にとゞむ、

〔公事根源六月〕御贖物

是は一日より八日まであり、あがちごもちてまゐる、朝餉にて主上にまゐらす、四のかはらけを御指して、上にはりたる紙にあなをあけて、御いきを入る也、弘仁五年六月より、御藥の事によてはじめて御贖を奉る、大かたは素戔烏尊の千座置戸の祓などいふより起ぬる事なり、

〔左經記〕寬仁元年十二月一日乙丑、內膳供忌火膳、御精進

長元元年六月一日甲子、參內、宮內膳供忌火御膳如例、中宮御方同供忌火膳、以黑漆御臺本供之、依御服黑歟、○中略及晚景召宮主則政、令申云、去年十二月晦日、仍御服不供節折幷御贖物、准彼例可停歟如何者、余彼間御坐法成寺之中、已故殿御忌中也、仍被停也、於先例有穢之時供奉大殿祭、准思件例、何不供御贖物、就中天曆八年六月晦日、神祇官供奉節折、是又可准之例也、仍可奉供之由令仰了、　十一日甲戌○中略傳聞、月次祭上卿春宮權大夫及秉燭被參內、被行神今食事云云、

〔中右記〕寬治六年六月一日癸丑、及來十九日、雖有內穢、供忌火御膳、陪膳予藏人右兵衞尉高階爲行等也、神祇官供御贖物、官人等依穢參右衞門陣外、付闈司供之、依返給、神祇官卜部一人觸穢、仍此間不向本官也、是先規云々、往年如此時付闈司供云々、而近代有穢時、只付女官等歟、但今度付闈司所供也、　十九日辛未、有大祓、是月次神今食延引之由也、　廿五日丁丑、月次神今食被行、

嘉保二年六月一日乙丑、朝大盤以後從內退出、卯刻供忌火御飯、陪膳前兵衞佐長忠朝臣、　十一日、入夜參神祇官、依卜合爲勤神今食也、

〔吉記〕治承五年六月一日丙午、忌火御飯如例、左少將有房朝臣、勤仕陪膳云々、　十一日丙辰、今夕神今食、

祭場裝飾

〔玉海〕建久二年六月一日戊寅、自今日內幷中宮供御贖物如例、　十一日戊子、此日月次祭神今食等也、

〔伏見院御記〕弘安十年十二月一日丁巳、自今日至于月次祭神事如例、早旦供忌火御膳、隆良朝臣候配膳、

〔園太曆〕貞和四年十二月一日、藏人辨俊冬爲勅使入來、今日御贖物忌火御飯、穢中可爲何樣哉云々、此事不打任事歟、但先年神宮路次閉塞之時、同忌神今食□□雖被止月次神今食、忌火御飯御贖物不略之由有沙汰、其事共引勘之處有所見、仍其趣申入了、其外猶不審之間、相尋兼豐宿禰之處、請文到來續之、

此事或抄引穢中有例云々者、建武四、六、兼□請文御贖物之案式條、神今食料足、先例依穢雖延引、不憚穢中供進、所謂承曆四年六月月次祭雖延引、猶式日供之云々者、

被仰下之旨、謹奉候畢、自今日忌火庭火御飯幷御贖物等間事、左大辨經賴記云、長和六年五月三十日有定、仰內僧幷服者等可令退出、是雖被止神今食、可供忌火御膳之故也、同六月一日、今朝御物忌也、早旦源中將著布袴、供忌火御膳、或人云、四條宮〇圓融后遵子令崩給、入夜御座供御贖物如例、申事由於攝政殿、有定令供、村上御時雖相當御物忌、大殿祭幷節折等早々、仍相准行之云云、唯今卒爾之案得如此候、去建武曆應之比者、依神宮路次不通、達數年被止月次神今食候之處、不可依彼停止、至于御飯御贖物者則被供之旨、一條前殿內々有申沙汰、曆應四年六月一日已後被具供候訖、今度者天下之穢候、以長和之所見可被左右候歟、〇中略兼豐禁忌中候之間、以他筆令言上候、以此旨可令披露給候、恐惶謹言、

十二月一日亥刻　兼豐請文

〔延喜式三十大藏〕六月十二月神今食、中院東西廂殿懸幔、中門及掖門懸屏幔、又立幄三宇、五丈幄一宇在中門外、七丈幄二宇在中和門外、

〔延喜式三十八掃部〕六月神今食、前一日設卜小齋五位已上座於神祇官、當日平旦設卜小齋人座於宮內省、神祇官卜部已上座於廳內、內侍座於東廂舍、中務宮內二省官人座於西廂舍、酉剋折薦帖狹帖短帖折薦葉薦簀山城食薦寮造食薦各八枚、是謂八物置於中院、付神祇官、卽裝束神嘉殿、敷長席於殿中央三間、神座下敷西隔二間敷長席、立床一脚、供御座、西廂立床一脚、御湯殿料東方敷隔間設供奉神事女官座、北廂設內侍已下女官座、東廊設殿上侍臣座、北殿設御厨子所幷藥殿、主水等座、東廂殿辨備神供神祇官宮內省內膳司采女司座、西廂殿設小齋親王以下座、近衞兵衞等各用蔣圓座、中和門外幄設大齋親王以下座、戌剋小齋親王已下出中門外、寮官人授打掃筥坂枕御帖等、傳執參入、昇殿於南戶下授寮官人退還、官人便留、率掃部等鋪御帖於殿中央、神座西面、御座東面、訖退出、寅剋官人更昇殿撤御帖、親王已下傳執退出如初儀、御帖卽給神祇官解齋之日、設小齋人等座於宮內省廳幷東西廂舍、十二月及新嘗祭設座亦同、

〔江家次第七六月〕中和院神今食御裝束新嘗祭幷十二月神今食同

前二日、令左右衞門府掃除神嘉殿前後庭、幷南門前東西、又令右近衞府掃除中和門以南脩明門以北、

當日、神嘉殿七間內中央母屋三間塗籠內、上張信濃布承塵、白木骨、其內敷滿廣筵、南北東西戶懸絹幌、

如小一條大將圖者、東西一丈二尺五寸、南北一丈七尺可爲神座程、仍左右一間餘也、

其中央東西行立御床一、白木其上敷白端御疊、北戶外庇內敷小筵二枚、爲御裝物所、南北東西戶懸絹幌、西塗籠二間內、上張同布承塵、其北南戶懸同幌、西廂東隔小戶懸同幌、其內敷滿弘筵、御裝物所、在庇西第二間歟、近代在第一間、西庇戶內供御湯船御床子等、御床子敷小疊、御湯船東西妻床子二脚並立其北、東西妻件御湯

船無杓、御湯殿西壁設樋傳御樋、樋口壁外居斗、御樋（筥生絹、近代布、）執柄被候南庇西第一間、同庇歟不其座可敷白端疊、而近代用兩面端可尋、

東塗籠二間內、敷美濃長筵三枚、

南戸懸幌、爲供奉神事內侍以下候所、東塗籠二間、檢西宮抄、供奉采女座有其謂、內侍可候北廂歟、中央塗籠北戸東西外掖對座、敷葉薦爲女官候所、中央塗籠北戸東西外掖對座、敷葉薦爲女官候所、中央塗籠北廂可爲內侍以下座、殿西廊南面中戸東掖引廻斑幔、爲供奉御湯、主殿寮官人候所、灯樓八本預儲、供奉御在所幷神殿內、主殿寮供奉件白木燈爐在神殿幷御所四角、立白木床子、其上居之、殿後屋南庇東西行結管貫引幔、其內傍幔敷座、殿上侍臣著之、座東御藥陪膳座、西御厨子所、自殿東西廂南頭柱引幔、各南行與東西舍南頭柱平頭、各東西折、西幔東折、東幔西折、當殿中央、曳斑幔、內東西相對葺短苫、立掃部寮、木工寮、苫葺並炬火處、西舍身屋內、設小忌親王以下辨以上

止某親王門候止申、寅時退御畳、叫門、同時亥止宮内省輔姓名門候止申、鎮御殿畢、小忌人向宮内省解祭畢廻寮、

〔延喜式三十一〕凡神今食新嘗祭夜、丞錄各一人與神祇官共侍内裏檢校御膳進退、

〔延喜式四十左右近衛〕凡神今食及新嘗會陣、小齋近衛已上隊齋院内、大齋隊院外、

〔西宮記六月〕神今食

上卿著南舎、親王入自北西面、上卿入自南北面、外記史中務丞錄内舎人在南庇、召使候東面座、西方爲侍從厨候所、親王前机、餘筆盤、

外記置式筥、或申代官使部申時、神祇官人申供神物辨備、王卿已下向北舎、水司供手水、親王執打拂筥、无親王者次人又執之納言參議昇坂枕、納言東、卷枕、辨少納言已下供御畳、掃部官人傳取供之、畢各還南舎、玄供御膳、丑又供曉膳、舊例侍曉膳之間、或有圍碁、冬以衾纏腰、丑時供曉膳、王卿撤御座等、如初儀、采女參内、奏夕曉御膳供了狀、

中院儀

當日、〇略中入夜殿司供替忌火、不合御卜、及燈忌火、退出、未々、未幸神嘉殿、入中和門之間、大忌王卿出立艮前北面、衛府帶弓箭、大忌人自中隔著幄、或自内著御輿寄殿中間、小忌公卿列西著幄、或自内著幄前北、西上北、所司敷縫道、主上入御自西戸、御西隔北戸前、殿上人候殿西北砌上、御厨子所候北舎、小忌人著西舎、親王南面、納言西面、式前置參議東面、辨少納言西面北上、敷外記史内記中務内舎人等座、南横右近候西廊北面、神祇官内膳宮内采女氏氏供奉人候西廊北面、主殿供御湯殿、御樋在西庇、主殿寮候壁外、自樋入御湯、入御湯樋、以置置御槽、七度攪御湯、先縫司獻天羽衣、候御浴後、供奉人脱袍著當色、懸襷不脱襪、襪、主上登自御浴之後、供奉人乍著當色奉仕供神御裝束著供人候内藏寮奉御幘、以之主上著祭服了入神殿、亥刻開門、闈司著座、大舎人叫門、闈司奉入□□禮闈司傳、近代無勅答云、小忌供神座、采女申時、王卿出自西掖門、掃部寮無勅答云、小忌供神座、采女申時、王卿出自西掖門、掃部寮積神座、具親王執筥、納言參議昇坂枕、已下供疊、近衛將脱調度、褰殿蔀、掃部官人傳神御衣、内侍供之、采女申時、縫司供御服内藏供幘、主水司令供御手水、主上自中戸入御中隔殿、采女供神膳、宮主立前、氏列立如式、小忌王卿歸本座、近衛閉門、天皇洗手還御寢所、内侍奉縫具、曉膳畢、采女參殿内、曉又供、采女奏時、同夕儀了還御寢内

御膳自東廊進之、見吏部王記、若依禁中穢及御物忌等付所司者、上卿就神祇官行之、其儀齋院北屋爲神殿、南屋東壁下敷親王座、西面其西敷大臣座、南面、延喜十五年十二月、同十九年六月例也、而无此座之由、見九條承平五年六月記、又或記云、大臣座北面東上云々、非也、西者納言參議座、納言北面、參議南面、自餘准中和院例設之、上卿未參之間、辨少納言以下就南門外西屋座行事、上卿入自南面東第二間著座、參議入自北面東第二間、上卿不參者、參議著北面座行事、神祇官申供神物辨備畢由、供御疊如常、

〔江家次第七六月〕神祇官神今食

戌一剋、上卿以下著神祇官南屋、入自北門、

上卿入自南面東第三間、北面、參議、入自北面東第二間、南面、辨少納言、辨北面、入自南方、少納言南面、入自北方、中務輔宮內輔等著、東上對座以上辨以下用一臺盤、外記史中務丞內舍人等著、

西第二間、爲造酒司、侍從厨家、大舍人、官掌、召使座、同第一間爲厨家行事所、

辨少納言、先在南門外西掖屋、近例不必然、

外記申代官、先置式筥、又令尋內侍參不、

使部申時、神祇官人申供神物辨備畢由、亥一剋王卿以下各起座向神殿、或一獻後洗手、帶劒人解之、但搢笏役之、先是著小忌衣、辨料辨侍奉之、列立御棚東邊、上卿執打拂筥、參議與辨舁坂枕、辨在西少納言侍從等供奉御帖、上卿以下次第進之、跪於壇上、傳授掃部官人、上卿參議立庭西、辨以下立東、次各退向南屋、暑月或撤小忌、諸司供御膳、男官人、伴造采女朝臣

采女人　奉膳　膳部人　酒部人

神祇祐以上一人宮主　史一人　宮內丞錄

供神物御衾等歟、能可令尋催之、

上卿以下還南屋勸盃、一獻少納言、二獻辨、不著沓著軾勸之、五位取繼杓、辨依參議目、進受之返座、

神膳供畢撤之、撤寢具、可尋之、

丑一刻又供寢具、供曉膳、畢撤寢具、

王卿以下參上、撤打拂筥坂枕帖等、准初、事訖退出、采女參內裏、於朝干飯方、申夕曉膳供畢由、○中略

神今食事又說

六月十二月十一日夜有行幸時、於中和院行、無行幸時於神祇官被行、正廳之中三間爲神殿、東三間爲采女候所、北廂爲內侍候所、南六間屋東一間親王座西向、二間上卿座北向、參議座南向、三四間辨少納言中務輔座、辨北向、少納言南向、大盤五間南壁下上官、第六間引分幔爲外記座、著小忌著座、辨料辨侍奉之、幷入自南著、亥剋上卿參議參神殿、於幔外洗手、解劒搢笏、上卿取打拂筥、進神殿戶前跪奉之、退立庭西方、北上東面、參議與辨舁坂枕奉之退、參議上卿南立、辨立東方、次少納言與侍從等舁御座進、各返著南座、有勸盃事、辨取之、二獻少納言取、不著履、從差筵上往反、箸下、使部時申、亥一剋供夕膳、丑一剋供曉膳、事畢上卿以下又參入、撤筥枕御座等、准上可知、寅剋退出、

〔小野宮年中行事六月〕十一日神今食事

大納言延光云、有行幸之時、還御之間說兩端、或問誰々侍、此說普知之、或問誰、此淸愼公之御說也、故藤中納言朝忠用此說、但有疑慮、爲決兩說、彼卿奏聞朱雀院、被仰此說可然之由者、又邑上先皇被仰此說可然之由、但從神嘉殿還御之間、於中和門外問時、无誰々侍之說、皆用誰之說、

〔蓬萊抄〕六月十一日神今食行幸事御湯殿事

戌剋行幸中院、主上著御帛裝束、御要輿、無警蹕鈴奏、公卿已下前行、前日行事藏人、註殿上人交名給神祇官、仍隨小忌卜之合否、所供奉也、供忌火御殿油之後、大忌之人不昇殿、凡今日扈從人、除執柄殿下之外、皆著小忌衣、行事藏人以小舍人令賦之、參仕之後、於便所袍上著之、衞府上卿宰相懸緌、用壺胡籙蒔繪劒、近衞司同之、近衞兵衞之外、雖不供奉、爲雲上之衞府、同用壺胡籙、五位已上皆著縫腋、候御後、至于六位者、平裝束引布帶著糸鞋、不用平緒、入尻鞘、但檢非違使用平胡籙、於廷尉府生已下、褐衣垂袴用壺胡籙、四位已下尋常束帶用淺履如例、殿上四位之中一人藏人一人、於中院奉仕御湯殿、是山蔭西宮勸修寺等之種族

所勤仕也、其儀入御神殿之後、御湯殿役人二人、參北腋戸下、依天氣於同壁下各著今支、件役職事近衞司之間多有其便、爲衞府者、先解弓箭、脫表衣下襲韈等昇殿、（或不脫韈云云）六位脫袍著今支、（或脫下襲）立戸下、即以主殿官人令取御湯、藏人計之、以上﨟役人先試御湯寒温、（以左手搔合七度云云）次縫殿寮獻浸布、次內藏寮獻天羽衣、次獻御泔抔、搔上筥等、以縫殿寮供祭服、御裝束改帛御裝束、著御之後、藏司供御幘、御湯殿役藏人等、於戸外次第令催獻、同役上﨟人、於長押上傳進之、次主水司供御手水、湯殿役人帶四品之時、即奉仕陪膳、爲五位之時、藏人頭奉仕之、（去康和五年十一月、新嘗會行幸之時、左少將實隆朝臣爲御湯殿役人、而俄以他行、藏人頭又以不候、仍左中將俊忠朝臣奉仕之、）次召御笏、次小忌上卿已下催行次第事、丑剋供曉膳了、寅剋還宮、大忌上卿於陰明門外幄前名謁、右近次將問之、

〔建武年中行事〕六月十一日、御神事一日よりはじまる、行幸あり、いぬのはじめに出御、はくの御裝束をたてまつる、內藏寮てうず、夏はすゞし、冬はねり、これよりさき、先大忌の御湯をめす、うらにあひたる上卿陣につきて辨をめして諸司の具否をとふ、小忌御燈を供ず、もとの火をけちてともしあらたむ、上卿宰相辨少納言外記史うらにあひたる人小忌をきる、近衞司藏人みなきる、關白鬼間にてきる、南殿に出御、內侍例のごとし、反閉なし、行幸の時御輿は蔥花なり、鈴の奏なし、すけ渡て御輿を南階によす、上首のすけ劒璽の役をつとむ、御輿にめさる、けいひちなし、月花門陰明門などを出で中和院にいたる、大忌の公卿幄につきて、御輿過させ給ほど、すけたれ〳〵か侍ととふ、おの〳〵名謁す、御輿神嘉殿の南向の壇によす、すけかはらず、（神事にはかくのごとし）下御神嘉殿のひさしより入らせ御、大床子の御座につかせ給、此所に承塵はりて、白木の大床子たつ、御座しろへり也、四の角にしら木のとうろをしら木の机におく、關白の座をまうく、所々にきぬの幌かけたり、劒璽大床子のうへにおく、とのもんれう御ゆまゐらす、御舟にとる也、めすほどにためたり、そのゝちひの口より七たびにまゐらす、山蔭の中納言子孫なるくら人、御ゆのことをつかうまつるなり、その人なければ、外戚にも末なる又えたり、頭もしは五位藏人の中、これも山かげの末、御ゆ殿にまゐる、うへのきぬぬぎて、うへに明衣をきたり、下がさねおなじく著せず、神殿の方にむかひて、七たびこれをそゝぐ、さて御舟に御ゆかたびらめしていらせ給、三瓠めして、天の羽衣（御ゆかたびらをいふなり）舟のうちにぬぎすてゝ、更に又くられうの御ゆかたびらをめしてあがらせ給、其後帛の御裝束をめす、內藏寮のたてまつれるをぬがせ給つれば、又ぬひ殿れうのたてまつれるを、うるはしき齋服にはたてまつる也、（これは冬もすゞし也）內藏寮のたてまつれる御幘を御かうぶりのこじのねにむすぶ、かたかぎなり、御ゑいの下よりまへに引まはす也、御かうぶり無文、御帶むもんのずんばううち〳〵御用意ある也、大ひの御かどの流、つねざねの大納言のすぢになん、いまも御裝束口傳ありてめされける、御服のゝち、うねべ時を申、（亥一）內侍かみあげて、神殿にまゐりて寢具を供ず、これよりさき左右近のつかさ、殿の東西に陣をひく、開門闈司などはてゝ、上卿已下神殿のまへにつらなりたつ、左右近中將おの〳〵一人すゝみて、靴をぬぎ弓箭ときて、南戸の左右のとばりをかゝぐ、打拂のはこさか枕八重疊など、上卿參議辨少納言外記史しだいにこれを供ず、內へとり入ぬれば、かもんのかみ參て神座をしく、南枕にしく、先一丈二尺たゝみ、そのうへに六尺のたゝみ四帖、枕のかた二帖はうらあり、その上に九尺の疊七帖、そのうへに八重だゝみしく、九尺の中一帖をいさゝか東に引いでゝ、うちはらひのはこをおく、さか枕は八重だゝみの下に枕にしく、內侍參て御ふすまをやへだゝみのうへに奉る、御櫛御扇そばにおく、御くつ御あとにおく也、內侍しぞきて神殿に入御あり、神座の東に巽むきに半帖を敷て御座とす、主上の御面笏を正しくしてつかせ給、揖あり、（此いうは人しらぬ事也）その前に又たむでうを敷て、そのうへに神座を供ず、ばいぜんのうねべ神食薦もちて參て、たん帖の上にしく、後とりのうねべ御食薦を持てまゐる、ばいぜんとりてしく、平手ばこの御はん、生物干物くだものゝはこども次第に入まゐり

ぬれば、うねべひらでを取てまゐらするに、次第に入させたまふ、おき樣二のやうあり、二行にすう、五出の樣なり、神今食は五出たよりある也、ひらですくなきゆゑなり、くはしき樣次第にみえたり、粥まゐる、しろきくろきまゐりて、本柏にてそゝぐ、なうあいの御はん御きまゐりぬれば、宮主のと申、御手水は事はじまらぬさきと、事はてゝと二度あり、大かたは大嘗會の神供の儀におなじ、うねべ又申て後ゑだいにまかる也、はじめまづ御手水まゐる、其後いさゝか祈念の事あり、はてゝのち又御手水さきのごとし、猶秘事どもはゑるすにおよばず、其後かへりいらせ給、丑一に又曉の御せんまゐるさきのごとし、みないでゝうねべ參て、よひあかつきの神のおものことなくゆゑなくまゐりぬと申せば、よしと仰ありて、御ゆかたびらを給、ぬひどのゝ帛の御裝束、宮主にたまふ、神祇官にておこなはるゝをりは、まづ官の廳へ行幸なりて、はくの御裝束奉りて、神祇官へ行幸ある也、神膳のほどは、近衞府の幄にてかぐらあり、夜ひの御せんの程、とり物から神までうたふ、夜もすがらうたひて、還御の御こしの左右にうたひて供奉す、こゑたえず千歳をうたふ、月花門の内にてとゞまりさぶらふ、

十二月十一日神今食、六月におなじ、

〔公事根源六月〕神今食　十一日

御神事は一日よりはじまる、戌刻に行幸有、先大忌の御湯をめす、卜にあひたる上卿陣に著て、辨をめして諸司の具否をとふ、小忌御燈を供ず、もとの火を消てともしあらたむ、上卿宰相少納言外記史、卜にあひたる人小忌をきる、近衞司藏人もみなきるべし、行幸の時、御輿は蔥花也、鈴の奏なし、中和院に行幸なりて、神嘉殿の大床子の御座につかせ給ふ、御ゆの後、采女時を申、内侍髮あげて、神殿に參りて寢具を供ず、これよりさき左右近のつかさ、殿の東西に陣を引、開門闈司などはてゝ、上卿以下神殿の前につらなりたつ、左右近の中將おの〳〵一人すゝみて、くつをぬぎ弓箭ときて、南の戸の左右の帳かゝぐ、うちはらひの箱さか枕八重疊などを、上卿參議辨少納言外記史次第に是を供ず、内へとり入ぬれば、かもんのかみ參て神座をゑく、南枕にして先一丈二尺のたゝみ、其上に六尺のたゝみ四でう、枕のかた二帖はうらあり、其上に九尺のたゝみ七帖、其上に八重たゞみしく、九尺の中一帖をいさゝか東にひきいでゝ、うちはらひのはこをおく、さか枕は八重たゞみの下に枕にしく、内侍まゐりて御ふすまを八重だゝみのうへに奉る、御くし御あふぎそばにおく、御沓御あとにおく也、内侍退きて神殿に入御あり、神座の東にたつみむきに半帖を敷て御座とす、主上御面をたゞしくしてつかせ給ふ、此間の儀は人ゑらぬ事共也、神のすごも御すごもなど敷て、神膳を供せらるゝ儀有、白黑御酒まゐりて、もと柏にてそゝぐ、なうあひの御はん御きまゐりぬれば、宮主祝と申、御手水は事はじまらぬさきと事はてゝと二度あり、大かたは大嘗會の神饌の義に同じ、うし一に又曉の御せんまゐるさきのごとし、神祇官にて行るゝをりは、先官廳へ行幸なりて、帛の御裝束奉りて、神祇官へなるなり、神饌の程、近衞の幄にて神樂あり、よひの程とり物韓神までうたふ、よもすがらうたひて、還御の程御輿の左右にうたひて供奉す、聲たえず千歳をうたふ、いと興ある事にや、

〔西宮記六月〕神今食

天曆三年七月二十二日、於中和院有神今食祭事、依穢延引天陰雨降、藏人頭雅信進左仗、申中納言元方卿云、依雨行幸停止者、上卿仰外記云、差使部仰諸司云云、造酒司申故障、中務省申輔障、以左衞門佐國珍爲輔代、以侍從厨預眞興爲祐代、年來以別當爲祐代、而今夜不參、仍准去十二月神今食例、雖无便宜、所申行也、待曉之間已徒然、仍上卿召棊局、侍從所棊局也令國珍與内匠頭尹輔手談募以一盃云云、

〔左經記〕寛仁三年十二月十一日癸巳、臨夜參神祇官、爲行神今食事也、外記惟孝云、月次祭上卿申障不被參、仍依攝政殿仰、雖催諸卿、皆申障不被參、仍有仰、左中辨爲上卿代、被行祭事、其儀辨著北廳上

座、召了使皆立、上卿歸、及秉燭事了、頃之右大將左大辨被參、次右大辨被參、（右大辨稱所勞由、被退出之）供神物幷神座等、皆依先例供之、事了上下退出、

〔春記〕長曆二年十二月十一日癸酉、今日神今食、不御中院、仍所司於神祇官行此事、內侍向其所云々、子二剋許、采女□子參朝干飯方、直申參候之由、仰云、申セ、神供事、曉夕平安奉仕了者、勅は、（○は恐誤字）少時出御南殿、予候御劒、侍臣秉燭祇候、御拜了還御、

〔中右記〕嘉承二年六月十一日、戌刻許參神祇官、神今食之間依當卜也、入從南廳南面著北面座、先藤宰相顯實參著、（南面座）頃而藏人左少辨雅兼參入、（著北面座）外記兼弘史則定幷諸司等參入、又內侍采女氏氏等參入了者、又供神物具了哉相尋之處、申具了由、（○中略）時守稱亥二刻、則起座於此廳北邊各著小忌、行向北廳邊、參議以下相從、（主水司供手水）予取打拂向神殿供之、官人開戶受取之後立西、參議與辨舁坂枕、（參議立西、猶可立東歟）供了參議與予列立西、（東面北上）依无少納言、藏人辨又供神座、（立東）各還著本座、（不脫小忌）供夕膳、官人等稱警蹕、次有勸盃、（藏人辨勤之、次及上官座）依无役人不及二獻、次立箸、時々供氷顆、頃而撤夕膳、（先申案內）其後及丑二刻、供曉膳之由申上、稱警蹕、頃而撤之、（申案內及寅二刻）上卿以下如本行向撤了、次第如供儀、各退出、

〔顯廣王記〕安元三年（○治承元年）六月十二日庚辰、神今食御飾、立大藏卿幄於柏殿跡、辨備之、同依柏殿燒亡也、上卿權大納言實房卿、行事右少辨光雅、

〔吉記〕壽永元年六月十一日庚戌、雨降、今夜神今食也、（○中略）戌剋參神祇官、（雖須駕毛車、夜深雨降、仍用綱代車、差綱有何事乎之由、堀河納言被示之故也、）入官北門、（此門內不逐前、總禁高聲狼籍事云々、然而喧嘩甚多、）此間召使來會、予經北廳東至于南廳、官掌出來褰幔、入北面自東第三間著座、其座爲體、東一間敷親王座、（西面）同二間敷上卿座、（北面、座前置式筥、）同間敷參議座、（南面）而退東及第三間敷之、雖須令敷直、依无益不直之、同三間敷辨（北面）少納言（南面）座、（各正不對違敷之）第四間廻南敷上官座、第五間敷召使官掌座、（召使南也、官掌北、並東面、今日座體如此、）予著定之後、少外記師親左少史能光官掌召使等著座、（予參入之間、各暫起座歟、）相次少納言重綱參著、及亥終藏人左少辨光長（帶劒平緒、不具門部如何、）參入、（○中略）良久上卿新中納言實守參入、（今日始被從神態、殿親右府例云々、）入南面第三間立定廣筵下、一揖跪脫沓、更立著座、先是辨少納言已下退座、予一身在座、（○中略）外記不申代官、依上卿新任歟、使部申時、先是內侍（伊與）早參、次上卿已下起座、如參著路、下﨟先上卿於東砌壇上被著小忌、予於北砌著之、（召使持來之、寸法不相叶、如形引懸之、）辨少納言同著之、外記史不著之、依不具云々、於神座幄坤主水司供手水、上卿已下洗手、（先是帶劒人撤之）次列立北廳南庭、（北上東面、去北砌二許丈、上卿幷予東面立、辨少納言頗寄南列立、北上西面、予立定一揖、上卿不被揖、依爲白地列歟、予揖慥不尋知、又可引幔、若依雨令撤之歟、）次上卿差笏取打拂筥、次予幷辨舁坂枕、（予差笏舁東、辨舁西、）進中戶壇上跪、諸司自內來逢請取之、予拔笏一揖復本列、次少納言外記史等奉仕御疊、供神座了之後、上卿已下復本座、（暑月或撤小忌歟、上卿猶依著、予以下同著之、）次可供寢具、而依遲遲、且可供神饌之由辨下知之、祭祀法猶可守次第歟、次有勸盃、一獻少納言重綱勸之、內舍人取杓、上卿被擬予、予擬左少辨、辨揖起座取盃、次擬外記、次少納言復本座、依上卿命止二獻、守辰丁頻申時、次供曉膳、次上卿以下起座、撤打拂筥坂枕御疊等、次上卿已下退出、予脫小忌給召使、于時天曙、歸家未及日出、今日儀神事違例、朝家陵遲、只以之可察、

○按ズルニ、神事違例トハ、神事ノ刻限ニ臨ミテ、神服用途等ノ闕如セシヲ云フ、猶ホ調度用途ノ條ヲ參看スベシ、

〔永昌記〕嘉承元年十二月十一日戊辰、參神祇官其儀如例、所司兼居饗、時守每點申時、亥刻上卿以下起座、先手水、次著小忌、次列前庭、次開申戶、次令供神具、（上卿打拂、宰相辨坂枕、少納言疊、）歸立庭中、次歸著本座、次縫司供寢具、次供神膳間警蹕、□令問具否、次一獻、（少納言家隆）次二獻、（右少辨爲隆）無下箸法等事、丑一刻供曉膳、先縫司供寢具、次供神供、及寅撤之、次上卿以下參向、撤打拂坂枕、如初、此間如初列立、事了各次退出、右衞門督宗通、藤宰相顯實、右少辨爲隆、少納言家隆等也、

〔長秋記〕大治二年十二月十一日丙寅、神今食也、參中和院、便入自朔（○朔恐藻誤）壁門著中院西舍、其儀如

去月新嘗會經親王座不居物上宰相座机二立也辨少納言長机二脚相置事如前日先之左少辨實親外記盛方史行政在座辨問予云上卿參時辨以下列立事舊記不可然之由問答了而近來猶出立爲之如何下官云如然事只隨近來例所說也云々上卿民部卿忠敎卿被參親王座不居物之由被問辨進來申不居之由（愚見多居之如何）座上不敷軾之由被問仍加催之處掃部官人代之著布衣者敷之上卿咎被追歸下官云召使如此役常事也者仍召使敷之上卿被問外記之代官也可申外記乍座申云代官不候又問辨云供神物具歟辨申云具了次令申時時守申云戌一不知故人々云可申正時仍申云亥二仍上卿以下起座出舍之間官下部申云供神物御飯未盛了之由神官等所被申也上卿云何無實於言上者非左右限不如歸座諸事具了予同之（此本末申具由一也不知故）良久官掌申事具由仍起座出舍著小忌參進儀如常昇堂上時脫沓儀同下官說脫階一級上少納言忠成荷入疊二度如例事了歸座上卿下官不帶劒少納言帶劒勘杯料也待供神物了勘杯（待事之由上卿所被示也）內侍但馬早參行事云云子一刻罷夕膳丑刻供曉膳寅一刻撤神座供罷時皆申上蒙許撤座時上卿不待事了退出不知是非（略）今夜民部卿具布衣前驅二人是非失禮貧家之所爲也　大治五年十二月十一日己卯相扶所勞沐浴潔齋參神今食（略）召外記參座後問諸司具否大略具了又問供神物事於辨答云未具之由所仝申也允刀自未渡神服御飯未盛云々重仰云刻限滿早可被加催歟此間聞內侍參由又參議著南面座此後供神物由辨申上予云可仝申時歟（略）下官於舍東庭著小忌喚使持來也辨幷政官等於南面著之參議少納言於北庭著是辨云小忌極不法也曉膳時改替可進由可召仰者然而不可叶事歟辨云就北舍時經大樹東歟將西歟下官云此事不詳但於今夜樹西荷立日祭棚等而已口無路經東可參也者仍人々隨是（件棚可撤也）於御座幄西庭洗手神官進小杓手巾等也次入幄中南上東面立上卿宰相如此辨少納言南上西面也相公云無日蔭葛如何予云日蔭新嘗會用也於神今食不然云々掃部官人捧打拂筥立幔門際予進寄指笏取之昇壇上之間同役官人走去入自東面戶開南面戶跪戶內下官跪壇上授之取笏左回立列件打拂筥等是板上置五尺許布也次參議辨昇坂枕參議立東也次少納言外記史掃部官人三人供御疊二度了引歸南舍仰辨云時守向陰陽寮慥時刻可申時就中於丑時必可申者供神物問諸司高聲也舍辨仝制止前例不可然事也（略）辨打手盛供神物了後杯酌二廻勘杯先少納言次辨傳盞此後且談且眠鷄鳴後使部申時丑二云々催曉膳辨云供夕膳撤御座又曉饌撤御座歟予云夕膳時供御座曉膳供了寅時撤御座之由所見給也者曉膳供了由官掌申仍如當初參進洗手次第撤之閉神殿戶了後副壇下東行出幔脫小忌給召使退出

〔康富記〕應永廿九年十二月十一日甲子月次祭幷神今食也（略）神今食式南廳代置之每事如例獻盃二獻也一獻少納言二獻辨也上卿居盃於笏傳參議參議又居笏傳辨乍座被取之後日此事予尋申淨居庵之處臺盤之時者不可傳笏可渡諸司也今夜儀誤之由被仰之去六月大炊御門中納言如此仝進退給同違失之由有仰二獻之時少納言居盃笏被指出予前之間予取之揖立經史上進少納言前跪指笏取盃右廻復本座更置盃座上拔笏揖後置笏於座下目史飲了後予向少納言長廣朝臣申云先盃御笏ニ居テ被出之予進賜之御所爲ニ相違シテ見候歟御存知如何候哉進賜盃之條定樣所覺悟也少納言返事云居笏之條違失也御進退宜之由被命了爲後日如此申之者也其外事如常及夜半其儀畢八々退散窮屈々々職豐同道（練歩）歸宅官掌不著南廳代可謂不參也

〔薩戒記〕應永卅二年六月十一日己酉陰晴不定午巳後雨臨晚聊日影日沒已後又雨月次祭上卿葉室中納言宗豐神今食同人兼行之宰相飛鳥井宰相雅世云々後日納言談曰欲行神今食之間殊甚雨雨回南廳代幄不可叶又雨雖休止溜水流入舍內無可著座之樣相尋先例之處無南舍之時被用南門簷下之由官外記等申之而又當時南門無實依以今案於東門下行南舍之儀畢若有相難之輩歟如何予曰依南廳無實於南門行之例歟依無南門又於東門下被行之何事有哉此外者可被停止哉

大殿祭

甚不便、所被行尤可然歟者、納言曰、上卿猶難自由之由加難、人有之云々、可尋事也、臨期可經奏聞哉、未聞如然之例也、卅三年六月十一日癸酉、傳聞月次祭上卿葉室中納言、神今食上卿同人、〔卜合參議也〕中御門宰相〔宗綱卜合〕等參向、依降雨南廳代幄不能著座、仍可用南門下之處、當時無其實、仍於東門下行之云々、件座依上卿命、爲西上、以神殿方爲上之故云々、此事甚不甘心、猶擬南廳可爲東上歟、依爲西上上卿已下出門外、自東方進著云々、似無便宜歟、抑所謂神殿者、北廳事歟、將八神殿事歟若爲北廳事者、爲南廳代之時、則上卿著南、參議著北、强以北不爲上歟、若又爲八神殿事者、南廳代之時同以東爲上、旁上命不得其意者也、凡南廳代不相叶之時、先例於南門下行之、其時可爲南上者神殿當下方、何不准之哉、東門之儀、東上頗不甘心歟、後日宰相所命又如此、

〔儀式一〕大殿祭儀

神祇官以宮四合〔一合納玉、一合納切木綿、一合納米、一合納酒瓶、〕居八足案二脚、令神部四人舁之、中臣忌部官人宮主史生神部等〔著木綿鬘襷〕左右相分前行、御巫列於案後、至延政門外、置案於簀子上〔掃部寮預設之〕大舍人叫門如常、闇司奏云、大殿〔保賀比能〕事申賜〔牟止〕宮內省官姓名叫門故〔留〕申、勅曰令申、闇司傳宣云、姓名〔乎〕令申、宮內省進就版奏云、大殿〔保賀比〕供奉〔牟止〕神祇官姓名候〔止〕申、勅曰喚之、宮內省稱唯還出喚、神祇官稱唯中臣忌部官人著木綿鬘〔忌部更加立綿襷〕立案前直進仁壽殿先、是御巫等入自宣陽門候於內裏隨案共入、至殿東簀子敷上、御巫等執宮中臣忌部御巫等以次入仁壽殿、〔御巫一人進榊殿散米、忌部執玉懸殿四角、次御巫等散米酒切木綿於殿內四角退出、中臣候仁壽殿南、忌部向巽微聲讀祝詞訖、至於浴殿懸玉於四角、次懸厠殿四角、御巫等散米酒、如初、自陰明門退出、次宮主引神部、至炊殿懸木綿散米酒訖於神祇官、賜祿、但御巫料送內侍司令賜、〔神今食祭、但祭前者不賜祿〕

〔祝詞考中〕大殿祭　宮內省式に、神今食新嘗二祭明日平旦大殿祭、此二祭の前後に、大殿祭有事、貞觀儀式に祭前者不奏問、無賜祿さ云にてしらる、前は輕き故に是にも不記、祿も賜らぬならん、

〔延喜式一四時祭〕大殿祭〔中宮准此〕

絲四兩、安藝木綿一斤、宮四合〔各徑一寸、米四升、酒二升、坩一口、盞二口、案二脚、右神今食明日平旦、以宮四合置一合盛玉、一合盛切木綿、一合盛米、一合盛酒瓶、八足案二脚、令神部四人舁之、中臣忌部官人宮主史生神部等著木綿鬘襷、左右前驅、御巫列於案後、至延政門置案於門前、大舍人叫門、宮內中臣忌部官人宮主史生神部等左右前驅、御巫列於案後、至延政門置案於門前、大舍人叫門、宮內省官人退出、召中臣稱唯、即兩官人著木綿鬘〔忌部更加立綿襷〕立案前直進、御殿先、是御巫等自宣陽門入、候於內裏、共入至殿東簀子敷上、即御巫等各取宮、中臣忌部御巫等以次入御殿、忌部取玉懸殿四角、御巫等散米酒切木綿殿內四角、退出、中臣侍御殿南、忌部向巽微聲申祝詞、畢次至湯殿懸玉四角、次懸厠殿四角、次懸紫宸殿四角、御巫等以次散米酒如初、〔御巫一人進承明門散米酒〕從陰明門退出、次引宮主忌部至御炊殿、懸木綿散米酒如初、畢內藏寮賜祿有差、〔數見內藏式〕還至本司引使部已上就宮內省解齋所、〔事見儀式〕

〔延喜式三十宮內一〕凡神今食新嘗祭明日平旦大殿祭、省輔已上、率諸忌部等、至延政門、令大舍人叫門、闇司傳宣如常、輔入奏、〔諸祭事皆輔奏之〕其詞曰、宮內省申久、大殿祭〔此云於保登比能保加比〕供奉〔牟止〕登申、

〔西宮記六月〕神今食中院儀

神祇官祭大殿、官人率御巫座摩等參上、祭御在所御湯殿御裝束所御厨子所還到御在所巽角、忌部微聲讀祝詞及紫宸殿、

〔江家次第七六月〕大殿祭〔藏人一人相副令奉仕之〕

神祇官人〔中臣忌部〕先石灰墳、次經御帳後奉仕夜御所、次朝餉、次御湯殿、次御樋殿、次御膳宿、次御厨子所、次南殿御膳宿、散供畢插土錢、〔以絲貫之〕

〔延喜式十三中宮〕凡六月十二月神今食、十一月新嘗祭神態畢、後日平旦神祇官祭御殿、亮若進一人相副